

再追白——別な題を見付け給へ——L'education sentimentale はいけない。

註(一)是は L'education sentimentale 「感情教育」を指す。

(二)多分ガイツチン公の譯した「煙」を指すものであらう。

七、

カル、スルーへ、オーテル、フランス・マックス。

日曜日一八六九年一月二十五日。

僕はまつたく君の消息を知らなければならぬのだ。我が友よ。さあ二語だけ言ひ給へ——君は何處にゐるのか、又君の小説はどうなつてゐるか？僕はクロワツセーに宛て、君に手紙を出した、多分君は忙がしくて巴里においでだらう。兎もあれ君が永くそこに滞在しようと僕は想像しない。

僕は未だ君に寫眞の御禮を言はなかつた。それは大變武張つて、よく整つてゐる、けれどもそれは矢張り君自身だ、それが何時見てもいゝのだ。何ぜ君は本當にいゝのをとらせないか僕は屢々クロワツセーを想ひ、自身に言つた、それは鳥禽を解化するに好い巢であつたと。

僕のことをいふなら、僕は今まで殆ど何にもしなかつた。僕は好まぬ仕事の一端に着手した、そしていや／＼ながらそれをやつてゐる。僕はそれを止すことは出来ない、然しそれが終つたときには、僕は心からホツと一息吐くだらう。

僕が自分の出版者に約束した或る文學的回想の形をした或る断片的粗材を除いては、僕はまだ此種類のをやつたことがない、そしてそれは面白くない。臆セント・ブーヴについて二時間！僕はそんなことが彼を果して多く悦ばせるかを疑ふ。

僕には想像の及ぶ限り一番よい母と想はれる君のお母さんによろしく傳へて呉れ給へ、又君自身に善い、心からの握手を贈る。

君のイヴァン、ツウルゲーニエフ。

追伸——母堂へよろしく。

八、

バーデン、チーアガルテンシトラツセ 三、

日曜日、一月三十日。

キユスタヴ・フロオメルへ宛てた書簡

親愛な我が友よ——サンクト・ペテルブルグから出る露西亞評論の第一號、それを我々が露國の使者と呼ぶ(即ち露國の *Revue des deux Mondes*)に君の本に對する(只最初の部だけ)素晴らしき記事である。それは最も細かく解剖せられ、全體の結構が語られてある。著者も又大變褒められてゐる。その記事は『佛國新社會』といふのだ。僕が是を云ふのは只今は君の頭が他のことで一杯になつてゐるだらうけれど、君がそれを悦ぶことであらうと思ふからだ。

僕は四五日の後バーデンを立つ。僕はワイマルで二ヶ月を費すつもりだ。僕の所書は *Hôtel de Russie, Grand Dury de Saxe-Weimar*. それから四月に露西亞に戻る前にパリを通る。君のことを知らし給へ。君は勉強しておいでか？君のアントワヌは屢々僕の頭に戻つてくる。昨夜寢床に入るとき、僕は *Le Club de l'Intelligence* の場を読み返して、その西班牙人に噴き出してしまつた。

僕に代つてマダム・サント、デユ・カンその他誰にもよろしく。

君の最も親愛な、ツウルゲーニエフ

## 九、

オーナル・ド・リュツシイ、ワイマル、

一八七〇年二月二十日。

我が親愛な友人——ムッシユ・ジュリアン・シユミットが *L'Education Sentimentale* のことを書いた文は未だブロイシッシユ・ヤールビュッヘルに掲載しられない。それが掲載せられたなら直ぐに君へ送るつもりだ。若し御望みなら『マダム・ボブリー』に關する彼の論文を送るやうに頼まふ。それは去年發表せられた『歐洲の使者』の第二號は只今取つたが、僕が話した記事の第二と、最後の半分がかゝけてある。それは眞箇小説の詳しい概要に外ならぬ。

多くの人は、フレデリックの生涯には、餘りに『女』の關係がかゝつてゐると思つて、佛蘭西の青年はみんな、あのやうなものかと怪しんでゐる。左様、人々は確に君に對して公正でないけれども今は君が自身の足を踏み締めて、傑作を讀者の頭上に抛りつけてやるべきときだ。君のアントワヌは恐らく此飛道器となるだらう、餘り永くひつかゝつてゐるな、といふのが僕の繰り返していふ詞である。のみならず、君は、人間は自分を測る尺度で自分も測られるものであることを忘れてはならぬ、そして君は君の過去の重荷を背負ふてゐる。君は多くのエネルギー

キヌスタグ・フロオベルへ宛てた書簡

イを有つてゐる。西班牙の諺に曰く El hombre debe ser teroz (人は勇敢ならざるべからず「譯者」といふ、藝術家は殊にさうである、若しも君の本が或る立派な價值のある人十人だけに持ち去られたとしたなら、それだけで澤山だ。僕が斯ういふのは君を慰めるが爲めではなく勸まさんが爲めであることは君も御察しだらう。

僕はもう十日も此處にゐる、そして僕が唯一の考へは、どうして暖を探らうかといふことだ。此處らの家は建て様が悪い、そして鐵製のストーヴは用に立たない。君は Revue des deux Mondes の三月號で、僕の小品を御覧になるだらう。

それはホンのつまらぬものだ。僕はもつと『肝要』なものを拵へてゐる、少くとも僕は仕事を準備してゐる。

僕は露國へ歸る前にバリへ行く。それは四月の末頃であらう。我々は一寸と會はう。若し君がマダム・サンドに會ふなら、僕から何卒よろしくと傳へて呉れ給へ。デュ・カンやユツソン一家へ僕からよろしく。

最上の愛を君へ贈る、勇め！何といつても君はフロオベルだ！。

君のイ、テイ。

ロンドン、メルボーン、ボーモント・ストリート、十六

一八七一年五月十六日

幸にも、我が親愛な友よ——その報道は絶対に眞實ではなかつた。僕が毎日會つてゐるマダムは五十四歳であるだけで、死んではゐない。若しその報道が眞實であつたなら、僕は君に答へが出来たらうとは信じられない。實際君の手紙は深く僕を感動せしめた。人が眞の友人を持つことを感ずるのは甚だいゝものだ。僕は君がそんな友情を僕に示したことを感謝する。

僕は此處に三週間居る。僕は冬の終りと、春の初めを露西亞で過ごす。僕は八月の一日までなほ此處に滞留する、それからバーデンへ行く。佛國を横断するとき、僕はバリに足を留めよう、若しその時まで、バリが残つてゐたなら。そして君にお目にかゝり度い。恐らく君は、穴の中に土鼠のやうに、我々が隠れ住むバーデンに来るだらう。そして君は我々と共に、其處に君自身をも隠し得やう、然し何は措いても、君自身の消息を總て知らして呉れ給へ。

君は僕が年の始めに書いてあげた手紙を受取つたか？あの恐ろしい騒ぎの間、君はどうしてゐたか？君はクロワツセーにとまつてゐたか？僕は訝がる、君が孤立と集中の全力を以てしてさへ、納屋の開いた戸口に於て、寂しく、當もなく、風に吹き捲くられる藁のやうに、あつち

キユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

「ここに揺り動かされない譯にはいかなかつたではあるまいかと。君は仕事をしたか、それとも時から時を、空虚な、疲労した實在を抜き出すに満足してゐたのか、どうだね？ 僕等は困難な時期を通過しなければならん——僕等、生れながらの傍觀者達は、『アントワヌ』はどうなつたか？ それは僕の心に根を張つた。」

僕が英國に居るのは遊びの爲めでなく、戦争で殆ど身代限りをした僕の友人(ヴィアルドオ)一家が、小々金儲けをしに来てゐるからである。が、然し英國人には或る善いところがある。然し彼等は皆、そのうちの最も賢い者でさへも、斯麼困難な生活を送つてゐる。人は彼等の氣候に馴るゝが如く、それに馴るべきである、そして又そこ以外に何處へ行かれやうか？

マダム・フロオベルはどうしておいでか？ マダムに僕からよろしく。デュ・カンから何かたよりがあるか？ 彼は混雜のうちに、他の多くの者と同様に姿を隠した。二三行僕に書いて呉れ給へ。も一度僕は君が示す愛情に感謝して、君に僕の最上の愛を送る。

君の友人、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸——僕がたつた今君の手紙を受取つたことを言ふ必要がない。

## 十一、

ロンドン・メルボーン、ボーモント・ストリート、十六、

一八七一年七月十三日。

我が親愛な友よ、——僕が君の手紙にもつと早く返事を出さなかつたのは、さうする勇氣をもたなかつたからだ。パリの事件は僕を呆れかへらした。僕は墜道を通るとき、列車の中で人が無言でゐるやうに無言であつた。恐ろしい音が人の耳を満たし、人の腦を死なす。今それは殆んど歇んで、僕は八月の……頃、先づ十五日から二十日までの間に、君のところへきつと行き、アントワヌの朗讀を聞かう。僕は Le Grouse の爲め八月の始めにスコットランドに招待せられた、けれども十五日には暇になる、そしてバーデンへの歸途、僕はバリカルアン。——クロワツセーの意味である——に寄らう、若し君が其處に居るならば。

君が本を半分仕上げたことを聞いて、僕は嬉しい。君は少しぐらゐ急いだつて何にも失策の危険はあるまい——まつたくだ。僕は目を睜り、耳を欬て、腦を緊張さして聽かう。僕はきつとそれは美しいと信じる。

僕は君に再び獨逸に來給へと慫めまい。僕は君が足を獨逸に入れるのを嫌ふことをよく了解

キユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

した。僕は亦佛蘭西のことについて僕の心にある總てのことを君に言ふまい。僕はそれを二三の言葉で總括しよう。僕はそれを可能であると思ふ。我々が會ふとき、我々は靜かに此事を論じよう、そして遂に——生氣のない結論がつくだらう、それは確かだ。君が言ふやうに、君等の復讐をするのは露西亞の立場だかどうだかは僕は知らない。けれども獨逸は現在非常に強い、又僕等が生きてゐる間は多分強からう。

僕はマダム・ユッソンが發狂したといふ手紙を受けた、次には彼女が死去の報知を得た。是は眞箇か？僕は水泳の教師（彼も亦普魯西人であつた）が、いつも僕に怒鳴つたことを記憶する——『君の口を水の上に出してゐなさい、Schwimm Notti』と。人の口が水の上に出でゐるうちは、人はなほ人なんだ！

君は此間始終人として残つた、君は働いてゐるからだ。今からはずつと樂になつていく。

マダム・フロオベルと、母堂からの傳言有難う。僕からは君に愛を贈る、そして八月までの間左様ならを言ふ。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 十二、

アルソオ・ハウス、ビットロフレイ、スコットランド。

一八七一年八月十四日。

我が親愛な友よ——君が二通の書信は、此處スコットランドの中心、僕が一友と共に Le Gross を射てゐる處で、僕を捕へた。僕は明後十六日此處を去り、再びロンドンから出發して、十八日にパリに着くのだ。僕は當日パリに君のをられることと願ふ、そして僕がクロワツセーに行かんで済む事にしたい、といふのは僕の時間が恐ろしく短かいからだ。僕はパリではリュ・ラフ イットのオーテル・バイロンに滞在する。どうぞ僕が到着したとき、君から一通の手紙を其處に僕が見出すように、取計つて頂き度い。大事をとつて、僕は此手紙を複寫し、寫しをクロワツセーに送る。

次に會ふまで僕の愛を君へ。君の『アントワヌ』を仕上げ給へ！

常に君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 十三、

キヌスタヅ・フロオベルへ宛てた書簡

リュ・ド・ツウエイ、四八、

日曜日、午前十時。

我が親愛な友よ、——僕は今日君に會へるようにと希望した、けれどもそれは出来ないことを知る。僕は明日、きちんと一時に君のところへ行く。

人生そのものは一層困難になるのではない、然し何かをすることは一層困難である。人生は我々の頭に草の如く生えのびるやうに見える。左様なら明日。

君の忠實な舊友、イヴァン・ツウルゲーニエフ

十四、

同所、

水曜日朝。

親愛な我が友、——僕はマダム・ヴィアルドオに昨日、マダム・エ・グリジイの申出た願ひを話した——相憎くそれは不可能である。マダム・ヴィアルドオは決して私宅で唱はないことにきめてゐる。

彼女は、若し一度應じたならば、他の人々に拒絶する理由がたゞない程、屢々求められてゐる。彼女は此特別な場合に何事をも爲すことの出来ないのを非常に遺憾としてゐる。もつと若かつたならば、彼女もそれをする事が出来たらうが、今彼女は大に自重するの餘儀なき次第である。そこに、君、人は正確な眞實を看取するのだ。

僕は確に日曜日に——恐らくはもつと早く来るだらう。僕は多分今夜マチルド公妃のところへ行くだらう。

多くの愛を。

君のイヴァン・ツウルゲーニエフから

十五、

パリ、リュ・ド・ツウエイ、四十七、

一八七一年十一月。

我が親愛な友よ、——こんなことが起つた……僕の伯父、エム・ニコライ・ツウルゲーニエフが近頃パリで物故した。彼は非常に善い、且つ立派な人であつた。僕は只今サンクト・ペテル

キユスタヴ・フロオベルへ宛てたる書簡

ブルグから死者略傳を書いて、今夜送れといふ電報を受取つた。僕は承知して、此處にその仕事に縛られてゐる。僕は僕の文を明日ブジウブルの家へ持参して、いろ／＼な報告を得たりなぞしなければならぬので、善い『アントワヌ』は明後日まで待つてくれるだらう。それぢや木曜日まで左様なら。

一昨日の君の手紙は君の下僕が置いていかなかつた。彼は多分家を間違へたらう。リュド・ヅウエイ第四十八はブラース・ワテンミイユの角にある。多くの愛を、

イブアン・ツウルゲーニエフ

註、(一)ニコライ・イワノヴィチ・ツウルゲーニエフは佛語で書いた著名な本「露西亞及び露西亞人」の著者であつた。彼は皇帝アレキサンドル第一世の信頼する顧問であつた、そしてその君主の下に於ける農民を改良するに多くの貢献を爲した。けれども皇帝ニコライに對する一八二四年の反亂に加はつたといふ誣告を受けて、彼は佛蘭西に流竄のまゝ、一八七一年十一月十日に死んだ。

## 十六、

モスクワ、一八七二年六月二十六日、

我が親愛な友よ、——君は此夏中の君の計畫を僕に送つて來た。僕のは此處にある。

注意——目下僕は恐ろしい痛風に襲撃せられて、モスクワにゐて、長椅子につながれてゐる。去る十月烈しくそれを患つて後は、殆どそれを覺悟してゐなかつた。それは餘りに普通になつて、人々は餘りに多く僕を祝賀する。(その爲めに長壽などの免狀を僕に與へて)幸にも、襲撃は餘り厳しくない、そして僕は今露西亞の首都を日曜か又は月曜に去る希望をもつてゐる——今日は水曜日だ。

僕は矢のやうにバリに向つて行く、次にそれからツウレーヌの僕の娘が、丁度僕を祖父にしてかけてゐるところへ行き、次にそこから、ブルイ・シユル・ソムムに行き、そこで僕の舊友ゾイアルドオ一家に會ふのだ。僕は出来るなら忘れ、且つ働かう。次に僕は愛する一人のフロオベルに會ふ爲めに、バリへ行かう、そしてその人と一緒に、その住所のクロワツセー乃至ノアンのマダム・サンドのところへ行かふ。サンドは我々のそこへくるのを欲してゐるやうだから。その次、十月から先はバリだ。まづ此の通り!

我が親愛な友よ、老年は未來、現在、又過去の上にさへ立ち罩める悲しい雲であつて、かすむ記憶によつて過去を悲痛ならしめる。(僕は僕之は極めて拙劣な佛蘭西語だと思ふが、かまつた

ことではない。我々は自身を此雲から保護しなければならぬ。君はそれを十分にやつてゐないやうに僕は思ふ。

僕は、君が御存じのやうに、君と僕と二人で露西亞を訪ふことが君にとつて好い結果を與へると信ずる、然しそれは田舎の匂ひに涵され、凡て一様に眠りに涵され草苺、鳥、日光、影、我々の周圍に靡くライ麥の二百エーカーの畑などで満された、舊い郷土の小徑をさ迷ふことに費されねばならぬ。それはいつも爽快なものであつた。人は壯嚴、雄大、單調の感じと共に身に忍び寄る情性を發見する。そのうちには何か動物式なもの、何か神聖なるものがあるやうな感じを發する。人は爽かな沐浴をしたかのやうな氣持で、そのうちから立ち出づるのである。そして再び日常生活の水車を手にとりあける。

君は君が身内の著者を落膽さしてはいけない。且その著者は終局まで勇敢に進まなければならぬ。僕は君がマダム・ヴィアルドオの愉快的音樂會に出席したことを聞いてゐる。人々はそれを喜んだやうに見える。

君は僕の畫について何事も言はないね、嫌ひか、それとも君はそれを見ないのか？左様なら、又それでは、我が親愛な友よ。我々の頭を、ふりかゝつてくる浪の前に高く突き出してゐ

よう。

多くの愛を君へ。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

### 十七、

セント・ブルレイ・シユル・ソム、メゾン・リュオー、

火曜日、一八七二年七月三十日。

只今君はどこにおいでだね、我が親愛な友よ、そして今から冬までのうちには、君は何をする積りかね？一行でもいゝから直ぐに手紙を呉れ給へ。僕の方ちや、此處、僕が手紙を書いてゐる穴の中に、僕はもう二週間も籠つてゐる。若し僕の脚を以前よりも一層執濃く此呪はれた痛風が犯さないならば、僕は完全に幸福なのだ。それは六週間前僕をモスクワで襲ふてから、僕の身を立ち退かうとしない。僕は三、乃至四度の發作を経験した。

僕は種木杖の助けを以て歩き出した、その次には二本の杖、次には一本、今は此處に再び殆ど少しも動くことが出来なくなつてゐる。老年は恐ろしいものだ、シセロ氏の御意見には充分

キユスタヴ・フロオベル宛てた書簡



敬意を表します。

僕は此處にヴィアルドオ一家と共にゐる。僕は、仕事に何の邪魔も受けない、美しい部屋をもつてゐる。然し勿論、何物も出来ない。事實發條が錆びたのだ。「アントワヌ」はどうなつて君ゐるかね？その事について僕に知らし給へ。

此九、十二、十五億の負債は砲兵の一大放射のやうな感じを僕に與へる。君等は何かでもつて世界を驚かすべく生れついでゐるのだ、君等佛蘭西人は。

僕は十八日から祖父となつた。僕の娘はジャンヌと呼ぶ、女の子を丁度生んだ、その名を付けた。僕は八月の末頃出かける。僕は其處へ往復の途中バリをとほることにしてゐる。若し君がそのときクロワツセーに居るならば、僕は君に會ひにそこまで行く。

マア、丈夫でゐる給へ、またお目にかゝらう。多くの愛を。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

### 十八、

リュ・ド・ヅウエイ、バリ、

月曜日、一八七二年十月七日。

我が親愛な友よ——僕の痛風を祝し、それが長壽のしるしであると、敢て祝ふ人は禍なるかな。彼は悪罵を受ける。重大な危険を冒すだらうから！

只思ひ給へ！僕は二週間以上バリに居た、そして僕が到着のその日、見よ、發作が再び僕を襲ふた。(八日か九日だか、僕は最早それをかぞへることが出来ない！)僕は一週間動くことが出来ないで寢床にゐた！先日の木曜日、僕は超人的の努力をした。僕はノアンに行つた。ヴィアルドオ全家が其處にゐた。僕は一日其處に滞留して、歸つた。そして今再び此處にゐる。室内に閉ぢ籠り、あはれな悪魔のやうに跛ひきくしてゐる。それがいつおしまひになるやら見極めもつかない。が心配し給ふな、僕はノアンに行つたことを悦んでゐる、そしてそこでマダム・ランドに會つたことを。彼女は想像の及ぶ限り、最も愉快な女だ。彼女はあまりに魅力がある。

今僕はクロワツセーへ行かねばならんのだが、さて何時？是は何等の確實さを以てきめられない事である。只僕が知れる限りのことは、僕は少々休息したら直ぐに、多分次の週間の始めに行くといふことである。君には前以て通知がいく。僕は君に會ひ、君に語り、「アントワヌ」の末尾を聞き度いと望んでゐる。そのとき我々はお喋りしなければならぬ——それは絶

キユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

對的必要だ。

それまでは僕の愛を君へ、いづれ又。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

十九、

同前。

水曜日、一八七二年十二月十一日。

さあ、もう十二月の半ばになるが、フロオベルは居ない！相憎く僕はモハメットのやうではない。僕は山に入ることは出来ない。僕が自分の室を出るやうになつてから今で二週間になるので、僕は何處へも行かれない。どれ程それが續くかは神ぞ知召すのみだ。僕の痛風症は少くともヴェルサイユ會議程執拗である、そして僕は此痛風だけは他の病氣はひとりで癒えるか又癒されるかしたときにも、なほも續くことだと信ずる。來給へ。今、少し奮發し給へ、そして巴里へ來給へ。兎に角手紙を書いて、來る考へがあるか、又何時來るかを知らし給へ。誰も來ないとすると、それはみぢめだ。マダム・サンドは亦ノアンにとまる、けれども僕は希

望を棄てない、そしてなほ、又御目にかゝりませうと云はう。  
僕の愛を送る。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

二十、

パリ。

我が親愛な友よ——僕は月曜日以来此處にゐる、然し僕は到着早々、痛風症に襲はれた。僕はそれが最後であることを希望する、そして僕は今日始めて外出する、然し未だ君の二階へは昇れない。僕は明日定刻に來て、どうかして君のところへ上らう。僕は君に來給へと書かうと思つたけれど、未だヴィアルドオの家に滞在してゐる、それはまったく渾沌である。のみならず、僕は床に就いてゐるので苛々してゐる。では明日、君に會ふのが僕は嬉しい。僕はリュ・ド・ヅウエイに滞留してゐる、然し來給ふな、僕が君のところへ行くから。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ。

## 二十一、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

水曜日、一八七三年七月七日。

我が親愛な友よ——若し君が、その手紙で言つて寄越すことに對して、僕が孔雀のやうに傲然と意氣たかぶつてゐないと思ふならば、君は大きに間違つてゐるぞ。それは僕が常に秘藏する書簡である。眞面目に、僕は君に言ふ——君は一大愉快を僕に與へた、又僕はそのお返しを君にしたことを見て嬉しいと。

僕は非常に感謝してゐる。君は第一の話 *Etrange Histoire* が餘りに短かいことを發見したのは尤である。それは單に表示するだけでは充分ならぬ心理状態を含む。然るに遺憾！僕の怠惰は！僕はなほ此處にゐる、然し明日出發する。僕は維納から君に書かう、又きつとカル、ス・バードからも。仕事を続け給へ。否、それを君に語る必要はない。君は蟻のやうに勉強だ。けれども丈夫で、八月の始めに、僕をクロワツセーで待ち受け給へ。家族一同無事、そして君の健康を祈る。

僕は最上の愛を君に送る、そして常に、

君の舊友たる、

イヴァン・ツウルゲーニエフ。

二伸、君にも一つの僕の本を、出版次第に送らせる。僕はそれで聊か神經質になつてゐる。

註、(一)之は一八七一年露國で出版せられ、少時後、佛語に翻譯せられた「春の水を」指すが明かである。

## 二十二、

ブウジイブル、セイヌ・エ・オワズ、メゾン・アルガン、

水曜日、一八七三年八月六日。

君は餘りに親切なことを僕に言ふ。それは悦びと、困惑とを以て僕を赤面せしめる。とは云へ、それは皆非常に立派だ、そして彼の古い羅典の著者が *laudate a laudante* (褒められる富人に褒められるの意ならん譯者) といったのは正しい。

僕は我が親愛な舊友フロオベル、『アントワヌ』の著者に悦びを與へたことを非常に嬉しく思ふ。彼が僕に爲したことを總て云ふのは甚だ善い。恐らく僕の手紙は君をクロワツセーに發見

キヌスタグ・フロオベルへ宛てた書簡

しないだらう、けれども氣にかけ給ふな、それは出さねばならぬものである。九月十日に僕は着く。そして我々はだらけてはならぬ——どうしてく。

君は御存じか、我々の一行は（君によろしくと、此處の友人達が、言つてゐる）九月末ノアンで少くも一週間を過ぎさうとしてゐることを？若し君もやつてくるなら、それは眞個に誇りである。

それは癪に障る程暑い、そして戸が閉めてあつても、僕は只暑さに、汗だらくだ。こんな場合に手紙を書くのは實際に英雄的だ。だから君は僕に最上の愛を送るを許し、君と又會ふ願ひを許して貰はう、モ一度多謝。

君の忠實な舊友、

イヴァン・ツウルゲーニエフ。

### 二十三、

ブウジイブル、セイヌ・エ・オワズ、メゾン・アルガン、

木曜日、一八七三年八月二十八日。

我が親愛なる友——生きたつて、死んだつて僕はクロワツセーの君のところへ行く——然し是は僕の境遇だ。二年以前、英國で、僕は、非常に富裕な、退職將官ホールと稱ぶ叔父をもつた、ブルロツクといふ非常に面白い人と知己（いかり）になつた。

將軍ホールは——英國中に最も美事な鷓鴣打ちの遊獵地を所有してゐた！！！！

それのみではない。彼は單獨で出獵する癖のある一種奇抜な人物であつた、そして只始終その甥を招くだけだつた。彼は今死んで、その財産、その名籍、その獵場を自分の甥に遣した。するとどうだ、その甥が僕を憶ひ出した、そして九月九日から十四日までの間に來て、彼のところに宿り山なす鷓鴣を殺せと、招待状を呉れた。僕に残された唯一の快樂たる獵に對する無限な熱望にも拘らず、僕は約束を憶ひ出したとき、遁れ口上の返事を與へた。僕は若しや自分の痛風が斯る放縱を許すだらうかどうか知らないで、一層さうしたのだつた。又まつたく僕の如き白鬚が、鷓鴣の一群に、一團の鉛を注ぎかけるが爲めに二度も海を越すことはどうやら怖氣のふるへるものがある！

事實僕は決心がつきかねたのだつた。それが理由であつた。僕はそれを奇麗に打ち明けてもいゝ！僕のクロワツセーに到着する日取を五日間延引、即ち十日の代りに、十五日まで延ばす

キエスタヴ・フロオヤルへ宛てた書簡

ことを許して欲しいものだ。僕が英國へ行くことはマア有るまいけれど、僕はさうして置いた方が安心である。ぢやそれでその事はきまつてしまつたね。いゝか？僕は用事で日曜にはバリに行かねばならん——きつちり十二時に、間食の爲めカフェ・リシユにゐる。若し君がそこに行つてゐることが出来れば、それは好都合だ。若し行かれないなら、僕は君が此僅かな遅延を承知して呉れて、餘りに迷惑を感じてゐないことを悟るだらう。

君の健康と、精神の旺盛を冀つて、

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 二十四、

パリ・リュ・ド・ヅウエイ、

土曜日、一八七三年十二月六日。

我が親愛なる友よ——僕は娘のところ三日滞在してゐたので、直ぐには返事が出せなかつた。君が戯曲を完成したことは悦ばしい、そして前面のカルヅルオの總ての變化に驚かな

君はもつともつと、我慢をしなければならん、そして今後君は、その戯曲が嘗て作られた何れのものとも似ぬといふ理由の爲めに、獨逸人がいふ如く、君の神経を鋼鐵で覆はねばならん。創作上の斯る煩はしさを總て出来るだけ靜かに突きぬけるのは大仕事だ。

僕は君に早く會ふことを大に待ち望んでゐる。僕は二ヶ月、或はそれ以上居るだらう。

僕は未だ「アンクル・サム」を見ない、けれどもデユマの『ムツシュ・アルフォンス』を見た。

それは確りと出来たものだ、そして全體稀しく、際立つてゐる、尤もその中に、人を病ましめる十一歳の小娘があつたり、こんな文句に出あつたりするけれど——

『噫、天の如く深い人心、海又は死の如く神秘的な。』

又——

『噫、神に創られて、生きて、脈の搏つ生物よ、何處に私がお前を罰する力を發見し得ると思ふか？』

或は又——

『此人をつくつたさき、何が神の善行であつたぞ？』

こゝらは可なりに馬鹿けてゐると君は思はないか？

此處では誰も達者である。僕は丁度マダモワゼル・コンマンヴィルを訪ふて、彼女はストツ

ギユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

クホルムに居たことを知った。

が然し君はバリに歸つて來なければならんよ！

我々は程なく會ふのだ、ねえ、さうだらう？ 僕は愛を君に送る。

君の舊友、イヴァン・ツウルゲーニエフ

二十五、

リュ・ド・ローム、

水曜日、一八七三年、十一月十九日。

それぢや、我が親愛な友よ、君は昨夕から、軍事執政を始めたね。君は人がいふとほりに、マクマオン流の人だ。正しく佛蘭西人たることは一番いゝ事のやうに、いつも僕には思はれて來た、けれども恐らく僕は間違つてゐるだらう。

總て是に對して只善い事は、何物も今は君が『アントワヌ』を出版することを妨げないといふことだけだ、何ぜかなれば彼等は我々に、平和とおまけに七ヶ年の事業の回收を約束したからだ。僕は昨日ヴェルサイユへ行き、すっかり厭になり、悲觀して歸つた。

▲政治は悪魔へ！ 僕は君が一生懸命に働いてゐるのが嬉しい、又君の戯曲が、巨人の歩みで進歩してゐることを悦ぶ。サルドウの戯曲（それはまだ見ない）が眞の成功よりも大きな騒ぎをしてゐる。僕はそれが、『ラガバ』のやうに二百夜もつゞくと信じてゐない。君のはきつとおそりくさうなるだらう。

僕は恢復した——神經性の咳で聊か悩まされてゐるが、人はいつも何かしら持つてゐなければならんのだ。

僕は一月の末以前には巴里を去らない。君と早く會ひ度い。此方では皆丈夫だ。

僕の愛を君へ。

君の舊友、イヴァン・ツウルゲーニエフ

註(1) Le candidat

二十六、

月曜日、午前九時

我が親愛な友よ——僕があらゆる理解について、そこに困難があることを君に書き送つたと

ギユスタヴ・フロオメルへ宛てた書簡

き、僕は自分が今までそれ程眞理に近かつたことを知らなかつた。昨夜のうちに、僕の悪い足の蹠が突然膨れ上つた。そして今は靴を履くこともできなければ、足を地につけることも出来ない。そこで今『アントワヌ』は延引せられてゐる。本當に運が悪い、君が自分で原稿を携へて此處へ来てくれなければ、でなければ一兩日待つてくれ給へ、斯る再發は減多に四十八時間以上は續かないから。

僕が非常にみぢめに、失望してゐることを想ひ給へ。

君の舊友、イヴァン・ツウルゲーニエフ。

## 二十七、

アリヨル洲、スバスコイエ、ムツェンスク市、

一八七四年七月五日 十七日、水曜日。

我が親愛な友——僕は此朝此處に着いて、七月一日附の君の書簡を發見して、僕の巢窟の奥から君に書いてゐる。君の手紙が僕にとどくまでには時間がかゝつてゐるのが御分りだらう。それはそれ自身の咎でも、又ムッシュ・ヴィアルドオのせいでもない。僕はそんなに永くべま

ルブウルグとモスクワに滞留する積りでなく、旅程、寧ろ時間表を與へて置いたのだが、それが不正確になつたのだ。それにうんざりさせられることは、二十日以後、即ち明々後日以後はクロワツセーに居らずして、此手紙は君の後に行くことだ。僕はそれが君に追ひつくと確に信ずる。だがそれでも此考へは僕のペンを遊らせる。此處から君に手紙を書いたのは最初ではない。僕は其場所を知つてゐる。それは緑で、黄金色して、廣い、單調で、平和な、古風で、そのまはりには恐るべき靜寂がある——のろい、族長的な、總てを承服せしめるやうな倦怠がある。若し仕事が出来れば、二三週間此處へとまらうし、それが出来なければ矢の如く眞直にカルルスバードへ行き、其處から巴重へ行かう。露國滞在はその用がないでもなかつた。兎に角僕は捜してゐたものを随分澤山發見した。君よりも僕はきちんとしてゐない、ずつときちんとしてゐないのは事實だ。君は餘りに嚴格だ。

君はゾラの小説が好きか？僕は彼に手紙をやつて、彼の仕事の將來の分をきめた。それは澤山な金にはならない、けれども無いよりはましである。彼は露國で多く讀まれ且つ翻譯しられた。彼の *Chère* (牧師) は丁度發刊されたところだ。

『アントワヌ』は明かに廣く一般向きのものではないやうだ。普通の讀者は露國に於てさ

へそれからシヨックを受け、驚いて、尻込みする。僕は僕の同國人等がそのやうに几帳面であつたとは思はなかつた。總てが言はれ、且つ行はれたとき、『アントワヌ』は生きる木であるから、なほ東露國人にとつては悪るいのだ。

僕が歸つて、君のなつかしいクロワツセーの書齋に入るとき、君を笑はせる事を澤山語らう。或る甚だ奇妙な、面白いものが僕の *Cara Patria* (愛する祖國) にある。僕の故郷の空氣は何物でも許して呉れるだらうといふ希望から、耽溺しても差支えがないと思つて乳食を多くやり過ぎた、がお陰で以て、目下僕は最も激烈な痛痛の殉教者となつてゐる。その猛烈さは僕の書く文字の形そのものでも想像がつかう。是は珍らしくもなく、面白くもない。國內の状態と、政治上の形勢は現下等しく嫌悪すべき有様である？君はそれをどう考へるか？君も僕もそれについて語らうとは思はぬ、けれども人は本當にそれを嘆息し、又叫ばずにはをられない。

僕は、我々が劇作家等のたのしい小さな會食を再開するときを待ち望んでゐる。

それはそうとして、此手紙がリギイ山上の或る氷河の上にとまつてゐる君を発見するなら、君が眞實爽快になつたかどうかを、知らして呉れ給へ。君の愛らしい姪君へよろしく。僕は彼女と露國では決して會ふことはないと思つてゐる。

註、(一)ツラがサント・ペテルブルグで發行する雜誌 *Messageur de l'Europe* にパリ通信員となり

一八七四年から始めて、數年の間寄稿してゐたのは、ツウルゲーニエフの紹介によつてである。

## 二十八、

モスクワ、ブウルブル、ブレチステンスキイ、『オー・コムトワル・デ・ザバナージュ』。

一八七四年七月十二日、即ち六月三十日。

我が親愛な友よ——僕は痛々しく二本の樺木杖に縋つて、君がリギイからの手紙を受取つた僕は車に身を落着けて、それでもつて田舎から、此處へつれて來られた。君が想ふやうに、僕は脚を折つたのぢやない、然し僕が郷里の空氣、マルセイユの人々にそんなに良いところの空氣は、僕に痛風の襲撃を齎らした——今度は兩脚に——。それは二週間僕を床につかせて未だに僕を去らぬ。是が僕をして人生を薔薇色、又は空色の眼鏡を通して見させる(僕は瑞西の空の下なる君の夢を想つてゐる)といふのは大きな嘘を吐くことになるだらう。病弱、一般の事象に對する確乎として、冷たい嫌惡、無用な記憶のいたましい擾亂——我が親愛な老童よ其處に、五十代を過ぎた人が前途に展望する遠景がある、そしてその頭上、その外部に飛び舞

ギユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡



ふ忍従——醜い忍従がある。死に對する此準備——けれどもそれはもう澤山！

僕は出来るだけ早くカ、ルスバードの方へ飛び行かうとしてゐる、君が死ぬ程退屈したカルルスバードではなく、君が其處に五週間を費さうとするボヘミヤのカ、ルスバードへ。其後、秋になつたら、そのとき始めて我々は何を爲し得られるかと分るだらう、當分は何等の計畫も特に愉快な性質のものを立てる事が出来ぬ、自身の上に凶運の目を睨らせることを恐れて。

君はあのハーラーやルウソウによつて歌はれた崇高な高嶺を面白く感じなかつたやうに思へる。是等崇高な實在の前に常に——住む人民——僕は瑞西人のことをいふ——は最もひどくだらう、僕を知るうちで最も少く天賦を受けた人民だと告白せねばならぬ。哲學者は訊くだらう、何處から此變則は来るか？けれども恐らくはそれは少しも變則ではあるまい。ブウヰルとベキュシエはそれについて何と思ふだらうか？僕は、君が上演の或る方法を、否寧ろ適切な方法を發見したことを悦ぶ、けれども僕がその事について思へば思ふ程、それはスウイフトやヴォルテールの様式に従ひ、非常に急速に取扱はるべきものだといふことを確める。それは常に僕の意見であつたことを僕は知つてゐる。

君の計畫は面白くもあれば、美しくもある。若し君がそれを餘りに細かく説くならば、或は

餘りに君が學者になるならば……噫！よし、何にせよ君はそれをやつてゐるのだ。ゾラの *Com qu'êde Plassans* (ブラサンの征服) は露國で縮譯せられたが、後にそれは全譯せられるだらう、彼は露國では非常に流行つてゐる。

君がリギイの氷河を利用して何物か激情的、熱烈火の如きものを作つたとしたらどうだ。是は君にとつて一考案だらうが！けれども何よりも先づ、爽快になり給へ。不幸にして、或る氣質に對しては、退屈のみが只血を湧き立ち騒がせるのみだ。ラマルチイヌの詩句のやうに蒼醒めて、一色になつて、我々のところへ歸つて來ないやうに注意し給へ。僕はバリ、ブウジイゾルの友人等から善い消息を得た、是が僕の血に對する鎮痛藥となつた。

政治について……七ヶ年君等を支配する、幾分か汚れた名聲の好い兵士を君等がいたゞくことになるだらう。彼は聽て議會なしに、單獨に統治するのを。君等を見るだらう。是で憶ひ起すのは、僕が田舎に居たとき(其處で僕はなか／＼大きな圖書館をもつてゐた)「一七八九年より一八二一年までの間の佛國法廷に於て爲された演説の抜粹」のうちに、「ルイ第十四世は審問せらるべきか」といふ問題について、ロベスピエルの爲した演説を讀んだことである。それは非常に美しいので、僕を驚かした！晩年、彼の經歷の末頃、ロベスピエルは悪化した。彼は徒

らに感情にまかせて、浮つ上調子の、陽氣な文句を喋つた、然し此男はそのうちに極めて善い素質をもつてゐた！

我々が早く會へるやうに祈る、我が友よ！それは多分九月クロワツサーに於てであらう。御互に健康ならんことを望む。

僕の愛を君に、

僕の舊友、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸、君がカル、スバードに居るつてことは本當か？君は二度まで「カル、スバード」と書いたけれどもそれは有り得ない名だ。僕は君の住所を訂正する。

註。(一)執政官又は大統領のこゝであらう、(譯者)

## 二十九、

レ・フレーヌ、ブウジイブル、

一八七五年十月十一日、月曜日。

君の手蹟は僕に最大の愉快を、又君の手紙そのものは一層多くの愉快を與へた。君は今泥濘

を出て、行くところである——文學の平野へと僕は言はうとしたのだ！兎に角僕は仕事をしまうと思つて、楽しんでゐる！それは耳よりの事だ、僕は確に君が三十頁を僕等に與へることを確信してゐる。

レ・フレーヌ、

一八七五年十月十五日、水曜日。

我が尊い友よ、僕はこんなに遠くにまで書きかけた手紙をもつて來た、それは或る邪魔が起つたのであつた。今非常に意外にも、僕は是を吸ひ取り箱の中に發見した。僕はそれがとほに出でたことと思つてゐたのだ。僕は自分の愚を書く、そして再びそれを取り上げる。

それで僕はいふ、僕は是が三十頁の思想を非常に悦んでゐると。僕も亦丁度僕の露國出版者に三十頁の(フォリオ版の)物語一篇を十一月の二十六日——少くとも——までに書く約束をした！僕の長い小説が遅かれ、早かれ、晦日の満月までも延引せられたので、僕は頭の中に一文片缺の詞も持ち合せない——ブウブルやベキュシエはなほ更のことだ。僕の出版屋は、何物かを求め叫びながら、驚のやうに僕の周圍をまはつて歇まない。そのとほり此處で僕は、人質にとられてゐる。どつちが早く出來上るか見やうぢやないか？

キヌスタヴ・フロオメルへ宛てた書簡

嘘！さうだ、僕の親友よ。我々は御互に年をとつた。それは疑ふべくもない。けれども少くとも我々自身を老人並に愉快ならしめるべく努めようぢやないか？此事について君は『レビユブリク・フランセーズ』（十日又は十一日の）で『一小兒の自殺』と、題し、Xと署名のした小話を讀んだか？それは非常に僕を感動させた。之を書いた人は明かに君の一派の人である。若し彼が青年であるならば、彼は將來をもつてゐる。その雜誌を手に入れて、試みに、君がどう思ふかを僕に知らし給へ。

此處の者は誰も達者だ。僕は *Griffe*——といふものだらうと思ふ——に烈しく襲はれてゐる他の言葉で言へば膀胱炎にかゝつてゐるのだ。僕はツライ二夜を過し、三日を臥床に過した。けれどもそれは今殆ど消え去つた。それは恰も死の女神が、彼女を忘れぬやうにと名刺を置いて行く、小さな記念である。

我々は十一月一日まで此處に在る。天氣は穏和で、灰色で、濕つほいが、不愉快ではない。僕は本年新宅へは入れない、然し僕の或る手紙——たとへば此手紙の如き——を書くため、時々そこへ行く。その煙筒には善い火がある、けれども僕は背中がぞくぞくした。

そこには又マダム・サンドの『タン』紙にのせた面白い小話があつた。（それは彼女が一八二八

年、二十五才のとき書かれたものだ。僕は君がそれを讀んだことと思つてゐる。ゾラは『露西亞評論』 *Revue Russe* に、ゴンクウル兄弟に關する美事な一文を書いた。その爲め兄弟の小説が翻譯されることになつた。

君が何時頃クロワツセーに歸るか大凡の日取を僕に知らし給へ。君は永く海邊にとゞまり度くはないのだと思ふが？そして何事が起らうとも、君はバリへくるだらう、でないのか？

君の友人等は君の周圍をみつしりと圍み、君を暖めようとしてゐる。先づは僕からよろしくマダム・コムマンヴィルに、又僕のを君へ。

君の忠實な舊友、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 三十、

スバスコイエ、アリオル州、ムツェンスク市。

一八七六年七月十八日、日曜。

我が親愛な友よ——僕は今朝バトモス（聖ヨハネが天際を見  
た島、此處では嘘）に着いた、そして梟のやうに愛  
憎である。君は人が普通一番善い友人等に手紙を書くのは斯度時であると、氣付いてゐないか

キユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

物陰で列氏三十二度だ、そしてその寒さと、我々が五月二十一日に経験した氷點以下九度の極寒のおかげで、庭園の青いものは、皆小さな枯葉ができて斑になつて、それがほのかに小さな死兒を想ひ起させる。僕の古い樞の樹は、瘦せた、見窄らしい影をさし、見る目も惱しかつた。

搗て、加へて、僕自身にとて重大な金銭の事を設定する爲め、僕を待ち受けてゐた兄弟は五日前にカ、ルスバードへ出發したし、僕は痛風症（二年前と同じ時、同じ場所で僕を襲ふた。）が退かぬと思はれるし、僕の執事は僕のもの盗んでゐることを殆ど絶對的に確めたのに、それでゐて、僕は彼を放逐することが出来ないといふ次第——是で君は一目に全體の形勢をさとりわけだ！

マダム・サンドの死は僕にとつて、大きな／＼悲みである。君がノアンに葬式に行つたことを僕は知つてゐる、そして僕は露國民一般の名で弔電を送らうとおもつた、けれどもフィガロ（パリの有名な文學新聞の名）を憚り、自家廣告を恐れ——實際馬鹿のありつたけを盡した可笑しな謙遜の爲めに妨げられてその意を果さずにしまつた。

露國の一般に對してヨリ以上に、マダム・サンドが勢力をふるつた社會はなかつた、そして又僕は勿論さう言つて置くべき筈であつた！のみならず僕はそれを言ふ權利を有つてゐた——

然るにこんなことになつちまつた！かあいさうに、親愛なマダム・サンド！彼女は我々兩人を非常に愛してゐた——特に君を……それが自然であつたから。

黄金の胸を彼女はもつてゐたではないか！彼女に小さな、賤しい、或はいつはりが少しもなかつたではないか！彼女は何たる好人物だつたらう！何たる愉快な婦人であつたらう！然るに彼女のありし日の一切は今、恐ろしい、鈍い、詞のない、飽くを知らぬ、無感覺な坑あな、何を嚙み込んだかすらも、自覺しない坑あなの中に葬られてしまつた。噫よし！我々は生きながらへて、頭を水面上に出してゐるやうに努めるより外何物をも持たない。

僕は此手紙をクロワツセーに宛てゝ出す——君は其處にゐることと僕は想像する。僕は再び仕事を始めたか！若し僕が此處で何にもしないならば、總てはお終ひだといふことになる。此處には君に想像だも與へられない沈黙がある——二十キロメートルの半徑には一人の隣人もない、あらゆるものが情勢をもつてうなだれる！家は可なり見窄らしい、けれども餘りに暑い、それから道具は結構である。就中、一つの美事な書机と、一脚の大きな藤の脇掛椅子とがある。噫！然し又危険な——それにかけるや否や直ぐに眠つてしまふ程危険な長椅子がある。僕はそれを避けようと思ふ。僕は『サン・ジュリアン』を終つてから始める。

室の一隅に眞直に立てば、眞黒く、銀の枠に入つた、古い、ビザント風の聖像がある。只見る巨大な、黒ずんで、きつい顔だ。それは少々僕を退屈させる、然し僕はそれを取り除くことが出来ない、僕の召使ひが僕を異教徒と思ふから。しかもそんなことは此處では冗談ではないのだ。

僕の斯處ことよりも、もうちつとは面白いことを少し書いて寄越し給へ。僕の愛を君へ。

君の舊友、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸一、君はシルカス人ハッサンといふ男で、索を以て、大臣達をまるで鷓鴣のやうに糞り殺す人間が、僕に或る尊敬を感じしめることを知つてゐるか？

追伸二、僕の最上の尊敬を君の姪君と、その夫君へ。

## 三十一、

スバスコイエ、アリョル州、ムツエンスク。

一八七六年六月二十三日、(七月四日)木曜日。

我が親愛なる老童——僕は此處から、クロワツセーの君へ書いて送る——一つのバトモスか

ら、も一つのバトモスへ。君の手紙は昨日僕へと書いた、そして御覽の如く、僕は返事を躊躇しない。

さうだ、マダム・サンドは生命に満ちてゐた、しかもなほ彼女のことを話すに、君は「あはれなマダム・サンド」と稱ぶ。それは死者にはもつてこいの形容詞だ、なぜかとなれば徹頭徹尾、死者は多くのあはれみを受くべきが故である。死は醜惡なものだ。左様、僕は小オロルの眼を記憶する。その眼はその深さと、善良さとで驚嘆すべきものがある。君が、あの眼が祖母の眼のやうだと思ふのは全く當つてゐる。それは小兒の眼にしても餘りに善過ぎる、ゾラがマダム・サンドに就いて『露西亞評論』に長い論文を書いたらしい。文は非常に美事に書けてゐるが、少々荒いといふことだ。ゾラはマダム・サンドについて完全な批判をつくることが出来なかつた兩者の間には餘りに大きな隔りがあつた。

僕は君がM・Aに眼を光らしてゐるのをさとることが出来る——斯る菌を培養するには特殊な泥が入用である。

そこで君はクロワツセーで働いてゐるのだ。よし、今僕は君を驚かしてやらう！僕は今まで此處で働いて来たやうに働いたことがない。僕は自分の書机の上に二つになつて、徹夜するこ

とがいくらもある。僕はも一度幻影に満たされる。僕は言ふことが出来るのだ、それは、お前にははれたものよりはきつと違つたものではない——それは僕の氣にかけないものだ——けれどもそれを僕はちがつたふうに言へると。なほ注意し給へ、此外、僕は雑多な仕事で追はれてゐる——金銭の事、『管理や、耕作の事務』その他何かやと、やりきれたものぢやない！（此件については、初め想つた程、まつたく悪くはなかつた。それから餘事ながら、僕は僕の甥の仕事に、少し望があることを聞いて嬉しい。）けれどもサン・ジュリアンは此の過分の活動の御陰で迷惑してゐる。

僕の憎い古小説が僕に目をまはさせる程、僕をとらへてゐた。然し安心してゐる給へ。翻譯は即ち『歐洲の使者』の十月號に約束が出来た。そのときそれが載せられるか、それとも僕が計畫に仆れるかである！

僕はフロマンタンの文を読まんし、又ルナンの本をも讀まない。僕は只今は何にも讀めないが、歐洲のことを僕に語り、僕を沈思せしめる、此處にとる新聞の外には。僕はそれが終りの幕の始めと信ずる、けれども刎ねられた首、凌辱せられ、殘害せられた婦人、娘や小兒！僕はその終局と今との間にそれを見る！僕は又、我々（僕は露西亞のことをいふ。）も戦争を避けら

れないと信ずる。

君は僕の住居がどう見えるかを知り度いのだね。それは木造の、非常に古く、柱形のある、蒼白いリラの花色で塗られた家だ。正面には常春藤のまつはつたヴェランダ（廊下）があつて、二つの屋根は鍍板で葺かれ、碧に塗られてある。此小さな家は、一八七〇年に焼けた巨大な馬蹄形の建物の残りものである。

昨日の夕方、君の手紙をポケットに入れて、僕は、殆ど皆赤い服を着て、非常に醜い（只一人、十六歳の花嫁姿で、ツイ先頃まで熱病に罹つてゐた、ドレスデンにあるシステイネのマドンナに、驚く程よく似た娘を除いて）約六十名の百姓女共に向つて、ヴェランダに腰かけた。彼等はモルモット兎、いや寧ろ熊のやうに踊り、非常に荒い、けれども眞の聲で唱つた。彼等が僕に求めたのは小さな饗宴で、ほんのちよつとしたものがあつた——二手桶のブランデー、いくらかの菓子、いくらかの胡桃、それだけのことなんだ！彼等は僕の爲めにおめかしをして來たのだ。僕は彼等のそれを爲す様を見て、恐ろしく悲しく感じた。その小さなシステイネのマドンナはマリヤと稱ぶも似付はしかつた。

是でもう澤山だ。僕が此處を去る前に、もう一度君に手紙を書く。その間僕は最上の愛を君

へ送る。

君の舊友、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸、僕は今全景を描くならば、その色は蒼白色——空も、植物も、土も——寧ろ、暖かい黄金の蒼白色であることを見出した。その大きな外形、それに壯大な趣を添へる、大きな水平な空間がなければ、それは單に美しいのだらう。

註、(一)『處女地』のこゝを指す。イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 三十二、

プウジイアル、レ・フレース、

一八七六年八月八日、火曜日。

注意——僕は此ハイカラな紙をふとしたことから見付け出して書く。

我が親愛な友よ——僕は此處に二日以前に到着した。露西亞、獨逸では危険な旅をして来た。君は丈夫で、仕事をしておいでか？僕も亦健康だ、そして働いてゐる、そして逆も信じられまいが、僕は僕の長篇小説の畜生を仕上げ、今別な仕事にとりかゝつてゐる。それは二ヶ月のうち

淨書を終り、出来上らなけりやならんのだが、それが君、騰寫つてことは何を意味するか御存じのとほり、なか／＼生柔しい仕事でないのだ。一行だつて元のまゝに残つてゐない頁もいくらかあるのだ。

オデイツイスのやうに、僕は多くの事物と、國民とを見て、歸ると、自分の周圍は皆結構であることを發見した。僕は十三萬法——僕の富のなか／＼大きな部分——に相當するものを盗んだ管理人を放逐した。何ぞ僕は斯麼馬鹿だつたのか？僕は其奴の鹿爪らしい、毛むくぢやらの顔を見たとき、それは惡黨面だとよく知つてゐながら、怠惰と、盲目的の信任によつて、自身を没落させた。僕にとつては愈々いけない、彼が僕の金を消化せよかし！

僕は二三日(今月の二十五日頃)どうしても自分の淨書を休んで、君が Le Perroquet (鸚鵡) を讀むのを聞きに、クロワツセーへ行く積りだ。僕が淨書に併行するとき、僕は『サン・ジュリアン』の翻譯を終るやうに、仕事に取りかゝらねばならん、なぜかとなればそれは十一月一日に露西亞で發表せなければならんのだから。

ゾラは丁度今ルナンに關するその人の論文を讀んだ。それはひどいものだ。總て『文字の共和制』は氣障で、何やら虚偽で、腐敗したものを放散する。

ゾラは僕に書いて寄趣した。彼は健康で九月の末頃バリに歸つてくる。

僕は *chalet* (瑞西風の別荘) を好む、その新しい家具の臭ひが失せたら、なほ更良からう。天氣は實際によすぎる。我が窓前の木の緑りは柔かい、黄金の光輝に満ちてゐる。それは本當に無暗に美しい。

君が姪君へ手紙を書くとき、僕からの模様を傳へて呉れ給へ、二週間より少し後、又御意を得よう。

君の舊友、イヴァン・ツウルゲーニエフ

三十三、

ブウジイブル、レ・フレーム・シャール、

一八七六年九月二十三日、日曜日、

我が猛烈な老童よ——途中無事に僕は此處に歸りついた。僕はマニイで會ふ時間をもたなかつたが、ベレには會つた。僕は彼に討論の問題を授けた。彼は次の如く答へた——  
「それは爲され、屢々爲されすらし、けれども良い料理の規則に反する」

此の結果は僕は三鞭六瓶を背負込んだ。然し僕は物質的勝利を得なかつたが、精神的勝利を得た！

僕は又淨寫にかゝつてゐる。今夕僕はもう一度 *Le Coeur Simple* (素直な心) を読みかへす。クロワツセーへ最も親切な傳言を。

君の姪君が速に起床せられんことを、僕の愛を君へ送る。

蒸した鰯を胡椒なしに食べる男、

イ、ア、

三十四、

ブウジイブル、レ・フレーム、

一八七六年十一月八日、水曜日、

我が親愛な友よ——僕は荷造りで、大きに悩んでゐる。僕は明後日バリへ行く。其處へ落着いたら、もつと長い手紙を書く。

『歐洲通信』は、僕の小説を掲げる前には、僕のもの、僕の署名をしたものは一つも掲載し

キユスタヴ・フロオネルへ宛てた書翰



ない約束をしたので、サン・ジュリアンを僕の名で以て、掲載を許すわけにはならんと通知して来た。けれども小説は一月號にのるので、サン・ジュリアンは佛蘭西でそれが發表せられる前、二月に掲載せられる。僕は *Le Coeur simple* の善い翻譯者を發見したと思ふ。

マダム・コムマンヴィルが恢復したと聞くのは嬉しい。どうぞ何分よろしく僕からと傳へて呉れ給へ。

*Herodiade* の途方もない難しさについては、僕は全然それを信するが、君はきつとおしまひにはその困難に打ち克つと僕は思ふ。

僕はゾラの小説を讀まない、けれども僕は *L'Assommoir* (艮) の初めの部を讀んだ。噫、噫僕達はそれについて語らう。僕はバリに落着くや直ぐ、二三日の後に君に手紙を書く。僕の疝氣はほんの偶然であつた——僕がマア非常に不愉快なものでつた——それ以來僕は悪くならなかつた。僕等は程なく會はう。僕の愛を君へ。

君のイヴァン・ツウルゲーニエフ。

## 三十五、

パリ、リュ・ド・ズウエイ、

一八七六年十二月二日、(九日)土曜日。

我が老童——君に書かうと思つて、僕が此紙を取り上げたのは一週間前であつた、それで僕は一語も書かなかつた。僕は厭な心地がしてゐる。僕は老ひ、白髪が出来、色が褪せ、元氣がなく、且つ愚鈍になつたと思ふ。僕は痛風に襲はれた、然しそれさへ何にもならなかつた。僕はベテルブルグから送つて寄越す小説の校正をしてゐるが、僕はそれを光彩のない、無意義なものとする。僕は殆ど誰とも會はない。君はバリから餘り永く離れてゐるやうに僕には思へる。若し僕が君に語ることが出来れば、何事も自ら決定してゐたのだつたらう。けれどもさうでないで、僕は餘りに長い手紙を書いてやらねばならない。第一、それは面倒臭い、第二、人は紙の上では何でもかでも言はねばならず、ひとりでに理會されることさへも言ふべき必要がある。

我々はゾラ、ゴンクウルと會食した。ドオデエは出席出来なかつた。我々は君にも言へなかつた。ムッシュ・ペレは我々に嫌ふべき午餐を與へた。我々はもう其處へ行つてはならない。オイ君——何時又バリで會ふか？仕事は進んでゐるか？君の健康はどうだ？

キユスタヴ・フロオヤルへ宛てた書翰

ゴクウルは我々に、感情に素れた聲で、彼の小説の断片を朗讀して聞かした。白髪の頭の人がある感情に上せあがつてゐるのを見ると、僕は怪訝の念にうたれる。彼が讀んだことは僕には善いけれど、聊か餘りに淺薄に思はれた。僕は丁度『Assommoir』に入れあけてゐるところだ。僕はそれに訛らかされはしない。これは嚴格に我々だけの間の話だ。それには確に多分の才能があるが、それは執濃い讀みもので、口に餘り苦い味を残す。

眞個、何時君は歸つておいでか？ 僕に知らし給へ——猶豫なく——僕の眞似をし給ふな！ 此處で我々がそのうちに、のたうち廻る美しい混亂を何と君は考へるか？ 『何と人民が言はうとも』確に戦争がある。

僕は一八七七年中に一萬留の收入を得ることを望む。好い時機には是は三萬五千法に相當する。中位のと看で三萬法、悪いときで二萬五千法に相當する。まづ二萬五千と算定しなければならん。それ以上ではない。僕は一萬法の負擔をもち、又それだけ負債の形でもつてゐるのだから、残つたうまいところはありやしない。辛棒だ！

君の姪君及びその御良人によろしく。僕は眠たい老耄れだ、襤褸屑だ、けれども僕は君が好きだ、僕の最上の愛を君に送る。左様なら、又！

イヴァン・ツウルゲーニエフ

註(1) La Fille Euse.

三十六、

バリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八七六年十二月十九日、火曜日。

我が親愛なる老童——僕は三日かゝつて長い内國旅行から歸つたばかりだ。その間僕はひどく退屈した。そして今此處に君の手紙に返事を書いてゐる。何よりも先づ三つの話の問題をさらけ出さう。

『サン・ジュリアン』は翻譯せられて、出版者の手にある、僕の普通の原稿料で支拂はれる。即ちそれはフォリオ版十六頁毎に僕に三百留を渡すことになる。留の相場は二法八十五サンチムから三法の間を上下するけれども此處に故障がある。僕は僕の出版者や一般に對して(僕が愚にも公けにした覺書で)僕の小説の出る前には、僕の名のついたものは何にも出版しないといふ有形の約束を強ゐられた。僕はその小説を終り、それをサンクト・ペテルブルグへ送つて、

キユスタヴ・フロオメルへ宛てた書翰

今それは印刷に附せられてゐる。只、出版者の蛇奴へびめ、それを全部印刷せずして（彼奴きつとさうすると僕に約束したのに）それを二つに切つた、その爲め、一月十三日（一日）と二月十三日（一日）の二號に掲載せられることになつた。あの奴めとう／＼僕をそんなことにさしてしまつた、僕は眠りこけた老翁れだ、僕は此斬害を承諾して、その爲め不幸なジュリアンは三月三十日（四月一日）まで延期せられることになつた。だからその他の二小説は發表せられねばならん兎に角 *Le Coeur Simple* はそれだけで發表せられてはいけない。是は君が僕に告げることによつても不可能ではない。僕は *Le Coeur Simple* を若い露國の閨秀文學者に渡した。その人は佛語によく通じてゐる。彼女はバリに居る、そして若し彼女が信用の出来る仕事をするなら、僕は *Herodiade* を彼女に渡さう。勿論僕は翻譯を、出来る限りの注意を以て監督する。若し必要ならば、僕の名が出ることだから、モ一度それを寫し直す。さもなければ人は言ふだらう『彼は第一の小説を譯しながら、何れもう一つのを譯さなかつたのが？それはいけないのか？』と。是が満足な支拂ひを受け得る唯一の道である。けれども此處にもう一つ困難がある！僕はサンクト・ペテルブルグへ行くところだ（内々だよ）二月の十五日に行つて、一ヶ月滞在する。恐らく君は今からそれまでに用意が出来ない（二月十五日までに）或は君が出来るならば、適

常な譯をする暇を有たずして、僕は只原文を携えて行かれるだけのことであらう。大に結構ではさうするさ。僕は誰かをペテルブルグで見付け出さうよ。それは不可能ではない。

その結果は總て——*Herodiade* を二月一日に終るやう、やり給へといふことだ、そしてたならどうするか我々は見よう。

君の手紙に書いてある他の事については、僕は次の頁に渡らせ度くないので、箇條書きにしてお答へする。

一、僕は奇妙に君を見はぐつて會へないから、急いで歸るように、切に願ひ申す。

二、僕等はゾラについては同意見だ。オペラ・コミック料理店に於ける我々の午餐會は金曜日にあつた。ペレは豚だ。

三、ルナンについては……彼の文は箇人的の立場から見れば、非常に興味があるが。色彩と生氣との乏しさつたらない！僕はブリタニイも、總ての聖人達も、彼の女も、彼の悲嘆となる彼が初戀の原因たる彼の小さな娘達も、亦彼自らをも、何も見ない！それでるた一體彼は何で神が娘を下さつたといふのか？

四、僕はムッシュ・モンを讀まない……なぜかなれば彼は僕に嫌な氣持を起させるから。多

分戦争はないだらう。それは留<sup>ルブツ</sup>の相場に厭ふべき影響を及ぼすから、君は間接にそれと関係をもちかけた。内閣の交迭は僕には風馬牛だ。獨逸は巨大だ。人をして人的、反語的、嘲笑的の神を信ぜしめやうと計つたものがあるとマア言ひもせられよう！僕はマダム・コムマンヴィルの訪問を受けた。僕はそれによつて魅せられたり、幸福になつたりした。僕は彼女が非常に丈夫に見えると思つた。さて多くの愛を君へ

君のイ、ア。

## 三十七、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ五〇、

一八七七年一月二十四日、水曜日夕。

我が親愛な老童よ——僕は自分のつまらないことをかゝけたタン新聞を二枚君に送る。君が外に仕方のないとき、それを讀み給へ。

露國で出た僕の小説の第一部は、友人達を非常に悦ばしたけれど、一般に悦ばれるところは少かつた。新聞紙は僕が疲れきつてゐると言ひ、僕のこれ迄の作とくらべて、死ぬ目に惱ます

(丁度マダム・ボヴリイで君をやつたやうに)。僕は君が勉強してゐるのを聞いて嬉しく思ふ。僕はマダム・コムマンヴィルに會つたところ、夫人は非常に健康で、元氣だと思つた。君が豫期してゐたよりも早く歸つてくると僕に語つた。萬歳！僕は君に會はないでしまつた！僕の方では三月一日までは出發しない。ゾラは彼の Assommoir を僕へ送つた。それは厚い本だ。僕はすぐその仕事に取りかゝらう。

あはれなモーパッサンは彼の髪を皆失くしかけてゐる！彼は僕に會ひに來た。僕は彼の語るところにより、それは胃病から來るものであると結論した。彼はなほ愛らしい男だ、けれども只今は非常に醜い。いろんなことがあつても僕は今でも矢張り來春は戦争があると信じてゐる。さて今は僕の最上の愛を君へ、左様なら。

イヴァン・ツウルグーニエフ

## 三十八、

ブウジイヴル、レ・フリース、

リュ・ド・メスメル、

キユスタヴ・フロオメルへ宛てた書翰

一八七七年七月二十四日、火曜日、

我が親愛な老童——僕は自分でクロワツセーに君の化粧着を持って行かうと、かすかな希望を抱いてゐたので、直ぐに君に答へなかつた、然し此希望は一時消散したので、今君に手紙を書いて、<sup>(1)</sup>汽車で君の化粧着を送るところだ。

僕の足はよくなつた、然し努力してみても、未だんとは歩くことが出来ない、僕は新聞紙が大に賞讃してゐる、その名の「<sup>(2)</sup>」に始まり、<sup>(3)</sup>に終る新薬を、最後には試してみようと思ふ。僕の猛悪な痛風症は、半ば慢性、半ば急性となつて、僕を悩ます。Bと、Pが醫者をよししたのは残念だ、でなければ僕はあの人々に診察を受けたらうものを。

僕は露西亞でやらうと思つてゐるものゝ四分の一を終つた、勿論僕がやらうとした、主要なものは未だしてない。僕は僕の兄弟に會はなかつた。それは總て陰のうちにある。

僕は此戦争がおしまひになつて、留貨<sup>(4)</sup>の相場がその爲め再び騰貴せんことを祈る。現在の状態は僕をひどく貧乏にする。君は働いてゐるんだね、それは結構、そして君の仕事——若し君がよく記憶しておいでなら、あの仕事はどうなつてゐるか？

僕の文學的活動は現在では最低調にある。僕はゾラの小さな話を Echo Universal で讀んだ初

めの方は特に目立つ。

御一同へ僕からよろしく。

君の常に親愛なイ、テ、

註、(一)化粧着はツウルゲーニエフの贈り物で、地は絹、クイミアの二縫製人が金糸で刺繡したものである。

## 三十九、

カアン、グラン・オーテル・ド・ラ・ブラース・ロワイヤル、

一八七七年八月十七日、金曜日夕。

我が親愛な友よ——「カアン？何ぜカアんだ？」と君は言ふだらう、我が親愛な老童よ。「一體カアンが何を意味するのか？」噫それそのことなんだ！ヴィアルドオ一家の婦人達はリュクか乃至サン・オーバンカの海岸で二週間を過すことになつた。そこで僕を先に立て、場所の下見をやるのだ。僕は君の手紙を此處へもつた來た、そして大急ぎで言ふ。君が僕のところへ來るのは、どこまでも僕にとつて結構だ、何ぜかなれば僕は火曜日までにはブウジイアルに歸つてゐるやうから。なほ僕はバリのフォブル・サン・オーレで何時君と會へるかを君から言つてくる

ことを期待してゐる。我々は四壁も震ふ程澤山語るだらう。よし、では火曜日から、僕は君の一言を期待する。

多くの愛を、

君の、イヴァン・ツウエルゲーニエフ

四十、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八七七年十一月八日、木曜日。

我が親愛な老童よ——若し君がどれ程永くクロワツサーに止つてゐるかど分るならば、僕はまつたく君に手紙を書かねばならん、僕はどうしても其處で君に會ひに行かねばならんのだから。我々は十日以前に田舎を去つて、決定的に此處に腰を落着けた。

僕は非常に健康だ、サリチール散曹達のお陰で、僕の痛風症はおしまひになつたやうだ。

僕の一番悲しむことは、僕が囑望し、且つ好きな一青年XXと嬢との婚約が破れてしまつたことだ。それは總て僕の眼前に起つた事である。それには他のところでも僕が出遇つてみ度く思

ふ、或る心理的の妙なことが絡まつてゐた。

我々は此事や、その他のことについても語らう。僕は誰にも會はない。ゾラは歸つてゐるだらう。僕は二三日うちに彼に會ひに行かうと思ふ、君が健全であつて、勉強せんことを望む。

シヤムロは君の三つの小説が再版になつたことを僕に告げた。愈々以て結構だ。

最上の愛を君へ。

君の舊友、イヴァン、ツウエルゲーニエフ、

追伸、政治界はエライことになつたね。僕はいつも此内閣は續かないで、一人の木偶が善い位置に置かれて、一般の人民よりも強大となると思つてゐた。

註、(一)マダム・グイアルドオの長女の婿で大印刷所の持主

四十一、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、一八七七年、十二月五日、水曜日。

我が親愛な老童よ——僕は未だ横臥してゐる。僕が手紙をあけて以來、又痛風に襲はれた。痛みはない、けれども人々はその脚をどう用ゐてゐるかを僕は疑ひ始めた。撞木杖について歩

キユスタヴ・フロオベル宛てたる書簡

く人々さへ、僕には巨人や豪傑に見える。僕は此状態にあつて、僕と同様に手も足も動かさな  
いあはれなフランスに共鳴する。何たる状態だ、我が友よ！斯る状態は嘗て以前に見られたこ  
ともない。蒸汽車が全速力で懸崖へ進んでゐるのに、機關士は穩かにその頭を掻いて、その腕  
をくんでゐる！嘘偽は到るところから、凍つた木の樹液のやうに出る。耻知らぬ嘘偽が、火の  
上に注がれる！僕は繰り返す、斯る事物の状態は嘗て見られなかつた。

マダム・コムマンヴィルは親切にも此患者を見舞つて下すつた。彼女は非常に丈夫——事實  
健全に暮して行かれるやうに見えると、僕は想つた。僕は又ゾラに會つた。彼はサラ・ベルナ  
アルに戯曲を書く爲め決定的に落着いてゐる。

僕は今丁度『ル、ナバブ』を読み終つた。それはドオデエの普通の水準を超えて多くの物が  
そのうちにあり、他の諸作はそれより遙か下位にある。彼が觀察したことはすぐれてゐる、彼  
が發明したことは薄つぺらで、枯淡で、又獨創的でもない。けれども總てそんなことがあるに  
しても、その本にある善いものは、僕をして彼に本當の手紙を書いてやらうと決心させた程い  
い。此手紙は彼を喜ばし、又いたましめるだらう。だから恐らく、つまり僕は手紙をやらな  
いことになるだらう。

君の状況はどうだ——仕事しておいでか？マダム・コムマンヴィルは、君が仕事してをると言  
つたよ。愈々結構。身體の衰へぬ前に、君の得る時間を極度に利用し給へ。一度衰へかければ  
萬事は休するのだから。基督教的立場から見れば柔従と謙遜とを以て人を鼓吹するのは結構で  
あらう、けれどもなほ何事かを爲し得る人にとつては一顧にも價しない。

君は新年に歸つて來るだらう、ではないか？左様なら、君に僕の愛を送る。  
僕は悲まぬ、けれども少しも幸福ではない。僕はグリユック（譯者註、有名な獨逸の作曲家、  
オルフォイスはその傑作）のオルフォイスのうちの淨土、エリシアムの陰の一つを想ひ起す。  
ジュール・シモンがマクマオンの大臣の一人となつたとき、言つたやうに、僕は「深い驚き、  
深い冷淡な」彼等の風貌を見るべしと期待する。ジュール・シモンが大臣！それはいゝ喜劇だ。  
さうではないか？

君の友人、イヴァン・ツウルゲーニエフ。

ツウルゲーニエフがドオデエに書いて送らうとした手紙は眞實彼に送られた、そして

Le Nalab (モーガル帝時代の  
の印度の總督)の著者は一八八三年紐育センチュリー・マガジンに書いたツ  
キユスタヴ・フロオマルへ宛てた書簡

ウルゲーニエフに關する論文の中で、それを發表した。次に示すはそれである——  
一八七七年五月二十四日、月曜日。

我が親愛な友よ——僕は是まで君の本について書いてあげたことはなかつたが、その理由はいつか折を見て書いてあげようと思つてゐたのと、その上、平凡な文句を二三並べただけでは飽足らなかつたからである。僕は君に御會ひするまで此事を延引してゐる。フロオベルも二三日のうちには歸つてくるので會合も程なく行はれやう。そしたら我々は再び會食を始めよう。

「僕は只此一事をいふに止めよう、Le Nabab は最も顯著なものであると同時に、君がいままでやつたものゝどれにも比儔がないものである。若し Fomont et Risler を直線によつて描くすれば、Nabab は波狀線に描かるべきであつたらう、けれども波山の絶頂は只第一流の才幹によつてのみ到達し得られる。

「僕は恁麼に幾何學的に表現することを御詫びをしなければならん。

「僕は永く、且つ烈しい痛風の襲撃を受けた。僕はたつた昨日始めて外出した。僕の脚も膝も九十歳の老人のものゝやうである。僕は英人の所謂 a confirmed invalid (定病人) といふものになりはしまいかと悲しく不安に思ふ。

「マダム・ドオデエによろしく。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 四十二、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八七八年七月十四日、月曜日。

我が親愛な友よ——僕が變な人間であることは全く事實だが、今度は君が思ふ程ではない。偉大なハマイコフが昨日の招待を僕にくれたことはもう君に御知らせした。若し彼が、此場合に他の人を招待しなかつたならば、僕はそれに出ないですんだのだつた。けれどもちよつと是を考へてみ給へ。二人の數學家は勝々招かれたのだよ！僕の名聲は既に、(僕の約束を果すことについて) 僕が永久に亡滅してゐる程悪し。

僕はゾラの小話を讀んだ。僕はそれに堪へない。僕は彼を感む。さうだ彼は正しく憐愍を以て僕を満たす。そして彼は一度も沙翁を讀んだ。……がないだらうと大に危む。彼のうちには決して彼が脱し得られぬ獨特な弊害がある。

キユスタヴ・フロオベル宛てた書簡



大によろしい、ではそれは土曜日にしよう！その日はきつと間違ひのない、僕を信じ給へ

君の常なる、イヴァン・ツウルゲーニエフ

註、(一)ツウルゲーニエフの舊友、地理學者として露國では有名な人。

四十三、

ブウジイワル、リュ・ド・メスメル、レ・フレーヌ、

一八七八年七月二十三日、日曜日。

僕も又獨逸に開かれる筈だと思つてゐたが、併しさうではなかつた。僕は何の結果も得るところもあるまいし、又得られもしない。此國際會議の事務に束縛せられてしまつた、そして僕は此處に演説などをやつてゐる。何と可笑なものではないか協議といふものは！ユーゴーが昨日堂々たる議論を用意してゐたと想ひ給へ。此議論は喝采せられ、まるでそれが憲法議會に於て演説せられたかの如く、印刷を命じられる。しかも五分の後には、正反對の決議が行はれる！おまけに彼自らがそれに賛成の投票をするのだ！我々は毎日開かれる一委員會をもつ（僕はその副議長だ）僕等はまるで白痴のやうに、何の進歩もしないで、只足踏みをしてゐる、僕は、

自分達は本當に白痴だわいと思ふやうになつた。僕は耐え得られるよりも以上のことをした。

木曜日には僕はカル、スバードへ遁げる。其處にいつたら君、どうか僕に手紙をやつてくれ給へ（シー、ボヘミヤ、郵便局留置）。僕は其處で自分の呑む水も亦眞物でないと敢ていふ、然し兎に角それは一層少く證明を缺ぐものである。

君の健康と忍耐とは僕が衷心より冀ふところのものである。

僕は一寸とゾラにあつた。彼はメゾン・ラフィットの近くに小さな家を買つた、そして今丁度それに移るところだ。

アンリイ・マルタンは確に大作家ではないが、チエルの長椅子に靠るテーマは、人をまるで小さな怪物のやうにびつくりさせることを告白してゐる。箇人的には僕はマルタンが非常に好きで、彼の成功を喜ぶ。

最上の愛を君へ。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

四十四、

ギユスタヴ・フロオベル宛てた書簡

パリ、リュ・ド・ツウエイ

一八七八年十一月二十七日、水曜日。

我が親愛な老童よ——君の小さな手紙に對して御答へする。その中の悲しいことは僕を悩ました。僕はクロワツセーに行く積りでゐたのだ。そしてよしや僕はさうしなかつたけれど、それは僕が如何ともし難いその際の事情によるものである。僕は四十歳の老友（僕は立身四十年のことを意味するのだ）バヌイコフを葬らねばならなかつた。彼はラムブイエに行き、其處で僕が見た、かの不氣味な家で死んだのだつた。ペール・ラシエースでは恐ろしい目にあつた——脚下には泥、頭上には寒か雪のやうなもの、そして到る處恐ろしい霧といふ鹽梅で。アングリと口を開けた坑に、巨大な重い棺を入れるのに人々は困難した。僕は此坑の口にふちの積み上げた脂肪のやうな、滑つこい泥の塊の上に立つて、二三告別の辭を述べた。僕は帽子を脱いで語つたので、少々悪性の風邪に罹り、その爲め部屋を出て、クロワツセーへ行くことを妨げられた、然し、僕は良くなつた、そして確に次の週間には、君がクロワツセーの御宅で僕に會ふ以外には外出しまい。僕は此處から君の唇に、懷疑的の微笑が漂ふのを見ることが出来る、そして僕は、君がそれをそこに漂はせるのを正しと、是認しなければならん破目になつてゐる——だが

君見てる給へ！

ゾラは未だパリに歸つて來ない、又僕はドオデエに會はない。ゴンクウルは、ちよつとした地方色、南路、ジブシイの名などを聞きに僕のところへやつて來た。彼は元氣がいゝやうだつたが、少々瘦せて、少しも正視しない、老ひて、深く凹んだ、光る眼をもつてゐる。彼は君のことを多くの友情をこめて話した。

僕は丁度六十歳だ、我が親愛な老童よ。それは人生終局の始まりである。スペインの諺に曰ふ『尾は剥ぐに最も困難な部分だ』と。けれどもそれは最も少ない愉快と、最も少ない利益を約束する部分である。人生は只それ自身を、死から防ぐことに忙殺せられてゐる純然たる箇人的事實に過ぎない。又此箇人的音調の強張はあらゆる當面の箇人に對してさへも總ての利益を汲み干してしまふ。しかし君自身は、かゝる悲哀の感じを添へねばならぬ程、少しも上機嫌でおいでぢやない。何事も言はなかつたことにして置いて呉れ給へ。僕等が會ふとき、僕は英露兩國の僕の旅行について、多く語るべきものをもつてゐる。きつと、僕に語らし給へ。皆此處では健康だ、そして言つてを頼む。僕からも愛を君へ。A hienkot —— 當日の前に通知する。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

ギユスタヴ・フロオベル宛てた書簡

## 四十五

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八七九年一月七日、火曜日。

君、未だ手紙を呉れないのか？だがそれもまあよからう、何ぜつて言へば、君が手紙を二週間乃至、十日前に僕に宛てて書いたにしても、僕は痛風で臥てゐたので、矢張り来ることは出来なかつたのだ。發作は烈しかつたけれど、短かつた、そして最後の五日間は、普通の人のやうに、僕は靴を履いて、歩きまはつた。兎に角君自身のことを知らし給へ、そして二月の始めに君が来ると約束したことを忘れ給ふな。

我々のあはれな午餐會は恐ろしく潰れかけてゐる。僕はドオデエから一筆もらつたが、右の腕をリウーマチスでひどくやられてゐる。

ゾラは四日でパリに歸つて、僕は丁度彼に會つた。彼は太つて、楽しさうに見える。彼は丁度田舎に家を建て終つたところだ。そして十日以後に *L'Assommoir* が上場せられる。彼は初日の夜僕に觀覽を約束した。恐らくドエライ例の一騒動が持ち上るだらう。けれども彼はそれを知つてゐるから、びくともしない。又彼はその露國にやつた文が惹起した騒動も、ウルバツハ

やクラルテイなどの猛烈な攻撃にも、びくともしない。けれども僕は忘れてゐた。君はそこで新聞紙を見ないで、全體の事について何にも知らんのだけども、我々が會ふとき、<sup>(一)</sup>それまでに皆忘れてさへしまはなければ、そのことを残らず話さう。僕は君がこんな絶望の沼にゐて、出ることが出来ないのを見て、ひどく苦しめてゐる。どんな事情の下にあつても、人知れず胸をいためるつてことはない。君がその仕事を飽かず續けてゐることを知つて、僕は悦んでゐるけれども其處に僕の理解しない或るものがある。シャルパンチエ<sup>(パリの)</sup> <sup>(大書肆)</sup>がサラ・ベルナルを出版したからといつて、君に何の關係するところがあるか？全體のことはホンの針でさしたゞけのことだ！その本はムッシュ・クレランによつてあはれな挿繪が爲されてあると同じ程馬鹿な書きやうがあつて、去年の流行よりも一層完全に忘れられてしまつてゐる。それから又君は一昨日のことをどう思ふ？

マダム・ヴィアルドオから君へよろしく、それから又僕の愛を君へ。

君の、イヴァン、ツウルゲーニエフ

註、(一)此手紙にあるゾラの手紙は最初露國の評論 *Messageur d'Europe* に、後に *Figaro* (一八七九年十二月に)掲げられ、更に *Les romanciers naturalistes* (自然主義小説家)といふ一巻の冊子にまとめられた。

キユスタヴ・フロオメルへ宛てた書簡

そのうちにはスタンダール、バルザック、ゴンクワル、フロオベル、ドオテールの推稱がのつてゐた。之が出版せられた當時は非常に議論が沸騰して、新聞紙の攻撃が烈しく、教育大臣バルヅウはフロオベル、ドオテエの例により、ゾラにレジオンドノール十字勲章を授けようとしてゐたがその考へを抛棄しなければならなかつた。ムツシユ、ポール・アレキシスはゾラに關するその本の中に、ムツシユ・バルヅウが『Assommoir』の著者に向ひ、自分の内閣の一長官になりませんかといつたとき、後者は『出来ない相談ですよ、そんなことをしたなら、貴下が大臣の職にかゝはりませう』と言つたと言つた程だ。

## 四十六、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八七九年一月廿一日、火曜日。

我が親愛なる友よ——君は僕が生きてゐる證據を少しもみせない理山を知り度いのだね。噫我が友よ、事實は斯うだ、僕は一箇の病人たるに過ぎない、そして何事をも企てる事が出来ないのだ。又ぞろ痛風にやられてから、今では二週間になる。僕が元通り室内を歩るさまはそれるやうになつたのは、たつた昨日からだ、それも勿論撞木杖に縋つてのことだ。僕は『Assommoir』

Hourの初日に行くことが出来なかつた。それは大に醜句を削られたやうに思はれるが、善い古い、メロドラマの成功を収めた。僕は昨日、兄の死去を知らされた。それは箇人的にも、又回想的にも僕にとつて大きな悲みであつた。我々は滅多に會はなかつた、又殆ど何等共通なものを有たなかつたけれども兄といふものは、ときに、友人と左程ちがはぬけれど、又常に友人とは異つてゐて、可愛さには劣るも、親密さにはまさるものだ、僕の兄は數百萬の富を積んで死んだ、けれども彼はその富全部を妻の親戚に遺した。彼はその遺言で、僕に二十五萬法を贈つた（彼はさう書いてよこした）。それは丁度彼が財産の二十分の一ばかりに當る……僕は多分猶豫なく現場に行かねばなるまい。僕の兄の此遺贈は多分煙になつてしまふだらう！そこで十日の後には僕は恐らくはモスクワへの旅行程へ上るだらう。其場合には我々はいつ又會はう？ クロワツセーに行かうといふ考へは何の役にもたゝない、それでもなほ僕はひどく君と會ひ度い。二月の末まで其處にとゞまるのは君にとつて本當に必要なのか？ 何といふいやな冬だ！ 土風だつて、僕以上に退隱した生活を送りやしない。獨りで、まるつきり獨りほつちでゐて、何事もしないのは人に自己の無用だといふ壓倒的の感じを與へるものだ。忍耐なる哉だ！ 仕合せにも此處の家内は皆健康だ。二言僕に書いて送り給へ。君の仕事が着々進捗すること

を望む。

僕の愛を君へ。

君の、イヴァン・ツウエルゲーニエフ

註、(一)長兄ニコライ

(二)激語が書いてあつたので、取り除いた。他の二通の手紙に於ても同様

#### 四十七、

バリ、リュ・ド・ヅウエイ

一八七九年一月二十四日、金曜日。

我が親愛なる老童よ——僕は君の手紙を受取つた、そして昨日マダム・コムマンヴィルは親切にも僕に會ひに来て下さつた。我々は永いこと話した、そして勿論君が我々の話の主題であつた。彼女は非常に達者なやうに見えた、そして又他事に傾倒してゐるやうだつた。僕は杖なしで歩るけるやうになつたら直ぐに、又何よりも僕が二階へ上れるやうになつたら直ぐに、彼女に訪問を返さう。

僕の露西亞旅行が延期せられるだらうつてことは全く事實になるだらう。それは露西亞から僕が受取る手紙の如何による。その場合には、僕はきつとクロワツセーへ行く……君の姪御の御話では君は丈夫ださうな、それが一番だ。

君は歩くのが嫌ひだが、つとめて歩くかんけりやいけなひよ。僕は嘗て一ヶ月以上も牢内(獨りほつちで閉ぢ籠つて)にゐた、僕の室は小さなもので、その熱は堪え難かつた。僕は一日に二度、室の一隅から、他隅に一〇四枚(二組)の骨牌を一枚宛運んだ。それで一日に二百八往復＝四百十六回歩いたことになつた。一往復八歩で、三千三百歩、殆ど二キロメートルの道程になつた。此賢い計算で、君を安心させよかし！若しひよつと僕が散歩をやらなひことがあつたら、僕は身體中の血を全部頭に集中させるのだつた。

僕は新聞の切抜きを一つ封入して置いた。それは腐れ儒者の仕事として僕を驚かした。確かなことを何か聞いたら、直ぐに手紙を書いてあげよう。愛を

君の、イヴァン・ツウエルゲーニエフ

#### 四十八、

キユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

我が親愛な病人——僕が出かけようしてゐたとき、君の手紙が着いた。僕今は行かない、それが君の希望なんだから、けれども實際君に會はなければならん——君の爲めにも僕の爲めにも——そして僕は月曜日に行く。二時としたらどうだ？僕は朝着いて、翌日までとまらう。若し君のところに僕に出す寢臺がないならば、僕はルウアンに泊らう。僕が露西亞にたつといふことは、多分といふよりも事實であるから、その前に君に會ふことに心をきめた。

何ぜ君は僕の電信（返信料前納）に答へなかつたか。君は本當に一日中僕を心配さしたよ。又マダム・ヴィアルドオだつてさうだ。夫人は、どれだけ君が好きだか、自分でも分らないつてことを、君に知らしてくれと、僕にねがふのだ。僕は昨日マダム・コムマンヴィルに手紙をやつたその返事は僕を安心さした。けれども彼女は單に骨折のことだけ言つたが、僕は君が脚を折つたことを知つてゐる。僕は夢に、君が右の膝の少し下にあるその箇所を示したところを見た。

よし、それでは、月曜日——*le Volente aut nolente!*（譯者、君が欲すると、欲せずとに關らず）僕は君に話したり、聞いたりすることを澤山もつてゐる。

僕が露西亞から戻つてくるとき、君が再び達者になつてゐることを望む、それは六週間後であらう。先づそれまでは僕の愛を。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

註、(一)フロオベルは脚を折つた

#### 四十九、

ブウジイアル、レ・フレーヌ・シャール、セーヌ・エ・オワズ、

一八七九年八月三十日、土曜日。

我が親愛なる老童よ——よろしい、僕は君の召喚を待たう。僕が露西亞へ行かうと思つてゐるのは本當だ。仕事を其處にしに行くのではない——驚いた！——只ほんのマルセイユの俚語たる『故郷の空氣』を呼吸する爲めである。此決心は、生意氣を云つてみれば、僕自身をそのうちに、消耗してゐた神經過敏の状態から、僕を曳きずり出した。笑ふなら笑ひ給へ、けれどもその停滯の沼に頸までつらからうとする心は、幾分か僕を鎮靜せしめる。それだから人間だと、その生意氣な奴が叫ぶだらう。

僕は十頁の小さな話をマダム・アダンに約束した、そして君に此肝要な創作の訂正を願ふつもりであることを、彼女に打ち明けた。それだから君に警告して置く、十一月の末頃、僕は原稿

キユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

をもつて、君のところへ押しかけて行くと。

僕は又BとPの哲學を知り度いと望んでゐる。それは君に俟たなければならん。待つてゐるよ。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸僕はドオデエの第一の小話を讀んだ。

註、(一) 追教中の王 *Le Rois en exil.*

五十、

リュ・ド・ヅウエイ、

日曜日朝。

我が甚だ親愛な友人よ——昨夜又もや僕の脚は腫れて、又もや肱掛椅子に縛り付けられてしまつた。明後日出發が出来なからうか分らぬけれど、兎もあれ今日は外出は出来ない。

僕は君の原稿を送り返す。君がゾラに御逢ひであつたら、僕はスタツスウレヴィチにあつて話をすると直ぐに小話の題を彼に送ると傳へて呉れ給へ。僕もち思ひついたことがある。バ

リのジャーナリズムの内部の仕事を中心に研究したものを彼が書いたとしたらどうだらう、それは『真相』ではないだらうが、それでも非常に興味があらう。一般に斯處ものを渴望してゐるのだから。

では左様なら、又よりよい機會まで。僕が最上の愛を君へ。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸—マダム・コムマンヴィルとその御良人へよろしく。

註、(一) *Messenger de l'Europe* の記者

五十一、

ブウジイヴル、レ・フレーヌ・シャール、

一八七九年十一月十三日、木曜日。

我が親愛な老童よ——僕は今丁度やりかけてゐるちよつした物の校正を自分でクロワツセーに携へて行く。そのものは十五日發行の號に掲載しられる筈であるから、それは十二月の末頃になるだらう。二十四時間前に君へ前以て通知を送る。

キユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

此六日間、我々は L'Education Sentimentale に心を奪はれ、愉快に讀み耽つてゐたことを知つてゐるか？ 僕等が讀んでゐた他の物の後 La Revue des Deux Mondes の小説がそのうちにあつたことは事實だが、その餘は言ふも要なしである。それは奇蹟のやうに、我々を駭かした！ 然し一つ疵がある、そのうちにたつた一つある。それはマダモワゼル・アルヌウの歌を君が書いてゐるところだ。先づ君が彼女についての記述によれば、彼女は何かその他のものを唱はねばならんし、又それをちがつたふうに唱はねばならぬのだ。第二、コントラアルトの聲は、第三の調子を最初の二調子よりも高くすることに、その効果を求めはしない。第三、君は音樂の立場から何を彼女が唱つてゐたかを確實に區別すべき筈であつた、それがないと、印象が不明でとうやら少々滑稽にもなる、それは君が少しも欲したところではあるまい？ けれども君は斯ういふ古典の一節を記憶してゐるか？ Ubi plura nihil in carmeni &c. (譯者) それ以上餘計ものがあるならば、歌には何物もなくなる云々) 僕は B・P がその大きな宗教的行爲に必要な悔改を望む。それが一層熱誠であればある程、彼等は一層猛烈に後に制裁を脱却するのである。

僕の健康はよろしい、僕の痛風症は鎮靜してゐる、けれども家内にはなほ病人がある。ヴィアルドオ夫婦へ君の詞を傳へた。有難うといつた。

君に最上の愛を送る

君のイヴァン・ツウルゲーニエフ

### 五十二、

ブウジイアル、レ・フレーヌ、

一八七八年十一月二十三日、日曜日

確に僕は十二日、三鞭二瓶を小脇にかゝへて、君が生存の「幾年」かを祝すべく、クロワツセーに出掛けよう。まさしく二週間以前、十一月九日、僕は六十一歳であつた！

十二月初旬の Nouvelle Revue に出す僕の小説の校正を君にやるが、そのうちに當然あるべきことが、絶対にしてなかつたところで、君は批評を憚つてはいけないよ。

僕も亦ムウルシアの洪水の犠牲者の爲めに行はれた祭典の主催者側に立つ一人である。此祭典の當日は十一月十一日である。僕等が爲すべきことは——君も承知すると思ふから——白いコートを着て、白ネクタイをかけ、釦穴にちよつと徽章をつけて、その祭りに臨席するだけである。全く容易いことさ。君は承諾して十日か十一日の夕方かバりに來べきであつた、そして我々は十一日の夕方か、それでなければ十二日の朝早く、再びクロワツセーに立つて行くべき

キユスタヴ・フロオメルへ宛てた書簡



であつた。

我々は仲間ではなほ *Education* を讀んだ、いつも同じ愉快を感じる。

否、*Nana* は未だ成功してゐない、けれども二三日前まつたくチャールディングなところがあつたけれども全體から見れば、それはダルダ、又ゾラの一層注意すべきことは、斯麼詞を用ふべくんば、それは少しも單純でなく、恐ろしく *tendenz* (傾向的?) である。

僕は明日君の姪御に約束がある。僕は此週の末頃田舎から歸る。御互に程なく會へる。僕が最上の愛を君へ。

君の、イヴァン・ツウルゲイニエフ

### 五十三、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八七九年十二月二日、火曜日。

此處に僕は御話したあの退屈な仕事で君に迷惑をかける。又之れは君が僕に對する友誼上やつていたゞきたいものである。讀んでくれ給へ、そして此小著も、君の心のまゝに改訂、添削

し給へ、そして出来るならば明日までに僕に戻して呉れ給へ。僕は出来るだけの御禮を言ふ。

僕は二日前パリに歸つた。君が十一日此處に来るように立てた僕の計畫については、君は贊成したと未だ言つて寄越さない。兎に角僕はクロワツセーで十二日を過す。それはきまつた事だ。前以て萬謝する、そして僕の愛を君へ。

イヴ・ツウルゲ

### 五十四、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ五十、

土曜日朝。

我が親愛なる老童よ——胎卵の鹹漬と、鮭とは *MGF* に送るやうに、ルアン、ケー・デュ・ア  
 ヴル、ムニシユ・ピロン宛で四日前に送つたのだ。(此宛名は *Communiquel* が僕に與へたもの  
 だ) 必要な調査をして呉れ給へ。僕は特に鮭の紛失を遺憾に思ふ、それは美事なものであつた  
 此處の寒さは僕を凍えかし、馬鹿にしてしまふ。然し僕はもう出發の準備を始めた。葡萄酒(あ  
 んな葡萄酒!) は汲まれた、それは飲まれねばならん。僕は程なく僕が當代最大の作家と尊敬  
 キュスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

するレエフ・トルストイの小説三巻を送る。僕の意見では、彼とその位置を争ひ得るものは誰であるかを君は知つてゐる、相憎くと此翻譯は一露國婦人によつて爲されてゐる。一體僕は婦人の翻譯を大に危むものである。特にトルストイの如き男性的の著者に於てさうである。先づ僕の愛を君へ送る。

君の、イ・テ・

註、(一)戦争と平和。

一八八〇年一月十二日附・トルストイ宛書信で、ツウルゲーニエフは『戦争と平和』の著者へ此著に關するフロオベルの答へを送つた。それは我々の讀者にとつて、此處に掲げる興味があると思ふ——

『レオン・トルストイの小説を送つて下さつて有難う。それは最上に位するものだ。彼は何たる詞の畫家、何たる心理學者であらう！最初の二巻は崇高であるが、第三巻は感じが鈍る。彼は自身を繰り返し、又哲學化する！一言にしていへば、彼は自身に人間を、又著者を、露西亞人を實現する、然るにそれまでは人は只自然と人間との外は何物をも實現

しなかつた。屢々僕はシエーキスピアにふさわしい或る物を發見した。僕はそれを讀むとき、感嘆の辭を漏しつゞけた……それは長い。さうだ、それは偉大だ、眞に偉大だ。』

## 五十五、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八八〇年一月二十四日、土曜日。

我が親愛な老友よ——君の手紙と、君がトルストイの小説についていつたことが皆僕にはどれだけ嬉しいか、君には想像がつかない。君の賞讃は僕の君に關する左の意見を強める。彼は非常に大人物だ、それでも君は指を彼の弱點に觸れた。彼は自分の爲めに神秘的で、子供

臭く、俄に協和し難い哲學を組織し、その爲め彼は『戦争と平和』の後で書かれて、その中には絶対に第一流の物があるその第二作を傷けてしまつた。僕は我々の良友たる批評家達がそれに對して何といふかを知らない。(僕は「戦争と平和」をドオデエ及びゾラにも贈つた。)けれども僕には Flaubertus alit (フロオベルは斯く言へり)で事は決定してゐる。その他のことは何でもない。

キエスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

君がその二人の仲間と暮してゐるのを見て、僕は嬉しく思ふ。

僕は次の週間にバリを去る、けれど僕は立つ前に、君に消息を知らせる。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

註、(一)アンナカレニナ。

(二)此手紙より前、ツウルゲーニエフはトルストイに宛て、『戦争と平和』をテーマ、エドモン・ア  
ブウ、アンドレ・ツウリエ等に贈つたと言ひ、一八八〇年一月十二日附の手紙で、彼は當時ア  
ブの編輯した十九世紀雑誌に出た、トルストイの小説に関する記事の切抜きを封入した。ツウル  
ゲーニエフが佛蘭西に、その有名な露國の仲間を紹介するに努めたとは、彼がアンドレ・チュリエに  
宛てた手紙を読むとよく解る。

### 五十六、

バリ、リュ・ド・ヅウエイ、

水曜日朝。

我が親愛な老友よ——才鮭は次の週間も到着しさうもない。兎に角、僕は他の瑞典の魚を君

に贈る、けれどもそれは才鮭程よくはない。

二冊の本を今日送る、そして今日君の姪御に會ふ。

君が讀んでかした三章、特に第二と第三とは最大限度の愉快を僕に與へた。勉強し給へ。  
勇氣を鼓舞し給へ、そして出来るだけ早く此處へ來給へ。

此方でも働かう。君に愛を送る

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

註、(一)是はフロオベルが未完の絶筆 *Bonvard et Peuchet*.

### 五十六、

リュ・ド・ヅウエイ

三月十四日、水曜日、午前十一時三十分。

我が親愛な老童よ——僕は只今、マチルド公女に、午餐會に出席し致兼ねると断り狀を書い  
たところだ。それは非常に遺憾だ。本當に運が悪い、けれどもそれには何の疑ひもない、僕は戸  
外に自分の顔を出せないのだ。僕は始めて齒科醫に會ひに行くところだ、日は直ぐに歸つてく  
キユスタヴ・フロオベルへ宛てて書簡

る。僕は昨夜又も烈しい神経痛にやられた。どうぞ此事は相憎く皆本當だと公女に話して呉れ給へ。

扱て今度は別なことだ。スタツスレヴィチは、熟考の後、四月十三日の號に二つの物語を一緒にのせることにすると、僕に書いてよこした。それが彼の人の監視である。僕はあへて彼は正しいと言はう。僕は短かい序文をそれにかいた。それがあつても此處で、その出版をするのに何の違ひもない。スタツスレヴィチは僕に手紙で、*Herodiade* は *St. Julien* と同じ長さであるから、それを基礎に計算を立て、直ぐ様金を送るといつて寄越した。(君はそれを遺憾と思ふまいと、諷して置いた)。

君のやゝ情沈した、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 五十七、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ五十、

土曜日、朝。

我が親愛な老童——今度こそ僕を寢坊の、碌でなしと、ボロクソに言ふだらうが、それは當つ

てゐると、僕も自認する。だが君が僕をやつゝける前(見給へ、此處で僕は自分とテミストックレースとの差別をつけてゐる)。僕のうちの者共は皆今日立つ、僕は手が空く筈だったのに、ポール・ヴィアルドオ(マダム・ヴァルドオの子息)が明日音樂會を開くことになつてゐた。それを僕は失念してゐたのだつた。で僕はどうしてもそれに出席しないわけにはいくまい。火曜日には、慈善の爲め(露國藝術家保護協會の)講演をすることになつてゐる。だから僕は水曜日に行く。けれどもゾラが昨日やつたサルダナゾラス式午餐會で、彼と、ドオデエと、ゴンクウルと僕とは、日曜日(明日でない、次の日曜)に君を訪問することに約束ができた。僕等は間食の時に着く。ゾラ達はその夕方に歸るが、僕は月曜終日滞在する。今のところでは、君が僕を信用しないのは至極道理だから、僕も氣持よく君の悪口に頭を下けて置く、だが今度こそ計畫は實現せられる。

僕の愛を君へ。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

マダム・コンマムヴイル宛の書簡

一

ブウジイブル、セエヌエ・オワズ、メゾン・オルガン。  
一八七三年八月十九日、水曜日。

マダム——貴女が私に下さった第一の御手紙は、私がカル、スバードから、パリに歸つたとき着いたので、私はそれに返事を出すのは餘り遅いと思ひました。ですからなほ更一生懸命でたつた今受取つた御手紙の返事を急ぐ次第です。貴女は明らかに、餘り私を買ひ被つてお讀みになりました、けれども矢張り私は嬉しいのです、又私はそんな褒詞を大に誇らしく思ひます貴女の *Les eaux Printanieres* の御批評は、全然立派なものですけれども適當に書かれてもゐず、又必要でさへもない第二部は、私は自分の記憶に任せてしまひました、私は九月十日から十五日までの間にクロワツセーに行く積りです。その時分に貴女も一寸とその方面へいらつしやいませんか。パリに一度戻つたら、屢々貴女にお目にかゝり度いと存じます。

どうぞコムマンヴイル氏へよろしく御傳へ下さい。

貴女の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

二、

リュ・ド・ヅウエイ、  
土曜日、朝。

困りました！マダム・コムマンヴイル、私は今晚御宅へ伺へないのです。貴女や、ゲーテの御仲間をして、非常に愉快な一夜を過す代りに、(内々の話)私はマダム・カルワデイの演奏會に出席して、退屈しなければならんです。是は據處ない仕宜なんです。

どうか他の日を(明日を除き)知らして下さい、歎んで御用を致します。

君の最も親愛な、イヴァン・ツウルゲーニエフ

三、

リュ・ド・ヅウエイ、

マダム・コムマンヴイル宛の書簡

水曜日、朝。

親愛なマダム・コムマンヴィル——人は言ひ、痛風は行ふ。貴女は水曜日御在宅なのですから、今日はきつと上る積りだったのです。然るに昨日以来私は脚を腫らして床にいたつきり動けません。私がどんなに失望してゐるか、どうぞ御察し下さい。此病が永続しないように、又新年の御慶を貴女に述べて、最も親愛な願慮を貴女に致し得られんことを願つてをります。

イヴァン・ツウルゲーエフ

追伸——コムマンヴィル氏へ宜敷、

註、(一)人は言ひ、神は行ふといふ獨逸の諺をもぢつたもの(譯者)

四、

プウジイアル、レ・フレーヌ、シャール。

一八七九年八月二十六日、火曜日。

親愛なるマダム・コンマンヴィル——貴女が私にそんなに興味をお有ちになつて、私が求めもしなかつた、又理解もしない任命のことで私を御祝ひ下さるのは御親切な次第です。けれど

も一體『社會教育官』といふものは何でせうか？それは右の方へ紫の——紫のです、赤ではありません——紐を帯びてゐるやうです。私はオックスフォード、ドクトルの學服の上に佩用しませう、それは眞赤です。から二つの色はしつくりと調和しませう。

貴女の御健康と、御仕事の模様をちつとも知らして下さいませぬ。ですから私は皆都合よく運んでゐることと信じてゐます。貴女はまだしばらくクロワツセーに御滞在なさいますか？私は貴女の叔父さんから手紙をいただきました、けれども私は此頃始終手紙を書く氣分にならなかつたのです。私の代りに叔父さんをキッスして下さい。是を御頼みしてもいゝと存じます。どうぞ貴女御自身には、温情をこめた『握手』を御受け下さい、

貴女の誠實な。

イヴァン・ツウルゲーエフ

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

木曜日、朝。

何といふ恐ろしい椿事(二)でせう！私は直ぐに返信料前納の電報をフロオベルに打ちました、然

マダム・コムマンヴィル宛の書簡

し返信がないので、大に心配してゐます。私は御クロワツセーに明日参ります。貴女は何かの報知を私に御知らせ下さることは出来ませんか？

私は此手紙をムツシユ（主人）にもマダム（奥さん）にも宛てて書いてゐます。御夫婦のうちどなたかクロワツセーへ御出向きのことと存じます。亂筆御免、何卒よろしく。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

六、

バリ、リュ・ド・ヅウエイ、

土曜日。

御手紙誠にく／＼有難う。私は少々快方に向ひました。別言すれば、榎木杖に縋れるやうになりました、が何時外出が出来るか知りません。

私が一番最初に訪問するのは勿論貴女です。よろしく、コムマンヴィル氏へもよろしく。貴女の最も誠實な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

七、

ブウジイアル、レ・フレエヌ・シャール、セエヌ・エ・オアズ、

一八七九年十一月二十三日、日曜日。

親愛なマダム——私は未だ田舎にゐます、そして私は貴女の御手紙を昨夜受取つたばかりです。『次の日曜』が、今日の意味になりはしまいかと、大きに危んでゐます。そんな場合には貴女が私にお求めなさる、私が最も悦んで、父老デイドンへ渡すべき報知は、餘りに遅くなるでせう。けれども私は明日バリへ行き四時頃御宅の前を通りませう。どうあつても、私は父老デイドンの御役に立たないまでも、貴女にお目にかゝりませう。

私の厚意を御受取り下さい。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

八、

マダム・コムマンヴィル宛の書簡

スバックスコイエ、アリヨル洲、ムツェンスク、

一八八〇年五月二十七日、十五日、木曜日。

親愛なマダム・コムマンヴィル——貴女が御愁傷の最中に、私のことを念つて下さるのは感謝の至りです。貴女の叔父さんの御逝去は私が是までに経験したうちの、最大の悲みです。又私は彼にもう二度とは會へないのだと諦めをつけることが出来ません。

是は私に最も残酷な打撃です。私は数日前新聞を開くと此報道を見ました。最も深い慰れみと、最も暖かい同情から、私は大いに貴女のことを思つてをります。それは慰められるを拒むかの悲哀の一つです。

私は三週間の後バリに歸ります。それから上つて、直ぐに御目にかゝります。彼を殺したあの小説の發刊についても、或はその他の事についても、私は貴女の御意次第に致します。私はフロオベ、姪御は、私が彼に捧げた愛情の幾分を既に承繼してをられるやうに感じます。

では御機嫌よろしく、又御目にかゝりませう。それまでは私は最も優しい同情を以て、貴女のことを思ひませう、いつも變らぬ。

貴下の最も誠實なる、

イヴァン・ツウエルゲーニユフ

註、(一)フロオベは一八八〇年五月八日にクロワツセーで死んだ。

九、

ブウジイアル、レ・フリース、

一八八〇年七月二十二日、木曜日。

親愛なるマダム・コムマンヴィル——バリで御目にかゝれなかつたので大きに失望しました、けれどもそれは私の咎ではありません。私はバリで七月十五日附の御手紙を夕刻受取りました。そして電報を貴女へ打つ手段がありませんでした。私はひよつとしたら、御目にかゝれようかと、リュ・ヅ・フ・ブウル・サン・オノレへ参りました、そして五時には仕方なくブウジイアルへ歸りました。御面會はそれ故、止むを得ず一月遅れとなります。

私が此委員會の副長となる提案については、私は嘗にそれを承諾したばかりでなく、又非常に愉快に存じます。それは私の決して忘れることのない、あはれな、愛する友への一種の義務です。フロオベルのことなら、どんなことでも私は全然貴女の御下命に従つて働きます。

ダマム・コムマンヴィル宛の書簡



貴女が露國に於ける哲學に付いての御疑問はすっかり私を駭かしました。私は、人々はそれについて恐ろしく僅かな興味しかもつてゐないことを申し上げねばなりません。ツイ近頃二人の若い著者達が此問題について、二冊の著書を出しました。此種の本が出て以來、随分長い時間が経過してゐます。此二人のうち、一人の方はもう發狂し、も一人の方も氣がちがひかけてをります。露國を騒がす宗教上の問題は哲學や文學には何の關係もありません。

一月後、御目にかゝりませう。一寸一筆書いてお寄せしなされば、私は直ぐにバリへ参ります。最も親しい願慮を、

貴女の恒にかはらぬ、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 十、

ブウジイブル、レ・フリース、

一八八〇年十一月十一日、木曜日。

親愛なるマダム・コムマンヴィル——私の手紙が御迷惑をかけたことを非常に遺憾に存じま

す。けれども考へてみて下さい、ムッシュ・コムマンヴィルはマダム・アダンと新に交渉を開始しようと決心しました。彼はその家族を代表して働く全權を私に與へました。私は彼女に會ひに行きました。私は此事件を私の力の及ぶ限り最上の方法で處理しました。今や全事件がまるで是までなかつたものゝやうに取扱はれてゐます、そのお陰で、私はマダム・アダンに對して妙な位置に立つことになりました。ですから私は彼女に私が歸つて行かねばならん理由を知りません。ムッシュ・コムマンヴィルが、彼女の提議を承諾することを、きつぱりと語るならば、一切のことはちやんと落着するのです。

私は委員の人名表を受取りました。それは完全です。只今は、ヴィクトル・ユーゴーがゾラと一緒に坐ることを拒むだらうと氣遣ひます。私はバリで土曜日にモウバツサンと會ふ約束になつてをります。我々はどうか決定致しませう。私は多分ユーゴーに逢ひに参りませう。

私は此處では全く獨りボツチですよ、奥さん、私は貴女が好きだといふことを信じて下さい、それは當に貴女が私のあはれな友人の姪だといふばかりでなく、貴女御自身が私を最も深い尊敬と、愛情とを以て感激さして下さるからです。

どうぞ御良人へよろしく仰被つて下さい。

マダム・コムマンヴィル宛の書簡

貴女の最も健實な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸——モウバッサンとの會見については後に御知らせ致します。

此手紙の始めに、ツウルゲーニエフはギユスタヴ・フロオベルの遺著 *Bouvard et Pecuchet* を *Nouvelle Revue* に掲載することについて、些か誤解が起きた。けれどもその紛擾はツウルゲーニエフの奔走によつて、調停せられた、それは一八八〇年十一月二十九日附でマダム・コムマンヴィルに宛てた彼の手紙で分る——

『此處に調印した契約書があります。寫しはマダム・アダンの手に残つてゐます。彼女はその原稿を、ムッシユ・コムマンヴィルが明日（木曜日）三時三十分に、彼女に持参せられんことを御望みでした……』

『私は事件の落着を悦びます、随分と御機嫌よろしく。』

### ジオルジュ・サンド宛の書簡

既に述べたやうに、ツウルゲーニエフがヴィアルドオの宅で、ジオルジュ・サンドと知己となつたのは一八四七年であつた。是はムッシユ・シャル、エドモンがノアン莊の所有主自身から聞いたところであると、此書の編者に言つてよこしたことである。まつたく、ムッシユ・ベ・ヴニアンネンコフ——ツウルゲーニエフの最も舊い、最も親しい友人は、ツウルゲーニエフの若い時代の回想記のうちにこんなことまでも言つてゐる。ツウルゲーニエフはその母から一切の金錢の支給を断たれて、南佛蘭西の一地に於て、ジオルジュ・サンドの扶持を受けたと。だが之はツウルゲーニエフ自分の陳述によつて見れば、ムッシユ・アンネンコフの明白な間違ひで、その實當時困難の時代にツウルゲーニエフはクウルタヴネルのヴィアルドオの家で暮したのである。よしさうではあつても、ジオルジュ・サンドは困つてゐる頃のツウルゲーニエフについて知ることは僅かであつた上に、ツウルゲーニエフの聲名は露國に於てさへ、まだほんの揚りかけたばかりであつたので、文

ジオルジュ・サンド宛の書簡

學者としての彼を知ること、なほ更僅かであつた。

然し、ツウルゲーニエフはジョルジュ・サンドの熱心な稱讃者であつて、彼はその文壇經歷の最初からその影響を受けた。一八〇五年に書かれた同期の作者ツウルジニンへ送つた彼の書簡で、ツウルゲーニエフは、遂には彼女の影響を罷脱したけれど、彼はジョルジュ・サンドをその青年時代の『師』であると告白した。彼は彼女に『既に発見せられた、又全真理がなほ達成せられない一時代に於て、常に発見せらるゝ彼の不完全な真理と、追躡者達を、彼女に負ふところがある』と言つた。少し後、彼は再び言つた——『ジョルジュ・サンドはバリにはゐない。又若し私が彼女に逢つたにしろ、私は、彼女の脚本の失敗について、何事も言はなかつたらう。その脚本はまつたくのところ力弱い創作であつた。ノアの孝行な息子のやうに、私は寧ろ眼を反向け、父親の裸をかくし度い。』と。

ツウルゲーニエフが、露國に於ける現實派の首領たるゴーゴリについて話するとき、同様な言ひ方をするのは興味がある。一八五三年十一月十四日附の、有名な露國文學者アクサーコフに宛てた手紙で、著者に焼き棄てられて只断片のみが残つてゐる『死せる魂』の第二部のことを斯う言つてゐる、——『第九章は素敵だ。然し第五章は、その非實在の農夫ムウ

ラトーフの性格によつて……いやそれは言はぬが花だ、却つてノアの孝行な息子のやうに我々文壇の父親の裸體を蔽はう。』

『獵人日記』の佛譯が出来て始めて、ジョルジュ・サンドがツウルゲーニエフの價値を認めることになつた、又それは彼女にとつて一つの天啓であつた。彼女はその小説 *Pierre Bonin* をツウルゲーニエフに献する辭のうち、『獵人日記』についての感想を書いてゐる——

『數年以前に亡くなつた一人の知らない人に關する此力弱く、小さな研究が、私の抽斗の一つに轉がつてゐるを見付けましたとき、私はそれを公にしていゝものでせうかと疑ひました。私は貴方が *Memoires d'un Seigneur Russe* (露國紳士の手記) の意味だが、名で御出しになりました、人生から取つた大きな肖像畫展覽會にすつかり魅せられてしまひました。何といふ美事な手際をその畫はみせてをりますこととせう！どんなに人は、貴下がお書きなさつた時分には、未だ農奴であつた、北國の百姓達や、その人達と二三分間の會話で、貴下が、生命と色彩に富んだ、その畫をお描きになつてゐるかの小地主や、貴族のことをさながら見たり、聞いたりするやうに知ることとせう！之は他の者には、出来ないことと

す。(一八七二年十月三十日ル・タン。)

けれどもその時ですら、彼女は著者その人を殆んど知らなかつた。ギユスタヴ・フロオベル宛一八六八年の末に書いた手紙に、彼女は言つた『ツウルゲーニエフは貴下をインキ架より引張つて行くことに成功しましたから、我々よりも運がようムいます。私は殆ど彼を親しく知りませんが、彼の著作は暗記してをります。何といふ才でせう！又どんなに獨創的で又強烈でせう。私は外國人は我々よりも成功すると思ひます。外人達はポーズしません、我々はいつても何かに向つて働き、頭を下けます。』

又一八六九年同じ人に宛てた手紙で、彼女は斯う書いてゐる——

『私はその著を読む以前にはほんの少し知つてゐた、又讀んでからは全く敬服した、ツウルゲーニエフ氏と改めて交誼を結ぶことを悦んでをります。貴下は彼の方が大層好きのやうに見えます。私も亦彼の方が大變好きでムいます。貴下の小説がお終ひになり次第、直ぐに、彼の方を此處へおつれ申して下さいませんか。』

二人はまつたくノアンでその友誼を再訂した。フロオベルの御蔭で、二人の交際は一際頻繁になつた。その時は丁度普佛戦争の直後で、ツウルゲーニエフとジョルジュ・サンドは

始めて手紙を交換した——一度始まるや、一八七六年ジョルジュ・サンドの死に至るまで兩者の交通は續いたのであつた。

我々はフロオベル宛の書簡で、ジョルジュ・サンドの死がどんなにツウルゲーニエフの心を哀傷せしめたかを讀んだ。『獵人日記』の著者が、*La petite Fardelle* (小ファデット)の女流作家に對する友情を改めて力説せん爲め、我々はツウルゲーニエフが一八七六年ノヴォエ・ヴレーミヤの記者スヴォリン氏に書き送つた、二三の哀しい詞を引用しよう——

『私がベテルブウルグを通過するとき、貴下の記事の一つに於て、次の詞を讀んだ——

『ジョルジュ・サンドは死んだ——私は彼女について語らうとは思はぬ。』

『貴下は、多分彼女については、言ふならウンと言へ、でなければ少しも言ふなど、仰被るのでせう。』

『私は幸にジョルジュ・サンドを個人的に知つてをります。どうぞ之を一場の空言と見なさないで下さい、その稀代な人物に近寄るの特權を獲た者は、いゝ福運に預つたと思ふていゝのです。』

それからツウルゲーニエフは、ジョルジュ・サンドに近しかつた一佛蘭西婦人が、ノアン

の Chatelaine (莊園の女主人) の親切や、土地の人民に愛せられてゐたことを書いた手紙を引用して、附け加へて言ふ——

『八年以前、私がジオルジュ・サンドをよく知るやうになつたとき、私が以前に彼女に捧げてゐた熱誠は、もう減退してゐました。彼女は最早私の偶像ではありませんでした。他の恐らくは、ヨリ善い詞の意味で、彼女を尊崇せずしては、彼女に近寄ることは出来ませんでした。誰でも彼女の前へ出る者は、無限に親切で、温かい。そのうちにはあらゆる私慾は詩人的熱情と、理想に於ける信仰の不滅の火焰により、とほに焼き盡される性質——何の人間でも驚くべき程、それに近く又親しい、又それから同情と親切とが迸り出づるやうに見える性質をさとのであります。それに冠するに、彼女自らはさとらぬ、或る高い、自由で、英雄的な一種の圓光が彼女を取りまいてゐます……ジオルジュ・サンドは我々の聖人の一人でありました……貴下は私が何を言つてゐるかお分りになりませう。』云々。

## 一、

クロワキユ附近、ルウジユモン、

一八七一年九月木曜日、幾日だが私はよく知りません。

親愛なるマダム・サンド、——大きな御馳走でした。其處で私はおいしいマデイラ酒を澤山飲みました後、私はヴィアルドオと、自分とは、當日の獵の結果の幾分鹿一頭と雉子二羽を貴女へ御送りするだけの正義はもつてゐます。それはおいしいものですよ。私は馬鹿に眠むいのです。けれども私はすばらしく貴女を愛します、私は又ノアンの住民を皆愛します。左様なら日曜まで！

貴女の忠實な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸、鹿を殺したのはヴィアルドオです、事實彼は二頭を仆しました、それでゐて彼はその日の獵に不足を言つてゐました。

## 二、

パリ・リュ・ド・ツウエイ、

一八七二年十月十日、水曜日。

親愛なるマダム・サンド、——小さな娘達が貴女へ手紙を書いてやりますので、私も一筆附け

ジオルジュ・サンド宛の書簡

加へます。私はノアンを見たら、また貴方にお目にかゝつたなら、どんなにか愉快だらうと言はずにをられません。それは確に人が夢想し得られる限り、最も愉快な幽棲です、そして貴女の周囲は本當に心地よいのです。貴女にはそれがよく適當します。人は適當なものが成就する時には、いつも嬉しいものです。子供達はノアンの事より外には何事も語りません。私は痛みが去り次第、冬中其處へ歸つて行く積りです。まづは貴女の御手を接吻し、私に代つてノアンに宜敷御被つて下さい。

貴下の熱誠な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

三、

バリ・リュ・ド・ヅウエイ、四八、

一八七二年十月三十日。

親愛なマダム・サンド、——昨日のタン新聞をよんで、私がどんな氣持がしたか御察しがつきますか？私は逆もそれを思ふ存分に言ひ現はすことは出来ません。私の詞は人の身に亘ることになると筆にも、舌にも、いつも自分が感ずるよりも遙に拙劣な傳達者となります。それは

内氣のせい、それとも不器用なからでせうか？私はよく知りません。例せば、私がノアンへ参りました時、貴女が、文學者として、どれ程大きな影響を私に及ぼしたかといふことを御話しする積りであるのに、どうやらそんなことは一言も申上げなかつたやうに思ひます。けれども今度こそは、ジョルジュ・サンドが私の本について云つたことを讀み、どんなに感激して、どんなに矜らしく思つたか、彼女がそれを言はうと欲したことをどんなにか幸福に思つたでせう。シルレルの詩句があります。

當時の最善の人々の爲めに生きた人は

總ての時代の爲めに生きてゐる——

と、ですから、私は現在の爲めに此上生きる何者をも持ちません、貴女はその不死を私に願つて下さいました。

有難う々々、私は貴女とバリで間もなく御目にかゝつて、再び御禮を述べることが望みます。兎まれ御手を接吻します、常に

貴女のものたる、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

四、

リュ・ド・ヅウエイ、

一八七二年十二月二十九日、日曜日。

親愛なマダム・サンド、——御贈り下さつた美事な袖掛は、どうも有難う。私はそれを昨日からかけて見せびらかしてゐます。新年でお芽出度う、貴女へも、御宅の皆様へも御祝ひ申します。私のいやな痛風が、クリスマスに上ることを邪魔します、けれども私が四月佛蘭西を去る前に貴女とノアンで御會ひするには、差支えないと存じます。先づ左様なら、御手を接吻して、

貴女の忠實なる、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

五、

リュ・ド・ヅウエイ、バリ、

一八七二年十二月二十九日、日曜日。

親愛なるマダム・サンド、——フロオベルに私は月曜日までは来られないと申上げた筈です、

けれども今、私は水曜日以前にノアンに行かれまいと危んでをります。が當日になれば、私は死んでゐないかぎりは、お宅へ上りませう。それは拇指の短かいことが原因です。それほ意志が弱い證據です。御手を接吻して、

貴女の熱誠な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

六、

モーゼン・アルガン、ブウジイブル、

一八七三年九月三日、水曜日。

親愛なるマダム・サンド、——貴女が私の本をお好みなされることを、どんなに私は悦んでゐるか、申上げる必要はありません、どうしてとありませう？ 將來名高くなるのが、私の最大の要求です。今はそれが私に言ひ知らぬ愉快を感じさせます。

若し、仰被るとほり、貴女が私共の來るのをそんなに屢々期待していらつしやるならば、私は保證致します、此家の誰でも、ノアンへの旅行ばかりを思つてゐない者はありませんと。マダム・ヴィアルドオは一昨日手紙を貴女へ差上げて、只私共が御地へ着く日が、御返事できま

シオルジュ・サンド宛の書簡

ることを待つておいでよ。それは多分十五日でせう。私はムッシュ・ヴィアルドオは行くまいと存じます。けれどもポール君（子息）はきつと上ります。彼がそれまでに勉強しますなら、彼等は彼を同伴しようと約束致しました。ですから彼は怠けないやうに注意してをります！

私自らは三四日遅れて十八日頃でなければ上れますまい、何せかなればフロオベルが私をクロワツセーで待ち受けてゐますから。それはモウ永い間の約束です。私は彼と一緒につれて来るようにしてみませう、けれども出来やうとは存じません。彼は劇と、文筆に没頭して、それから離れようとしません。

カル、スバードの水は最大の效能を與へました。私の痛風症は現在は癒えてをります。もう一度来て、私の幸福を害しないやうにと祈つてをります。噫！どんなに楽しい日を我々はノアんで過すこととせう！

一先づ御手を接吻して、恒に

貴女の忠誠な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸、——御家内御一同様へよろしく。

## 七、

リュ・ド・ヅウエイ、

一八七四年四月十五日、水曜日。

親愛なるマダム・サンド、——貴女の御手紙を受取るや否や、私はムッシュ・ロリナと知己になり度い由を申込んで欲しいと我々の友人ブランシユに手紙を送りました。私は彼が望むまゝに何事でも悦んで致します。私は彼の翻譯を一通り讀みました。それは非常に好いものです。ブランシユは恐らく明晩彼をつれて参りませう。（マダム・ヴィアルドオは本朝日夕方在宅でした、彼等は音楽をやります。）

私の『<sup>(二)</sup>生きた遺物』に對する御賞讃を私は何といつていゝでせう？

それは感謝をさへも言ひ出せぬほど素晴らしいものです。けれどもそれは私を幸福ならしめたことは確です。が此事を言つてをるうちに、私は申上げて置かねばならんことがあります。それは私が此小話を貴女に献する積りなりました。けれどもヴィアルドオに此事を相談しますと私がそれを以て飾りと思ふところの大きな名にそぐはぬ事のヨリ少ない、又ヨリつまらなくない物を書くまでは、見合したがよからうと申しました。私は最初の考へを行ひ得な



つたことを遺憾に存じます。何せかなれば何れの他の物も矢張同様であると誰か知りませう？  
兎に角、貴女は此企てについて私をお信じ下さい。

ブランシユは、貴女がバリへおいでなさる機会があると申しました。けれども私は三週間内に露國へ出發しようとしてをりますので、ノアンでお目にかゝれるのは、どうやら次の秋ではなからうかと存じます。よろしい、私は辛棒致しませう。

皆様へ何卒よろしへ。御手を接吻して。

貴女の忠誠な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸、——私は牡蠣の小樽を一個御送り致します。

註、(一)獵人日記の最後の一篇。

八、

リュ・ド・ヅウエイ、五十、

一八七五年四月九日、土曜日。

私は大層悦んでゐますよ、親愛な、親切なマダム・サンド、貴女のお孫さん達が私の差上げ

た玩具を御悦びなさるし、貴女は又私の小説をお悦びなさると聞いて、私は心から感謝致します。貴女の御筆蹟を見たのでも、私は安心致しました。貴女の御健康について、不安な噂を巴里で流布しましたから、『象がゐないとしても、兎に角蠅はゐる』と、露國の諺に申します。私はその蠅さへも今頃は飛び去つたらうと存じます。

當方では皆無事です、よろしく傳へてくれと申します。私自身は、カル、スバードへ立つ前ノアンに是非行かねばなりませんから四月十五日と二十日の間では御都合は如何ですか承はり度いものです。よろしくお書き下さるか、さもなければ五月一日前で、何れかの日を御定め下さい。

貴女は我々の善きロリナ——ビユーローと仕事をした——にお會ひになつたでせう。彼及び我々の忠誠なブランシユ、御家族御一同へよろしく御芳聲を御傳へ下さい。フロオベルは恐ろしく勉強してをります。彼の顔はその爲めに眞赤です。彼は貴女を切愛します、私も亦貴女を切愛します。御手を接吻して、恒に

貴女の忠實なる、

イヴァン・ツウルゲーニエフ。

註・(1)カーネローは當時 La Revue des deux Mondes の記者だった。

## 九、

パリ附近ブウジイブル、

一八七五年、八月十三日、金曜日。

親愛なるマダム・サンド、——貴女は私をそんなに非難、……いや寧ろ私が貴女のこと自分是非難します、私が敢て辯解を試みようとしないう程。私は、昔の露西亞人がしたやうに、御膝下に跪いて、『此處に私の首がムいます、サアお切りなさい。』と申します、けれども今度は私を御許し下さると存じますから、私は立ち上り、此處に、私は老若凡ての友人達と共に過ぐる二週間貴女をお待ちしてゐたことを申し上げます。

此方では皆丈夫です、けれども我々の友人のうちの一人もをります。その者は現在ではひどく慘酷な目になつてゐます、その人の手紙を封入してお送り致します——それはフロオベルです。私はもつと早く手紙を上げなかつたことで、なほ更私を責めます、何ぞかなれば、彼はその手紙で、恒に貴女を思ふと、書いてゐるからです……貴女から一寸の御手紙で彼の氣分がす

つかりよくなりませう。私が此手紙を十日前に受取つたとき、私は自分の怠慢と利己心とを實際烈しく怒つたのです。

勿論私は、フロオベルの言ふ事總てに於て、神経質で、感じ易い自由安易な生活に弱くなつた人間の、心ならぬ誇張のあることを知つてはをりますが、けれどもそれは彼にとつては打撃で、又恐らく彼自らが現在感じてゐる以上の大打撃であらうと思ひます。彼は精力のない粘着力をもつてゐます、丁度彼が虚榮のない自我をもつと同様です。不幸は彼の魂の中にバターのやうに浸み込みます。私は二度、私をクロワツサーに訪問してくれと求めましたが、彼は拒みました。

ほんの近頃私が彼から、その受けた致命的打撃を語つた手紙を受けました。

此方の者は皆ノアンの寫真と Marionettes (傀儡) やバランダールの寫真を見て嬉しがつてゐます。又私は矢張り……

けれども我々はその事については最早申しますまい、いつかお會ひ申す佳い時のことに致しませう。

何卒皆様へよろしく。御手を接吻して。

シオルジュ・サンド宛の書簡

貴女の忠誠な、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸、——どうぞフロオベルの手紙は御返し下さい。

十、

パリ・リュ・ド・ヅウエイ、

一八七六年四月四日、火曜日。

親愛なるマダム・サンド、……昨日貴女の御本を受取りました。その中に私が未だ知らないものを澤山見付けました。大變有難う御禮を申し上げます。私共は今或る物を講演することになりました、それは三四晩続きます、私共は今晚それを始めました。

タン新聞にのつた私の短篇小説が御氣に召したのは嬉しいことです、それは殆ど童話です。私は今小説の大きな奴を生みかけてゐます、けれどもそれは年の暮時分でなければ出ません。私はそれまでは他のことを多く考へることはできません。

此方では皆達者です、皆から宜敷。御手を接吻致します。

貴女の、イヴァン・ツウルゲーニエフ。

註・(一)Ja Montre (時計) (二)處女地。

セント・ブウヴ、テオフィル・ゴーチエ、  
シャル・エドモン、テーヌ及びルナン  
に宛てた書簡

セント・ブウヴ宛の手紙はセント・ブウヴが死ぬ少し前に書かれたもので、唯一のものらしい。

テオフィル・ゴーチエ宛のも唯一であることはその文面によつて推しられる。ツウルゲーニエフは當時恰も露國へ出發の間際で、ゴーチエに次の年にはなほ多く會見しようと言つた、けれどもテオフィル・ゴーチエは其『次の年』にはもう此世にゐなかつた。

此二文豪ツウルゲーニエフとの關係は間歇的で、ツウルゲーニエフが長い不在の間は必然彼の方で音信を斷つてゐた。

シャル・エドモン宛の書簡は一八七二年から一八八〇年に亘る。此處に掲げたのはその一小部分である。二人は一八四三年、伯林に於て哲學者シエーリングの講演で始めて知

セント・ブウヴ、テオフィル・ゴーチエ、シャル  
ル・エドモン、テーヌ及びルナンへ宛てた書簡

り合ひ、ツウルゲーニエフがバリに定住してから一層親しくなつた。此處には三通を掲げる。

次にテーヌ宛の書簡四通、ルナン宛の三通は是等著名な文學者の家族から編者へから送つて來たものである。

バリ、オーテル・バイロン、リュ・ラフィット、

一八六八年十一月二十四日、木曜日。

親愛な君、——私が只今バーデンから受取つた若干の手紙で今夕、私に是非ともバリをたゞせることになりました、で貴下と會食をすることが出来ないことになりました。是がどんなに遺憾であるか、御話する必要は少しもありません。斯る喪失した機會は減多に再び獲難いもので、誰もその損失を容易に諦められません。

少し以前—私は自著若干を貴下へ御送り致しましたが、私は今封入致しました二冊の本がそのうちに有りましたか記憶致しません。御覽の如く、私は今疑ひを貴下の利益に解します。私は貴下に讀んで頂きたさに、強請つてゐると思はれる危険を冒してをります。

何卒誠實な嘆賞を御受け下さい、

貴下の誠實な、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸、——私が此冬の居所はカル、スルーへ、バーデン、郵便局留置です。

註、(一)この一つは「煙」であつたらう。

バリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八七二年五月十九日、日曜日。

私の親愛なムッシュ・ゴーチエ、——私は今稍長い間露國へ旅行しようとしてゐるところです。私は友人フロオベルの宅で、楽しい晚餐をとつた後、も一度御目にかゝる機會のなかつたのが残念だと、申し度い氣が致します。私は來年はもつと運がいゝやうに祈つてをります。

さて今度は少し別なことをお話してよいでせうか？私はサロンに初めて參つて、ブランシヤルの繪(第四百九十九號、*Courisans* といふ極度に悪い名のついた)に惚れ込みました。自分で買つたものながら、それはサロン中で最も美しい人の姿であるやうに、私には思はれます。けれども此意見は私一人のものらしいのです。誰もさう申しません。婦人連はそれを醜いな

セント・ブウヅ、テオフィル・ゴーチエ、シヤル  
、エドモン、テーヌ及びルナンへ宛てた書簡

どと申します。私は斯く言はれて聊か閉口だと告白致します。私はそれを取り除いて下さいと御頼みして是を書くのではありません。只それに關する御意見を伺ひ度いのです。私は貴下が文學に於けると同様、批評に秀でておいでなされることを知つてをります。

若し御返事がなければ、私は御考へを推察致します。私はうとまれた自分の書が大變好きです。そしてどんなことがあつても、それが好きになつてゆきます。けれども貴下の御賞讃は私にとつて大きな獎勵となりませう。

斯麼ことで貴下に御迷惑をかけるのは相済みません、けれども貴下が此手紙を抛棄り、私の求めを何の躊躇もなく、御心から忘れ去つておしまひなされるとも、少しも差支えはないことはお分りのことゝ存じます。若しさうなさつても、貴下に對する暖い尊敬は何の變りもありません。

貴下の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## シャル、・エドモン宛

一、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ四八、

一八七二年十一月二十二日、金曜日。

我が親愛な君、——私は直に *in medias res* (物の中心に) 没入しようとしてゐます、そして此上の議論なしに、貴下はスバル・バシヤを御存じでせうか、又彼が埃及へつれて歸る家政婦を捜してゐるのは本當か、御尋ね致します。若しさうであるなら、私は國の婦人で、年若くよく教育があつて、淑やかで、完全に三ヶ國語を話す者を推薦し度いと思ひます。

私は自分で出向いて、御目にかゝる積りでしたが、ひどい痛風が起きて、幾月も直らず、自分の部屋に閉ぢ籠つてゐるものですからそれが出来ません。

若し貴下が、私の申す人物について、なほ御知りになりたければ、私までお知らせ下さい。私は全然御用命のまゝに致します。

シャル、・エドモン宛

御健康を祈ります。最も堪え難い、忍び得られぬ、あらゆる病氣のうちで、最も興味の少ない痛風にお罹りにならないやうに希望致します。

貴下の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

二、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八七二年十一月三十日、日曜日。

親愛なムッシュ・シャル、エドモン、——私のものを出版し度いヘッチェルが、あのル・タン紙に出ました短篇を私に求めて参りました。私はそれを貰ひませんでした。私はエブラアルにそれを送つて下さいと言つてやりました。けれども彼は他に今やつてゐる仕事があるので、何にも送つて参りませんでした。どうぞ私に御助勢下さいますまいか？若し必要ならば、私は三つの話を謄寫してもいいのです、けれどもそれにしても矢張り印刷した分は入用なんです。(それは此年の始めに掲載されました。)

貴下に御面倒をかけることを切に御詫を申します、けれども御助力下さらば、御恩の程感謝

します。

貴下の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

三、

リュ・ド・ヅウエイ、

一八八〇年一月十五日、木曜日。

ムッシュ・エブラアルから返事を得ることが困難な爲めに、貴下へ手紙を書きます。

問題は是です。貴君は多分露國の一小説(私の記憶が正しければ *Souvenirs de la Ninamia* ニナーニヤの回想)を御記憶でせう。それは私の手から、約三ヶ月以前に、ル・タンの記者へ送られたものでした。作者の婦人は、それが受け入れられたか、受け入れられぬか知り度がつてをります。

私は五六日以後に、やゝしばらく露西亞へ参ります。若しル・タンでそれが要らないならばそれを貴下が作者の婦人へ送り戻さしてはいたゞけませんでせうか？若し又ル・タン新聞がそれを受けますならば、婦人にその證據をもたして下さいませんか？彼女も私も御恩の程を忘れま

シャル、エドモン宛

ツウルニゲーニエフ編

すまい。此處に婦人の住所があります——

Madame Adeleide Loukanine,

Rue Plénard, a li brairie Swedenborgienne,

イヴァン・ツウルゲーニエフ

## イボリト・テーヌ宛

一、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、五〇、

木曜日、朝。

親愛なるムッシュ・テーヌ、——私は貴下の御親切に訴え、さうすることを先づ御詫び致します。私の思つてゐる事は是です。我々は只今々晩の席（レ・ミゼラブルの爲めに）をとつて貰つたところです。私は現在此家に於て、夕方外出する唯一の男ですから、其處に婦人達を伴ふのは私の務です。どうか、我々の會見を何れか他の日に延引して下さいすまいか？日時のところは絶対に貴君の御擇びに任せます。

若し是がホンノ些少でも貴下に御不便なら、私は切に御詫びを致します。

A bientôt——何卒よろしく。

貴下の誠實なる、イヴァン・ツウルゲーニエフ。

イボリト・テーヌ宛

二、

リュ・ド・ヅウエイ、パリ、

一八七八年三月二十二日、金曜日。

親愛なるムッシュ・テーヌ、——私は只受取つた *La Revolution* (革命) の御禮から先づ申します。私は直に此本を読み始めました。

御手紙の(それは御希望により破棄しました)他の要件については、私を考へさせました! 全然御同意ではありませんが、結局貴下は全く正しく、貴下は私のうちに眠る或る想念を表現なすつたゞけてす、私共がFに對する友誼そのものがそれと共に或るべき義務を負担致します。その義務は恐らく苦痛なものでせう。

私は決心する前に、充分貴下とお話がし度いのです。水曜日から後、何日何時に貴下をお訪ね申していゝかお知らせ下さい。私は全然貴命のまゝに致します、多分私共は或る協定に到着致すでせう。

御返事を待ちます。

貴下の甚だ誠實な、イヴァン・ツウルゲーニエフ

註、Fは Flaubert.

マダム・テーヌは、此手紙は、二人の親友たるフロオベルに、テーヌとツウルゲーニエフが彼の小説 *Bonvard et Penchat* を止めさせるに、どんな方法を取るべきかを相談したことに關するものだと言つてゐる。テーヌもツウルゲーニエフも『マダム・ホブリ』を以て十九世紀の最大傑作と見てゐた、そしてフロオベルがその新本に對する困難を感じてゐるので、彼等はそれはフロオベルの以前の著書よりも非常に劣りはしないかと恐れてゐた。

三、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ五〇、

三月九日、金曜日。

私の親愛なムッシュ・テーヌ、——ひどい齒痛と、神經痛を頭にやんで、私は殆ど狂人になつて、人に見られないやうな、恐ろしい、腫れた顔になりました。私は明日までに腫れがひくだらうかを疑ひます、又私は貴下にお知らせしなければならぬと思ひます。若し私が明日時

イボリト・テーヌ宛



間どほりに貴下のところへ上りませんでしたならば、それは只私が顔を人前へ出されないからです。私はどれほど遺憾であるか言ふまでもありません。

私は敢て *demain* (明日) とは申しませう、けれども私は最上なことを致します。

貴下の誠實な、イヴァン・ツウルゲーニエフ

四、

リュ・ド・ヅウエイ、

一月二十日、木曜日。

私の親愛なテーマ、——(ムッシュと敬語を止していいでせう?)——私は痛風にやられて餘儀ない怠惰をうんと利用して、君の本を読みました。私の最も誠實な祝賀を受けて下さい。それは傑作です。それを攻撃した人でさへ、悦んでそれを利用せう。君は、生きて、有用なもの——それはいつも相並んでは行かぬものを造りました。

若し私が水曜日に出掛けられるならば、一寸と寄つて、御話します。

貴下の誠實なる、イヴァン・ツウルゲーニエフ

エルネスト・ルナン宛

一、

レ・フレーヌ・シャール、ブウジイブル、

一八七九年十一月十八日。

親愛なるムッシュ・ルナン、——私は久しい以前に此封入の紙を受取りました、けれども貴下がいつも旅行中だったので、私は貴下の歸來を待つがいと思ひました。疑問は露國の前文部大臣、貴下の最大なる稱讃者の一人によつて提出せられました。どうぞ端の方に單に姓名だけを——若し御差支えがなければ——書いて、リュ・ド・ヅウエイ五十番地に此紙を送り戻して下さいませんか? 私の通信者は大に貴下に感謝致します、私も同様です。

私は未だ田舎に居て、貴下の最後の巻を讀了するところです。貴下は美妙で、困難な問題を私の心に明白にして下さいました。私は貴下の、若しさういふことが許されるなら、教會の漸進的組織の心理的解剖の鋭利さと眞實さとの、何れを最も賞讃すべきかを知りません。

エルネスト・ルナン宛

どうぞ私の尊敬にみちた賞讃をお受け下さい。

貴下の誠實なる、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸、——紙封の中に、貴下は或る謎を御覧になりませう。それを私は——たとへば、第一の抜粋についてはヴィクトル・ユーゴーの如き——正しいと信じてますが、我々は正確なことが望ましいのです。

二、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ五十、

一八八二年三月二十四日。

我が親愛な先生、——貴下は御親切にアカデミーの入場券を私に送つて下さいました。が相憎、未だに悪い、恐ろしい頭痛のせいで、私はそれを用ゐることが出来ませんでした。けれどもそんなに私のことを思つて下さることを、有難く感謝致します。

貴下の誠實なる、イヴァン・ツウルゲーニエフ

三、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

(日附なし。)

親愛なるムッシュ・ルナン、——此手紙をムッシュ・エ・ボワイエランに托して御届けします。此方は非常に高名な米國の著者で、各國の大學で研究し、該問題について特別の著述をなさる爲め、渡歐されたのです。貴下の如き人と昵懇になり度いといふ此人の極めて自然な願ひを措いて、私は彼に、その必要とする報道を得べき最もよい方法に關して、何か有益な忠言を貴下から頂くことが出来るだらうと、大膽にも言つて置きました。此事は伊太利や獨逸でよりも此處に於て彼が一層困難を感じるものです。私は貴下がいつもの御親切で、彼にお接見くださらんことを希望致します。

貴下の最も誠實なる、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## エミール・ゾラ宛書簡

ゾラの覺書によれば、それは一八七二年の始め頃、彼は、當時その窓のバルグ・モルソオを見下ろす、ムリヂョ街四の階下に住つてゐたフロオベルのところで、始めてツウルゲーニエフに會つた。アルフォンヌ・ドオデエがツウルゲーニエフと知己となつたのも、矢張り同じ時、同で場所であつた。尤も一八八〇年中にセンチユリイ雜誌に現はれた、ツウルゲーニエフに關する彼の論文に於て、ゾラは此會見を一八六八年又は一八七〇年あたりにあつたものとしてゐる。ゾラとドオデエは戦争前にツウルゲーニエフを知り得なかつたことは明かである——早かつたところで一八七二年より前の事實ではない。マニイ午餐會の定連であつたゴンクウルは、一八六三年二月二十三日に始めてツウルゲーニエフの事を述べてゐるが、是は最初、又偶然にエドモン・ド・ゴンクウルと會つたのに過ぎない。その後のゴンクウル雜誌は一八七二年に只一度ツウルゲーニエフの名を書いてゐる、それはテオフィル・ゴオチエと一緒にフロオベルの御客の一人としてに過ぎない。他の方から我

々は、ツウルゲーニエフは一八七〇年にパリを去つてから、一八七一年の末に歸つて來たことを知る。だからゾラとゴンクウルとは、彼が歸つてから、フロオベルのところで會へた。

けれどもしつかりと交際したのは一八七四年、所謂 *Diners des Cinq* (五人會) で彼等が始めて會つてからのことである。ゴンクウルは此會合の始め頃の日附を一八七四年四月十四日といふ。それから事實、彼等は初めはカフェ・リシユで、後に、一八三八年、ツウルゲーニエフの死に至るまではオペラ・コミックの向ふ、リュ・フワバルの料理店で開いたのである。一八八〇年、フロオベル死去の年には残つたものはそのうち只四人であつたことは事實である。ドオデエが『センチユリイ雜誌』に彼の論文を書いたときには、最早三人にさへなつてゐた。ツウルゲーニエフはその時既に冷酷な病氣に取り憑かれて、その以後寸時の恢復もなく、二年後には此世を去つたのであつた。ドオデエは次の文句で、その文を結んでゐる——

『あゝフロオベル午餐會！我々は過日再びその會を開いた、するとそこには、我々のうち只三人だけが残つた。今ゴンクウルの死後、只二人きりとなつた。』

ツウルゲーニエフは生きてゐる間は、フロオベル會の他のお客方と最も親愛な交際を結んだ。我々は既に彼をフロオベルに結びつけた兄弟的の友誼を指摘したが、彼はゾラにもその會見の當初から同様誠實な友人となつた。ゾラは當時、今日の如く、未だ高名ではなかつた。彼は又初期の苦闘をつゞけてゐた。彼は丁度ルゴン・マツカル叢書の第一巻として *La Fortune* を公けにした。それは當時の文學に一新時期を劃したものであつた。彼はツウルゲーニエフに於て、飽かぬ彼が著作の賞讃者、宣傳者を發見した。ゾラが佛蘭西に於けるよりも早く露西亞で有名になつたのは、ツウルゲーニエフの御蔭である。

ファイガロ紙に出たムッシュ・ジュール・ユレ氏との會見談中に、ゾラは自分の文壇經歷の最も危険な時、露國に彼を紹介してくれたのはツウルゲーニエフであつたと書、いてゐる。*「Le Corsaire (金貨を)」*と、彼は書いた。*「丁度私は書いてゐたのが、プロリイ公の爲めに禁止せられた。それは「危機の後」と、題した私の一文が禍を爲したのだ。どの新聞も私の爲めにその欄を開かうとはしなかつた。私は飢ゑてゐた。汚泥は八方から私の上に投げかけられた。そのとき私が爾來持て囃される彼の大きな露國の社會に私を紹介してくれたのはツウルゲーニエフであつた。」*我々は *La Fante de l'Abbe Mouret* (ムウレ牧師の過

ち)は先づ露西亞で發刊せられ、次に佛國で出たものであることを附記して置かう。

ツウルゲーニエフはその他の現實派に屬する友人、ゴンクウル・ドオデエ、モウバツサン等の本を推稱し、自ら彼等を露國の新聞雜誌に取入れることによつて、彼等の才能と思はれたものを示した。

ゾラが上に引照した訪問者に斯麼ことを言つた。*「私はツウルゲーニエフが大好きです。彼も亦僕が好きです。彼は潔白、正直で、珍らしい人です、けれどもむら氣がないではありません。」*

ゴンクウルはその雜誌で、ドオデエはその文で、各々ツウルゲーニエフに同情を以て語つてゐる。前者は彼を「おとなしい巨人、親切な蠻人」と稱び、後者はその友情の誠實を回想した。*「彼は今世紀中最も顯著なる著者であつた、同時に最も正直で、卒直で、一般に誠實、慈愛、稀に見る人であつた。」*と、ツウルゲーニエフの死後、モウバツサンによつて書かれた文の始まりは斯うであつた。モウバツサンは更に續けて言ふ「彼は素朴そのもので有り餘る程親切で、正直で、世の中の誰よりも人の好い、死者と生者とに拘らず友人に對して忠實に、慈愛にとめること稀有な人であつた。」次に彼は斯う結んでゐる「ヨリ以上正直

で、教養せられた、聰明な精神、ヨリ以上に愛すべき才能、ヨリ以上忠實、寛大な心は世に會つてあつたことがない。』

けれどもツウルゲーニエフの死後數年、所謂『黙示録』が發表せられて、彼の記憶に醜い影を投じた。今まではドオデエがツウルゲーニエフに捧げた友情の頁から引例したが今度は此文が本の形となつて發表せられんとしたとき、彼が附加した後書を引倒すべきときとなつた。曰く――

『丁度私が數年以前に發表になつた此文を校正してゐたとき、誰やらが私に、ツウルゲーニエフがその墓の底から結構な攻撃を私に加へてゐる「回想録」の一卷を呉れた。著者としての私は、輕蔑にも憤しない、人間としての私は人間中の屑だといふのである。又私の友人等も此事をよく知つてゐて、私のことをエライ美しくお話をしたさうだ！ツウルゲーニエフは一體何の友人の事をいつてゐるのか？彼等がそれ程私をよく知つてゐて、どうして私の友人として残つたのか？又誰が彼を――立派なスラヴ人たる彼を、私に對して友誼を見せかけさせたのか？私は今もなほ舊の如き彼を見る――私の家に来て、私の卓子に

就いた、おとなしく、やさしく、私の子供をあやしてゐる彼を。私は叮嚀、懇切な手紙を彼から貰つた。是が始終彼の愉快な微笑の下に隠れてゐたことだつたのだ！噫！人生は何たる不思議なものぞ！又彼の美しい希臘語 *Ethouia* は何たる眞實であらう！』

此後にあげた本はその出版當時（一八八八年）長々しい評論や、激烈な議論を惹き起した『昔に露佛兩國の新聞に於てのみならず、又ツウルゲーニエフもドオデエも無数の友人や賞讃者を有する國々に於て、轟しい論争を捲き起した。露人等は *Le Katand* の著者が、露國の大著述家を諷刺せんと欲して發表した、得體の知れぬ一人物の、所謂黙示を信じたことを意外として怪しんだ。此諷刺の一層厭ふべきことは、それがツウルゲーニエフの無数の乾分の一人の仕事であつて、その目的が最早その嘘偽なることを曝露することの出来ないうちに發表せられたことである。此事實を考へただけでアルフォンス・ドオデエをして此『ツウルゲーニエフの回想』の著者の『黙示録』に對して戒心せしめ得たらうに、又永年の交誼と、その間に受けた誠實な證據も彼に何の重きを爲さなかつたとしても、彼は少くとも、英、佛、獨、露に於て親しくツウルゲーニエフを知つてゐた多くの人々の非難のない説に耳を傾けべきではなかつたらうか？何の積りで、ツウルゲーニエフはゾラや、ゴ

ンクールやモウバッサンから、我々が只今引照した忠實、卒直との褒辭を引き込ます程、僞善をしたのであらうか？

ツウルゲーニエフがそんなことをしなかつたことはいろ／＼な方面から此本の編者が調べてみて明白になつた。『ツウルゲーニエフの回想』と稱する本こそ實に下らぬ、悪い僞作である。

一、

リュ・ド・ヅウエイ、四十八、

一八七四年（の始め）金曜日夕。

我が親愛なゾラ、——君に無駄足を使はしたことは、僕ひどく残念に思ふ。僕は二時まで在宅だと君に話した積りだつたが。僕の記憶力の缺陷に對して、僕はお詫びをせねばならん。君は明日か、日曜日か、月曜日かに二時前にくるか、それとも火曜日の四時から六時迄の間にくるか、どつちにする？僕はきつと其處にゐよう。どうか僕に日時を知らし給へ。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

二、

スバスコイエ、

一八七四年七月十七日、五日、木曜日。

我が親愛なゾラ——君若し露國の地圖を開き、モスクワを出發點として、君の指を黒海の方へやり給へ。するとその途中で、君はアリオールの北方少し許りのところで、ムツェンスク市に出會ふ。それでよろしい。僕の村は此のムツェンスクから十基米のところに、その發音のやゝ難かしい名を以て位置してゐる。それは絶対に寂しく、平和と、綠色と、悲哀に満ちたところだ。若し僕がこの村にゐて仕事が出来らば、僕は暫時とゝまらう。若し又出来なければ、僕は去つて、カ、ルスバードに六週間滞在の後、パリに歸つて、きつと君と會はう。

さて今度は川事だ！

僕はサンクト・ペテルブルグで、若し國際的立法の實際の狀態が成立すれば、君の著作を翻譯、發表する者の出づるを妨ぐべき何物もないと確信した、僕が *La Conquete de Plassans* を出すところを見付け得なかつたはその爲めだ。一つの翻譯も未だ出ない、然し僕が君に話したあの雑誌の記者は、彼が魁であるかどうか確かでないとき、翻譯を命ずる危険を冒さうとはしな

つた。(僕がペテルブルグを立つ際に La Czee が Dobytka Broohennia Sobakam 即ち「犬に投けられた餌」と云ふ題で、店頭へあらはれたところだつた。)けれども該記者が、その雑誌で彼の著作の公表に重きを置くが故に、彼は僕を通じて斯ういふ申出でをした——君が送る原稿がフォリオ判一枚に印刷される毎に三十留(一〇五法)支拂ふと。彼は殆ど同額を翻譯者に支拂ふのであるから、是は善い價だと僕には見える、そして君はそれを承認すべき筈だ。一寸と次の處書で僕に返事を呉れ給へ—M. I. T., Hotel Demuth, Grand de Rue des Fausses St. Pouterstrit; 僕は遅くも三週間後に其處へ行く、そして君の返事によつて、その適當な行先に送る。

記者は君の *Conquers* を読んで、悦んでゐた。

君が書いてゐる小説は大に僕の好奇心を動かした。僕はそれが秀逸だらうと信ずる。その主題は非常に簡單なると同時に大に獨創的である。

僕は丁度今フロオベルに書いてやつた、けれども僕はその手紙が最早クロワツセーで彼の手に入るまいと危む。彼は瑞西のリギーへ安息と、清適とを求めに行く積りだつた。露國の公衆は彼の *Antoine* について何にも言はない、それは検閲官の爲め禁止さへしられた! 此異様なことを彼に語つてはならぬ。

左様なら、君の健康と、上機嫌とを祈る。

君の・イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸——政治は君に於て妙な轉向をやつたものだね。

註 (一)記者は M. Sassenlevitch (二) La Faute de l'Abbe Mouret

### 三

キヨニヒ・フォン・エングランド、カル、スバード。

一八七四年八月十一日、月曜日。

我が親愛なゾラー——誰か僕を詛ひの眼で見たのだらう! 過ぐる三ヶ月の間、僕は愈々いけなくなつた。僕は *cara patria* (愛する祖國)に殉教した後、此處カル、スバードで以前よりも一層しつかりと脚を縛られてゐる。僕はもうそれで澤山だ、それで僕が歩きまはるやうになるや否や、パリに飛んで行き、そこからブウジイブルへ行く。よし其處で患ふにしても、兎に角安心してをられる。

僕は君の利益と、僕の約束とを忘れない。僕は露國評論雑誌の記者スタッスウレヴィチ氏と

エミール・ゾラ宛の書簡

落ちもなく協議を遂げた。僕は彼が提議を表にして送れないことはないのだ——それは充分承諾すべき價がある——が、彼は九月(十四日か十五日頃)パリに出ることになつてゐるので、僕は寧ろ君等を御互に知己にして、その上で賢い、立派な心をもつ人のやうに、全事件を處理したいと思ふ。その時、君はパリにゐるだらうか? 教會近く Maison Halgan, Boulevard Seine et Oise に手紙を呉れ給へ。僕は一週間後、若し悪魔が(痛風は悪魔に外ならぬ)邪魔しないなら、其處に行く。

僕は検閲で恐ろしく損傷せられた *La Curée* を君に持つて歸る。*La Conquête de Plassans* は短縮した形で一新聞—露國新聞 *Journal de St. Peterbourg* に發表せられる。もう一つの新聞(*La Gazette de Moscou*)は、譚叢として、その全譯を掲げる。

僕は君の健康とその仕事の多からんことを祈る。君が新らしい小説の題は首を捻らせる——僕は難しいといふのだ。けれども君はそれに打ち克つて成功するだらう。君は根強い勉強家だ。おまけに痛風を病まない。よろしく、左様なら。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸——僕はフロオベルから聞いた。彼はクロワツセーにゐた、彼の小説を懸命に書いてゐる

註 (1) *La Faute de l'Abbe Mouret*.

(11) *Bouvard et Peuchet*.

四、

ブウジイブル、メーゾン・アルガン(セーヌ・エ・オワスズ)

一八七四年九月二十三日、水曜日。

我が親愛な友よ——僕はなほ痛風に悩まされながら、三週間以前に此處へ歸つて來た。(今はよくなつた)。僕はスタックスウレヴィチ(僕が君に話した雑誌記者)の到着までに、君に手紙を書くのを見合した。僕は今一通の手紙を受取つた、それによれば彼は、正に禁止せられんとする彼の雑誌を救ふ爲め、大至急ペテルブルグへ歸らねばならぬのださうな。彼は首尾よく救ひの目的を達したが、十二月まではパリへ來れないのだ。そのうちに僕が君と用件を片付けてくれるやうにと心配してゐる、そして彼はその條件を僕に送つて寄越した。だから僕等は御互

エミール・ゾラ宛の書簡



に出来るだけ早く會はなけりやならん。相憎く僕は人名簿を失くして、君の住所を憶ひ出さない仕方がないからシャルバンチエ方としてやる。明日僕はバリへ行かんけりやならん、けれども多分君はそれ迄に僕の手紙を受取つてゐまい。土曜日には——なほひどい片輪のまゝではあるけれど——僕は娘の處(シャートオダンの附近に)行き、そこに火曜日まで滞在する。

僕は此悪天候にブウジワイルに來給へといひ度くない。けれども僕の提議は斯うだ、若しシャルバンチエが明朝君に此手紙を送るならば、二時にリュ・ド・ヅウエイに來るか、それとも十一時に、晝飯を喫べるといふやうな事で、カフェ・リシユでお會ひしよう。それは決定事項とみてよいではないか？明日かそれとも水曜日。

僕は *La Curée* の翻譯一部携へて歸つた。*La Conquete de Pissans* は二度全譯、二度縮譯(フルジユが *La Revue des Deux Mondes* でいつもやつてゐたやうな)三四度梗概が紹介されてそれだけ多くの批評の問題となつた。君は露國で讀まれる唯一の著者だ。  
それには又何れ！御機嫌よう。

君の、イヴァン・ツルウゲーニエフ

註、(一)シャルバンチエは巴里の大きな出版者譯者。

## 五、

ブウジワイル、メーゾン・アルガン(教會附近)

一八七四年十月一日、木曜日。

我が親愛なゾラ——僕は一昨日シャートオ・ダンの遠征から歸つた。僕は昨日の約束を本當に守らうと思つてゐた、けれども夜、痛風九度目の攻撃を受けた。そこで夜が明けると直ぐに、シャルバンチエ方として、君に此事を知らせるやうに手紙を出した。マダム・ヴィアルドオの長女の良人、若いジイ、シャムロオは僕の代りにそれを巴里へ携へていつた、けれどもその手紙を渡した使者は、君の町に二十一番を(その番地はシャルバンチエが知らしたものだ)發見することが出来なかつたので、君は餘計な足を運んで、僕をカフェに待つことになつたのだ。僕は衷心から御詫びをする。

僕は昨日一日床に就いてゐた。僕は三四日間外出は出来まい。けれども僕は君に會つて、用事話し度い。明日(金曜日)晝飯と間食との間に、此處へ來るのが憶却でなけりや、君はサン・ラザル停車場をたつて來給へ。汽車は毎時三十分發車する。君がリュエイの停車に着いたら、アメリカ式合馬車に乗り給へ、それは君をブウジワイルに運んでくる。(ロリュエイま

でより行かぬ馬車に乗り給ふな。)そこから君は教會裏のアルガン家まで五分間歩るけばいゝ。  
僕は君に大變會ひ度い。

追伸——僕は昨日の夕方電報をかけた。

君の誠實な、イヴァン・ツウルゲーニエフ

六、

ブウジイブル、アルガン家(教會附近)

一八七四年十月三日、土曜日。

我が親愛なゾラ——僕はシャルバンチエに會ふのは確に嬉しい、けれども此處に僕の提議がある。僕は決しなつた、で月曜日にはバリにゐる。君は僕等が過ぐる木曜にしたやうにして、シャルバンチエと一緒に十一時に、カフェ・リシユに來ないか？若し新たな不都合が邪魔をするやうなれば、僕は今君の番地を知つてゐるから、電報をかける。  
我々は兎に角直ぐに會はう。御機嫌よう。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸——若し君が月曜に來られなければ。水曜日にはどうだ、若し手紙が來なければ、僕は月曜日に君を待つてゐる。

七、

サユ・ド・ツウエイ五十、

火曜日(一八七五年二月)。

我が親愛なる友人——<sup>(二)</sup>デューマに關する君の論文を送つて呉れて有難う。それは僕の彼に對する關係を一層緊張せしめるだらうが、僕はそんなことを少しも氣にかけない。僕は君が(君とフロオベルと)サルツイコフと共に午餐に來て呉れるやうにして欲しい。我々が過般の Hon. M. J. H. (譯者) 胡の入つたブランス風の肉汁)は、金曜日にも一度同じ處で、試みるも遺憾としない程、深い印象を僕に與へた。君には適するだらうか？僕に一寸と書いて寄越し給へ。僕はそのことを今日君とお話しよう。僕は日曜には行かれない。

君の親友、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸——勿論僕が奢るのだことは承知してくれ給へ。

註、(一)此文は一八七五年三月の Le Messenger de l'Europe に『新アカデミヤ派』の題下に、小ヤエー  
マが、佛國學士院に入れられたとき、發表しられたものである。  
(二)シチエードリンの假名の下に知られた有名な露國の諷刺家。

八、

リュ・ド・ヅウエイ五十、

一八七五年二月二十五日、木曜日。

我が親愛な友よ——君の小包は僕が受取つた當日、即ち月曜日に發送せられた。それは適當  
な時に先方へ着くものと、僕は信ずる。我々は返事を待たう。

僕は文學的、音樂的のマテネーを(露國の慈善事業の爲め)催すことになつた。僕は目のま  
はる程それで忙しい。

僕は間違なく日曜日にフロオベルのところへ行く。君もいかないか。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

九、

パリ・リュ・ド・ヅウエイ、

土曜日(一八七五年二月二十七日)

我が親愛な友人——よろしい、では——月曜日に。君の本は有難う、僕はそれを既に讀み始  
めた。僕はタン紙に出た僕の小さなものを君に送る。御機嫌よろしく、左様なら。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

註、(一)フロオベル、ドオデエ、ゴンクウルミ會食の約束

(二) La Faute de l'abbé Mouret. 『Hライ騒ぎを起した小説』といはれしもの。

十、

リュ・ド・ヅウエイ、

木曜日、五月十三日(一八七五年)

我が親愛なゾラ——どうぞ今日(五月十三日)君がスタツスウレヅイチに(八日、二十日)  
に、彼に宛て、小話を送つたと書いてやつて呉れ給へ。彼は、今後君が毎月(十三日、一日)

エミール・ゾラ宛の書簡

にいつも手紙を書いて、小説を送るか、送らぬかを知らして呉れ給へと願つてゐる。僕は明後日の朝、君に金をもつて會ひに行く。明日は僕は餘りに忙しい。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 十一、

リュ・ド・ヅウエイ、

一八七五年五月二十五日(十三日)

我が親愛なゾラ——若し君が僕の肖像畫を見ようと思ふなら、木曜日十二時、リエ・フォンテーヌ四十二番ハルラモフの宅へ來給へ。僕も其處へ行つてゐる。それは僕がモデルに坐る最後の日だ。繪は殆ど出來上つてゐる。それが、僕の金曜日、カル、スバードにたつ前に君と、も一度會へる一箇の機會となるだらう。左様なら、随分御機嫌よろしく。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 十二、

ブウジ、ブル、レ・フレース、

一八七五年九月二十六日。

我が親愛な友人——八月附の君の手紙は只二十日に僕に到着した。郵便が近頃そんな惡戯を僕にする。僕は此手紙が君のサン・オーバンにゐるうちに届くようにと書く。僕は海の空氣が君の妻君に最大の功を奉じたと信ずる。僕は、君が仕事をして用事を終ると聞いて、悦んでゐる。鋤を曳かせる人はまだゐるのだね！

あはれなフロオベルは可愛さうな心持である。君のいふ如く、彼の友人等は此冬彼のまはりに集まらなけりやならん、但し彼がパリに來たらばである、それはまだどうか、明瞭はつきりしないのだからね。

僕は、彼の生活の爲めに働くに最も少く適した他の總ての人々のうちに、此人に斯る打撃を與へるとは憎むべき運命だ。

僕が數度彼が短かいバリ滯在中に會つたスタツスウレヴィチは、君と知己となり得なかつたことを非常に残念がつてゐた。彼はシャルバンチエと新刊のことを取り極めた。ときに君は、  
Le Messenger de l'Europe の小説に君の名を明かに書かいてもいゝかね？スタツスウレヴィチは此

事を君に訊くように僕に依頼していつた。最後のもの(ゴンクウル兄弟に関するものは)すぐれてゐるが、それは兄弟の小説の翻譯をさせることにするだらう。スタッスウレヴィチは、既に Renee Manperin を手に入れた。

何ぢや! あはれなゴンクウルも又金に困つてゐる? 何と馬鹿氣た又不公平なことだ! 僕は此處にも一ヶ月、或は六週間滞在する、然し屢々バリへ行くから、君とお目にかゝることを望む。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

註、(一)多分一八七六年一、二、三、四月號の *Messenger de l'Europe* に譯載しられた *Son Excellence Eugene Rougon* のことだ。

### 十三、

リエ・ド・ヅウエイ、

月曜日(一八七五年十二月一日)

親友——僕は只今スタッスウレヴィチから一通の手紙を受け取つた。彼は、君に、今回限り君が毎月の原稿を十二月の五日(十七日)より遅からぬうちに送るやうにと願ふのだ。則ち十

二月の二十三日(露曆)から四日以内にといふのだ。ペテルブルグの印刷屋は皆へゞれけに酔拂つてゐる(クリスマスだから)だから彼奴等當にならないのだ。

彼は又同時に君の小説(二)の原稿全部を受取つたと語つた。又四百法の第二回の支拂ひをシャルパンチエに送つたし、第三回と最後の分とを一月の始めに送ると語つた。では日曜まで、先づ君の健康と幸運を祈る。

君の、イヴ・ツウルゲーニエフ

註、(一) *Son Excellence Eugene Rougon*。

### 十四、

バリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八七六年一月二十四日、月曜日。

親愛なゾラ——僕は只今スタッスウレヴィチから手紙を受取つたが、それは君が結婚問題に関する論文に關して、熱烈な一篇完全の詩である。それは露國で *Succes fou*(狂的成功)をなしてゐる。僕は君の注意をそんな方面に向けて、いゝ事をした。

エミール・ゾラ宛の書簡

僕は此二週間痛風にやられてゐた。だから今夜我々の會食に出られないのだ。それは又僕が Les Danicheff<sup>(1)</sup> を見に行くのを妨げる。少しでもよくなり次第に、僕は自分の脚を充分に伸ばせるように一柵を買切つて見よふ、君も一緒に行かないか？

御機嫌はどうだ？いゝことと思ふ。仕事の成功と、健康を祈る。

君の、イヴァン、ツウルゲーニエフ

註、(1)「佛蘭西に於ける結婚」は一八七六年一月號の Le Messager de l'Europe にかゝげられた。

(1) Les Danicheff は一八七六年一月八日にオテオン座で始めて上演。

十五、

リュ・ド・ヅウエイ五〇、

土曜日、午（一八七六年二月）

親友——まるで運命がわざと迷はやすうにと、そんなことをしたやうに見える。僕は昨日始めて外出した。それは勿論君が訪問に擇んだ當日であつたのだ、然し君と明日フロオベルの宅で會へると信ずる。我々は Les Danicheff や、そんなやうな作物のことを話さう。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

十六、

リュ・ド・ヅウエイ五〇、

一八七六年三月或は四月、水曜日。

親友——今日明日のうち君の手紙を、ペテルブウルグ・ガゼットの持主バイマコフなる人から受取るだらう。（もう受取つたかも知れんが。）それは君にその雑誌に小説を書いてくれといふ依頼である。何の約束も又返事もしてはいけないよ、僕がそのことを君と相談するまでは。君は明日二時前に一寸と寄らないか？それと同時に君は明日展覽會へ出される僕の繪を見られるよ。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

註、(1)僕の繪とは露國の大畫家ハルラモフの描いたツウルゲーニエフの肖像である。

十七、

エミール・ゾラ宛の書簡

リュ・ド・ヅウエイ、

一八七六年四月七日、金曜日。

親友——僕は電報が来るだらうと思つて、今まで君に返事を出すのを控えてゐた。僕等が *L'Assommoir* について餘儀なく結んだ條件が忘れられないものだから。

*Messager de l'Europe* に君が毎月書簡を送る代りに、話の梗概を前に附して、小説の抜粋を送るといふ君の考へには至極賛成だ。此抜粋が小説の始めから取られず、それ故に新奇な人目を惹くところがあれば特によろしい。スタッフスウレヴィチも君の考へに賛成するにちがひない。又彼に前以てそれを話して置く必要は少しもないと思ふ。だから君は明日からその仕事に取りかゝるがいゝと思ふ、何ぜかとなれば、我々は此翻譯を有利にするといふ一切の考へを抛棄しなければならんことは明白なのだから。

然し何事かゞ起れば、電報で直ぐ御知らせする。兎に角、月曜日までは左様なら。

追伸——ゴンクウルの話では、フロオベルは帶狀疱疹に罹つたさうだ、それは危険ではないけれど、恐ろしく煩はしいものだ

十八、

ホテル・デムウト、ホテルブウルグ、

一八七六年（五月二十七日）木曜日。

我が親友——僕は此處に三日居る。君に返事を出すことの出来るのは今日が始めてだ、相憎くとそれは不満足なものであつた。二十四時間熟考の末、スヴォリン（ノヴォエ・ヴレーミヤ主筆）は、君が此間 *Messager de l'Europe* にかゝけた過般の論文中にある梗概の爲めに、新奇さを失つたので *L'Assommoir* を出すことも出来なければ、どんな價をも差上げることが出来ないと言つて寄越した。是が彼の本當の理由であらうか、それとも他に譯があるだらうか？僕は知らない、けれども此善い紳士は何物をも君に捧げないことは事實として残つてゐる。

僕は *Le Dielo* について誤解してゐた。此新聞、寧ろ雑誌（何ぜなれば只月一回出るのだから）は小説の梗概ばかりより出しはしない、そして只今はその方面で何も爲し得られない程な、危つかしいものである。

そこで此處に我々は頭を叩かれた *L'Assommoir* をもつてゐるわけだ？僕がどんなに残念がつてゐるか推察がくだらう！

スタッスウレヴィチの方は、彼は未だ君の小話を充分気に入つてゐる。彼はそれに重きを置いてゐる。我々は値上げをしてもいゝと想ふけれども。僕がバーデンで會つたサルツイコフは明後日でなければ此處へ來ないからそれまで手の付けようがない。(二)Sがその主筆に話しをつけ次第、君にも手紙を僕から上げる。

總てこんなことは愉快ではないが、とうぞそのことについて僕を怒らせないやうに。僕がサルツイコフと話をしたときには、ペテルブルグを去る前に君へ手紙を出す。

僕は全く健康だ。獨乙醫者が君をよく直したらう。フロオベルや他の諸君へよろしく。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

註、(一)サルツイコフ、(二)オテチエストヴエンニクの出版者。

## 十九、

モスクワ

一八七六年六月(十五日)木曜日。

我が親友——僕は昨日此處へ來た。明日國へ立つ。(若し君が手紙を寄越すなら僕の住所は是

だ。「略す」。サルツイコフは僕の立つ前の日、バーデンからペテルブルグに着いた。僕は二度會つて話した。彼は、年四回——印刷したフォリオ判一枚に一〇〇ルウブリ(三三〇フラン)の原稿料で小話を君が彼に送るやうにと、言つてあけるところだつた。君は毎回容易に二フォリオ半を書くことが出来るから、是は君に一小話八百フラン、一ヶ年三千二百フランを獲させることになる。僕はきつと君に忠告する、此スタッスウレヴィチを道さぬやうにし給へ、別言すればなほ一ヶ年に十二篇を彼に送り給へ。僕は之でもつて大した面倒も見ないで、やつていけると僕は思ふ。又スタッスウレヴィチは善い人で、君はあの人にくつゝいていかなければならん、別してあはれな Assommoir が露國でこはれた後にはさうである。

サルツイコフは僕に告げる、彼は君が書くべき主題を君に知らせることゝ、君が十月に始めるならば、大に有難いといふことを手紙に書いて君にやるところだつたと。

是はどうするか僕に知らして呉れ給へ。

マダム・サンドの死は僕にとつて大きな悲みであつた。きつとフロオベルも悲しんだに違ひない。僕は彼に手紙を出さうと思ふ。

君は美事な手紙を彼女について書いた。御機嫌よろしく。



君の最も誠實な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

註、(一)ゾラはジュールジュ・サンドとその著作に関する一論文を一八七六年の *Le Messager de l'Europe* の七月號に書いた。

二十、

スバツスコイエ、アリョル州、

一八七六年(七月三日)月曜日。

我が親友——僕は只今君の手紙を自分の巢窟で受取つた、そしてそれに直ぐ返事を書く。僕は先づ、君に獨乙の醫者をすゝめて、間接に君に害をしたことを詫びなければならん。明かに獨乙のものは一つも佛蘭西人には適しない。君がよくなつたのを聞いて嬉しく思ふ。海氣は君に効果があると見える。

通信のことでは、それは全く卒直だ。今モスクワの市外の一村に滞在してゐるサルツイコフは再び昨日僕に書いて寄越した。君は條件を御存じだ——一ヶ年四篇、一月、四月、七月、十

月一フォリオ三百三十フランで、毎篇二乃至三フォリオ。十月から始めて貰ひ度いといふのだ。何を書き度いか、きめて欲しい。僕はその雜誌の政治的紛擾については君に御話した。

僕は七月二十八日から三十日までは巴里へ歸る。我々は八月末頃の一日を擇んで、一切の事務を決定しよう。雜誌は十月一日(露曆)即ち十三日に出る。君は充分の暇を得られると思ふ。若し得られなければ、それは一月一日まで延期されねばならん。それを出来るだけ體よくスタツスウレヴィチへ交渉しなければならん。

彼は只今又僕に手紙をよこした。彼はジュールジュ・サンドに関する君の論文を受取つて悦んでゐるやうだ。君の示唆によつて、僕自らも一篇を草することも強ち不可能ではない。そのことについては何れ親しく君と協議しよう。僕は君の論文を見度がつてゐる。

僕は此處で、懲役人のやうに働いてゐる。二時に床に入り、三時に眠る。そして、九時に起きる。僕は仕事に目をまはしてゐる。幸にも今まで、僕は痛風に見舞れなかつた。ニツテルハウス氏は君に對してよりも、僕に對しては成功した。

僕の手紙はバリで君に届くだらう。君の海岸の所書をリュド・ド・ゾウエイに置いて行き給へ。歸つたら直ぐに僕は君へ手紙を出す。

エミール・ゾラ宛の書簡

左様なら御機嫌よう。

君の最も誠實な

イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸一、——君の安原稿は望みが薄いやうに僕は危むでゐる。僕は二三箇所訊き合はしたが、どこに行つてもすけなくことはられた。けれども僕は失望しない。

追伸二、——君が新しい雑誌の名は *Otechestvennyya Lopniski* といふ恐ろしく、長い、難しい名だ。それは『我が國の歴史』といふ意味だ。ひどく馬鹿けた名さ。それはニコライ帝の治下、新しい新聞雑誌の創立を禁じられたとき買得しられたものだ。

二十一、

ブウジイブル、レ・フレース、

一八七六年八月七日、日曜日。

我が親友、——僕が書いてゐる紙は馬鹿に気がきいてゐる、けれども僕はそれを偶然手に入れたのだ。

僕は露西亞の眞の中核から、一週間の旅行の後、昨日此處へ歸つて來た。君の手紙と、他にスタツスウレヴィチからの二通とを此處で見付けた。一切がそのとほり一落着したのは非常に悦ばしい、又君が影を追ふて、實質を失はなかつたのは全くよろしい。だがそれは僕がいはずとした眞意ではない、他の雑誌は影ではなく、『角を矯めんとして、却て牛を殺す。』の類で、仕事の増加は君を疲らしてしまつたと、いふのである。兎に角君は總て此事によつて値上げを受けてゐる。僕はスタツスウレヴィチが反對しないやうに手紙を送るとき、一切のことを説明する。

僕は田舎にゐるうちに、僕の小説を書き終つて、今それを淨書しあげようとしてゐる。僕は此處から六週間動くまい——それを淨書しあげるにはそれだけの日子を要するのだ——尤も二三日はそのうちの例外で、その日はフロオベルをクロワツセーに訪ふ筈である。

君が全く健康と英氣とを恢復して、*L'Assommoir* を完成せんことを望む。そのうちの芝居に書かれたところは總て甚だ結構で、面白い、又讀んだ *L'Assommoir* の僅かな部分だけは（譯叢に出たものを少し讀んだ。）僕をスツカリ敬服させた

御互に早く會ひ度いものだねえ！君は何時バリにくるかを、きつと僕に知らしてくれらるら

エミール・ゾラの宛書簡

うから。

註、(一)「處女地」の露語原文は一八七七年、*Messageur de l'Europe* の一、二月號に發表せられた。

君、イヴァン・ツウルゲーニエフ

二十二、

リュ・ド・ヅエウイ、

一八七七年一月十三日。

我が親友、——火曜日は、誠に都合が悪い。他の日(火曜日以外の)なら、君の御意に従はう。  
*Le Messageur de l'Europe* の一月號が丁度届いた。珍らしくも、君のバルザック論が四十頁を占め、フロオベルを非常に悦ばした君の書簡(教役者に關する)が三十三頁を占めてゐる。僕は君から一筆會食のことを知らしてくるだらうと期待してゐる、御機嫌よう。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

二十三、

我が親友、——僕は、昨日受取つた三月號に掲ぐべき君の手紙の頁數を勘定してゐた。二十一頁(四百三十五—四百五十一)あつた。彼が削つたのだか、どうだか、僕には未だ分らないが、今日手紙をやつて、きつと問ひ查す積りだ。

我々の善良なスタッスウレヴィチは、只今ひどく當惑してゐることと思ふ。三月號の彼の小説のまる一篇が削除せられたのだが、それだから彼の爲した事だとは言はれない。

君は何かの機會にクラツシツクを攻撃したことはないか？現文部大臣の下にある露西亞は神聖なものうちの神聖なものである。彼は、自分達を攻撃するものは、只革命黨ばかりであることを巧に信ぜしめた。

君は、僕や、僕等の仲間一同と、三月二十六日、即ち次の月曜、午後七時三十分カフェ・リシユで晚餐を共にする筈になつてゐることを承知してゐるだらうねえ？  
御機嫌よう。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

二十四、

エミイル・ツラ宛の書簡

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八七七年三月二十九日、木曜日。

我が親友、——僕は只今、スタッスウレヴィチから手紙を受取つたが、彼は、君の手紙から絶對に何物をも削除しなかつたと保證して、その證據に、之を添へて寄越して、原文に比較して貰ひ度いと言つてゐる。僕は今日それをする事が出来ない、今日は雑誌を或る紳士に貸してあつて、その人からは明日返ることになつてゐるのだから。だが僕はスタッスウレヴィチが僕を欺さうとしてゐるとは信じない。これは嘘だといふ證據を立てようとするれば、至つて容易なことで、彼自身がさうする方法を僕に與へるだらう。又僕は「淨書した原稿」の長さを、君が見過つたのだらうと、想像もつけ得られる。

早くお目にかゝらう——どうあつても日曜日にはフロオベルの處で僕はこのあひだ、君に傳へねばならん申出でを受けてゐる。

御機嫌よう。

君の、イヴァン・ツウルゲーニユフ

## 二十五、

パリ・リュ・ド・ヅウエイ、

一八七七年五月十八日、金曜日。

我が親愛なゾラ、——僕は未だ、全然去らうとしない、此悪魔の痛風に悩まされてゐる。然し次の週間の半ば頃には外出が出来るようにと希望してゐる。

僕は君が譚叢の原稿二つを送り返す。若し出来るなら、明日フロオベルのところへ行つて、其處で君に會はう。けれども一つ今君にお願ひがある。君は次の文句を自筆で認めた、君の寫眞を私に送つてくれないか？

A Madame Samarski-Bykharetz.

Paris, 1877. E. Zola.

此婦人はベテルブウルグに住む立派な人で君を崇拜してゐるのだ。君がさうして呉れるなら婦人はどれだけ悦ぶか知れない、そしてそのお返しに感謝でもつて君を面喰はすだらう。又まつたくその婦人はすぐれた人物で、このくらの面倒はしてやつてもいゝ人なんだ。どうぞさうして呉れ給へ、僕も御禮はいふから。

エミール・ゾラ宛の書簡

君がサン・ベルツリ行きの話はどうなつたか——行つたのか？  
御機嫌よう、左様なら。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

二十六、

サントクト・ペテルブウルグ、

一八七七年六月(九)二十一日

我が親愛な友、——僕は此處にもう二週間も滞在してゐる。まるで水の一ぱいに満ちた大釜の中に落ち込んで、外の者一同と共に其處で煮られてゐるやうな思ひがする。君は此文句を形容的に解しなければならん、といふのは、も一方から見れば、此處は、僕が毛皮の上着を持参しなかつたことを悔いてゐる程、寒さが厳しいのだから。

僕はも一月露西亞にゐて、それから一直線にブウジイアルへ行き、其處に冬まで閉ぢ籠る。僕は自分の約束を守らず、パリを立つ以前に若干の題を君に送つた。恕るし給へ。けれども

君は七月の題を獲たことと思ふ。(軍隊に關する君の論文は此處で大受だつた。君はやつぱり元

のとほり、<sup>パル・エフ・セラシス</sup>比 儔 なき流行兒だ。)八月分の題は、此處に来てから、考へがついた。若し君が「パリ新聞界の内事」を研究しようと思はぬならば——僕がフロオベルへ手紙を送つたとき、君に示唆したやうに——君が現に滞在してゐる南佛蘭西の牧歌——南人の生活狀態等——めいたものを送つてもいいだらう。それは對照となつて、最も効果があらう、又僕は、それを君が完全に仕遣けられるし、それをする<sup>こと</sup>を好むだらうと想像する。そのことをよく思ひ給へ。

君は又仕事にとりかゝつてゐることと想像する。君の健康、安息、並に佛蘭西の現狀に適ふ心の平和を希望する。

スタップスウレヴィチから君によろしく傳言を頼まれた。随分御機嫌よう。どうか奥さんによろしく。僕は佛蘭西に歸り次第直ぐ君に御知らせする。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸、——君がロンドンの友とのあの事はもう落着いたけれど。僕が豫期したとはちがつたと思ふ。

註、(1)ツラはツウルゲーニエフの忠告に従ひ一八七七年、Le Messager de l'Europe の八月號に、パ

エミール・ツラ宛の書簡

新聞界のものを書いた。

二十七、

プウジイブル(セーヌ・エ・オワズ)、レ・フレイヌ、

一八七七年九月七日、水曜日。

我が親愛な友、——僕はスタックスウレヴィチに會ふまでは、君に手紙をあげようとは思はなかつた。彼は八月の始め、此處に彼を訪ふことになつてゐたが、今まで延ばしてゐたのだ。僕はとう／＼彼に會つた、そして君の小説のことを話した。彼は之れを掲載することを悦んでゐた、けれども一八七八年にならぬうちは、掲げることが出来ない。君の話では佛蘭西で發表せられるのは十一月二十日に始まるといふのだね。若し此日時が變更せられぬならば、露譯は不可能だ。彼は君の小説を一八七七年の讀者に用意せられぬ程、今年は多くの費用を出してゐる。彼は又此新書が *l'Assommoir* のやうになりはしまいかと、やゝ懸念してゐるらしい。(檢

*Censura horum* の點から見ての話だ。)僕は彼に、今やつてゐる君の仕事は全然別な考へに屬するものだと言合つて置いた。是をよく／＼考へて、出来るだけ早く返事を呉れ給へ。僕は事

が都合よく運ぶだらうかと、大きに心配してゐる。

君はなほレタクにおいでだと思ふ。

僕は此處にもう一月とどまる。僕は此地獄の痛風におそろしくやられてゐる。(君自身、令閨共々御旺んだと思ふ。令閨へよろしく。)僕は未だ誰にも會はない。僕は一度フロオベルと食事した、彼は壯健だ、そしてクロワツサーに歸つた。

何時君はバリへ歸るか？

御機嫌よう。

君の最も誠實な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

二十八、

バリ、リュ・ド・ヅウエイ五十、

月曜日(一八七七年十一月末)。

我が親愛な友人、——此處にスタックスウレヴィチが發刊した君のバリ通信の第一卷がある。それには君の文藝觀がのつてゐる(バルザック、フロオベル、ゴンクール、ドオデエ、ミュツ

エミール・ゾラ宛の書簡

セエ、テース、レミユザ、テース、ジオルジュ・サント、ヴィクトル・ユーゴー、小ヂューマ等に関して、第二巻も程なく出る。

スタップスヴレヴィチが出版費を取りかへすや否や、一切の利益は君のものになる。その點については充分安心してゐる給へ、彼は潔癖な程正直だから。君自身でも御覽のとほり、それは美事な出版物だ。

僕は *Le Kabard* をまだ読んでゐる。此本が作者の偉大な才能をあらはしてゐることは疑ひない。僕は一筆ドオデエにそのことを書いてやらう。

僕は未だ床に就いてゐる、然し此二日間はいゝ方だ。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸——本はスタップスヴレヴィチから來ることになつてゐる。

## 二十九、

リュ・ド・ヅウエイ、

一八七八年、木曜日、朝。

我が親愛な友人——僕は一昨日君の宅へいつた、けれども君は未だ地方にゐるといふ話であつた、僕はそんなに永く君がそこにとゞまつてゐることを希望しない。そしてお互に再び往來を始めたい。兎に角僕が君に言ひ度いのは是た……最近の論文で君は程なく『ポロヴスキイ王女』のことを書くと言つた。同時に *Les Debats* の論文で、此劇の失敗を述べて、こんなことを言つてゐる『今後我々は露西亞の劇から何物をも借りないやうにしたいものだ』と。これは又餘りにひどい！『ポロヴスキイ王女』の著者は露西亞では名もない人だ。彼の第一作、*Les Danielch* は冷笑、罵詈雑言を受けずして上演せられた例がない。それなのに此處佛蘭西では彼は露國劇界を代表してゐるのだ。我々の劇はバリの觀客の嗜好に適しなからう、けれども『ポロヴスキイ王女』が彌次られたのは全然別な理由に基くのである。此劇は事實劣悪な佛蘭西劇に過ぎない。

御存じのとほり、僕は君に露國の眞のドラマを紹介する積りなんだ——僕はバりに君が歸り次第にきつとさうする——けれども若し君が次の譚叢で直ちに事の真相を指示するならば、露西亞人は何れも君に感謝の意を表するだらう。ムッシュ・ド・クロンコヴスキイ!! 斯麼人が、佛蘭西で、露國劇作界の代表者と見られてゐるのは、餘りに情ないことだ。

近いうちに會はふぢやないか? 御機嫌よう!

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 三十、

リュ・ド・ツウエイ、

土曜日（一八七九年一月十一日）。

我が親愛なゾラ——スタ……スウ……レヴィチとの談判は落着した。彼はそのことをシャルパンチエに宛て電報を打つたと、僕に書いて寄越した、そして次の条件を書いた手紙を送つた

一、原文の前半を十二月一日に渡さるれば、銀貨百五十ルプリーを送る（直ぐに出来た金額全部を送るのである）。

二、君の小説は此處では（一月八日、二十日）以前に出版しないこと、さうすれば彼は別に百五十ルプリーを送る。

僕は之でよろしいと思ふ。

スタ、スウレヴィチの資本とその確實さとは、申分がない、その點は僕が保證する。君の手紙を多謝する。僕は切符を當てにしてゐる、そして若しどうにか出来るなら、衣裳附の下稽古を

見に行けるとおもふ。夕方は僕は暇だ、又今痛風は起つてゐない。

君の非常に親愛な

イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 三十一、

火曜日朝（一八七九年一月十四日）。

我が親友ゾラ——僕は不眠の夜を過した後、臥床の中から此手紙を送る、その夜中僕は二三度窒息するかと思つた。僕は未だ之まで一度も聞いたことのない稀有な寒さを感じた。僕は無暗に残念がつてゐるけれど、只もう動かれない。君に切符を送り歸さねばならん。若し誰かにそれをやれるなら、それでよろしい、若しやるべき人がなかつたら、返して呉れ給へ、此方には貰ひてはいくらもあるんだから。僕は自分が喝采すると同様喝采する一人の友人にそれをやる。今晚はどうもなからうと堅く信ずる、けれども矢張りそれはひどく氣にかゝる。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ



三十二、

パリ、リュ・ド・ヅウエイ、

日曜日朝、(一八七九年一月十九日)。

我が親友——昨日の大成功を衷心から祝する。僕は痛風の攻撃を新たに受ければお蔭で、六日間床についてゐるので、*de visu* (眼で) それを見ることは出来なかつた、けれども僕は切符を君を大いに賞讃する人々の一人、マダム・ヴィアルドオの令息にあけた。きつとあの人は最も旺んに喝采したにちがひない。僕の爲めに四人分の榊をとつて貰へまいか(勿論金は僕が支拂ふ) 次の<sup>(二)</sup> *Opéra* 上演の一日のうちで? 若しそれが出来れば誠に有難い。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

註(一) *L'Assommoir*

三十三、

リュ・ド・ヅウエイ

我が親愛な友人——君が今僕に言つて寄越したことは馬鹿に不快だ。僕はフロオベルのこ

ちへ行つてみるやうにする。けれども僕は午後七時にたつものだから、君は明日十一時三十分頃僕のところへ来れば、大丈夫だと思ふ、來給へ。何とか善後策を講じよう。

では明日、又、

君の甚だ忠實な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

註(一) *Flaubert* の財政状態に關してある。

三十四、

リュ・ド・ヅウエイ、

月曜日、五時(一八七九年)。

我が親友——今僕はフロオベルの宅から歸つたところだ。取り急いでお知らせする。フロオベルもこんな事情の下に是だけにしてをられれば先づ結構である。彼は非常に落着いて、哲學者じみてゐる。十日もたつたら立ち上がれるだらう。

僕は大事件について彼に語つたことを、非常に感謝して、彼の決心が動いたやうに僕は思ふ

エミール・ゾラ宛の書簡

けれども、彼は自分の受くべき俸給の正確な金高を知り度いといつた。僕は餘儀なく、明日その額を電報で知らせる約束をした。七千フランから八千フラン（室もつけて）ではなからうか？ 若し君が正確なところを御存じなら、今晚のうちに一寸一言返事を呉れ給へ。君が知らぬなら僕はシャルパンチエに問合せなければならぬから。

御機嫌よう。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

三十五、

パリ・リュ・ド・ツウエイ五十、

木曜日朝（一八七九年）

我が親友——僕は只今フロオベルから、承諾したが確にそれを當てにしていゝか知り度いといふ手紙を受取つた。僕は二時頃君のところへ行つて（若し君の都合がよければ？）今後とるべき方法を協議しよう。若し君が別な時刻をお擇びなら、それを知らして呉れ給へ。僕は晝飯までは暇だ。

御機嫌よら。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

是はマザラン図書館の管理者の位置をいつてゐるのである。此事については、一八七九年六月八日のゴンクウル雑誌に次の記事がのつてゐる——『フロオベルは彼の仕事がきまつたと私に語つた。彼はマザラン図書館の管理者（職権による）<sup>カラス・オフイチオ</sup>に任命せられ、三千フランの俸給をとることになつた。俸給は數ヶ月後には増加することになつてゐる。なほ彼はその金を受けるのはまつたく苦しい、且ついつかはそれを國庫へ返還する準備に、既に着手したといふ。非常に富裕であつて、瀕死の兄弟はその上に三千フランの年金を彼に與へることになつてゐる。それと、彼が此任命と、文筆で稼ぐもので、彼は再び立ち得られやう』。

フロオベルの友人、カヴレヴスキイ氏は、何處からか、ガムベツタはムダマ・ボヴリイの著者に、公然と候補となるべきことをすゝめ、ツウルゲーニエフに對してルアンに行いて、フロオベルを承諾するよう説得して貰ひ度いと申込んだと、聞き込んだことを語つて

エミール・セラ宛の書簡

ゐる。

『然し』カブレヴスキ氏は附言する、『若し私が誤らねば、その管理者の位置は、個人的關係から、ガムベッタの友人等によつて、ムツシユ、イスナアルに約束が結ばれたのである。ツウルゲーニエフは、彼がフロオベルと會見の結果をガムベッタに書いてやつたけれども、何の答へも受け取らなかつた。彼は再度書面を出した。同様な沈黙があつた。彼はそのとき、ガムベッタが夕方など屢々行くマダム・アダンの手をかりようと決心した。當時、新聞では、此有名な執<sup>トリビュン</sup>政官が之に對してとつた無愛相な態度を書いた。けれどもツウルゲーニエフ自身の詞によつて判ずれば、ブイガロ紙が書いたやうなことはなかつた。管理者の位置は既に約束済みと知つて、ガムベッタは、ブリ／＼してマダム・アダンに答へた——『どうぞ此上催促しないで下さい——出来ないのですから。』と。夫人は自分の支持者をさがしてゐるものゝやうに、ツウルゲーニエフをガムベッタに紹介したとき、ガムベッタはその椅子から立たなかつた。それは露國の小説家はガムベッタの義眼の方から近寄つたので、見えなかつたのだつた！』（マキシム・カブレヴスキのツウルゲーニエフの回想一八八三年ロシア・ガゼット所載。）

### 三十六、

バリ、リュ・ド・ヅウエイ

月曜日（一八七九年末？）

我が親愛な友——ではさうし給へ——月曜に！オペラ・コミックは未だあるだらう？

僕は非常によいカラヴン茶と、それを入れる箱とを君に贈る。君はそれを始終いくらか宛か飲んでゐるといふ、君のお醫者は禁じてゐるけれども。

是が僕のお年玉だ、君がそれを受けてくれれば幸だ。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

### 三十七、

リュ・ド・ヅウエイ、

木曜日（一八八〇年一月）。

我が親愛な友——僕は少時此處にゐる、行つて、君と會ふことが出来ない。けれども君が昨日スタッスウレヴィチに會つたことは知つてゐる。君はその會見で満足したと信ずる。フ

エミール・ゾラ宛の書簡

ロオベルはドオデエの脚本(コ)の衣裳附稽古について或ることを言つた。(下稽古は今日行はれる。)そして僕をつれていきたがつてゐるが、その後そのことについて何事も聞かぬから、延期せられたものと想像する。君もきつとそれに行くと思つてゐる。ブウジイブルに手紙を呉れ給へな、僕が此處へ來られるように。(その爲めと、その初舞臺の爲めに)。兎に角君の知つてゐることを手紙で僕に知らし給へ、だが僕達が近いうちに會ふのは勿論である。

註・(1) Nabab

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 三十八、

我が親友——ドオデエは未だ返事を寄越さない、けれどもゴンクウルは承知の旨書いて來たが、たゞ彼はインフルウエンザに罹つてゐる爲には、或は來られないかも知れないさうだ。僕は自分が開く此送別會では彼の出席に重きを置くのだから、僕は之を金曜日(僕のたつ前夜まで)延期したい。場所はカフェ・リシエで午後七時からである。若し是で君に差支えがないなら、僕はゴンクウルに直ぐ電報をかけ、モウバツサンとドオデエに知らせる。一寸と返事を呉れ給

へ。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 三十九、

スバツスコイエ、ムツニスク市、

一八八〇年五月(十一日) 日曜日。

我が親愛なゾラ——僕のことを思つてくれることを多謝する。それは親しく手を握られたやうなものであつた。三日前、僕は此處でゴロスコ紙の譚叢を讀んでゐるうち、最も残酷な打撃を蒙つた。その悲みを君に語ることは出来ない。フロオベルは僕が世に最も愛した者の一人であつた。逝ける者は常に偉大な天才であるのみならず、又我々一同の中心を形造つた無限の鬼才である。

僕は遅くも三週間後バリに到着する。其處で御會ひしよう、そして彼が完成しなかつたが、發刊せらるべき彼の小説のことを相談しよう。

では御機嫌よう。

エミール・ゾラ宛の書簡

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

四十、

バリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八八〇年十一月二十八日、金曜日。

我が親友——僕は昨日行つて、君の戸を叩くと、君は未だ田舎にゐて、一箇月後に歸つておいでだといふことだつた。是は君が働いてゐる證據、此冬には我々に美しい、新著が與へられるといふ吉徴である。同時に僕は君に（フロオベル委員會の副長の資格で）その一員たるべき承諾書の提出を御願ひしたものだ。僕は他の人々からは、もう皆受取つた。どうぞ君のを送つて呉れ給へ。此委員會は決して集會しないことは君も御存じであるが、その下に實行委員を（二人の副長と、二人の書記、ゴンクウルと、我々が會計係としようと思ふゴロワ誌のマイエルなどで組織する。）置き、必要な手段をとり、それを全委員會にかけて、その承認を求めらるゝのである。小委員會は今日第一回を僕のところで開く。

マダム・ゾラによろしく云つて呉れ給へ。御機嫌よう、君が歸るや否や直ぐに會はうではな

いか？

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

四十一、

リュ・ド・ヅウエイ五十、

水曜日朝（一八八一年一月）

我が親愛なゾラ——只今僕は新聞で君の芝居が三十日の金曜日、即ち明後日に上演せられることを讀んだ。

僕は此二三日、大へん悪性の感冒にかゝつて屋内に閉ぢ籠つてゐる。けれどもどうか明後日は行き度いものだ。君は僕の切符をとつて置いてくれたらうね？それを受取りに人を遣らなければならんかね？僕は下稽古のことを君から一寸と聞かうと待つてゐる。スタッスウレヰイチは、シャルバンチエに電報を打たうとしてゐたが、打つたかね？

僕等は明後日會はう。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

註。(一)ツラの劇のいふのは Nana

四十二、

月曜日夕、一八八一年一月。

我が親友——僕は殆どよくなつてゐる、けれどもどんなに悪からうと、僕は「ナ、」の初日を見道はしない。僕のことを思つて呉れて有難う。本を此使ひに渡していたどうか。御機嫌よう。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

四十三、

リュ、ド・ヅウエイ、

一八八一年五月(一日、十四日)

僕の健康を親切に問ふて下すつて有難う。僕はやゝ重い容態であつた。今は少々良いけれども、なほ床を離れることはできない。醫者の言葉では、次の週間には肱掛椅子にかけられやうと

云ふ。それが僕にとつて大きな樂みだ。

君の常に親愛な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸——メダンにゐる君等は皆御變りもないことと思ふ。

四十四、

バリ、リュ、ド・ヅウエイ、

一八八一年十二月十二日、木曜日。

我が親愛な友——君はなほしばらくメダンに滞在する積り？君は此期間中一日バリへ來ないか？僕は君に會ひ度い、のみならず、僕の友人ヴェレシチャギンは、多分君も聞き知つてゐるだらうが、今ゴロワ社で、その二三の繪を展覽に供してゐるので、君にもそれを悦んでみせらう。

來るつもりなら、一寸一言書いて寄越し給へ。又何日、何時に、君のところを訪ひ、食事を一緒にして、畫を見に行かれるか知らし給へ。

エミール・ツラ宛の書簡

マダム・ゾラへよろしく。

イヴァン・ツウルゲーニエフ

## 四十五、

ブウジイブル(セイヌ・エ・オワズ)レ・フレース、

一八八二年十一月四日。

我が親友——此手紙は我々の友人Pが、君に持参する。しつかりと事を取極めたいからである。モスクワの出版者は原稿引換えに、三千フランを支拂ふことだけを承諾する。君も之を承知すると僕は思ふ、然し此處に一つまだ聞いてゐなかつた困難がある。君は今原稿全部を渡すことはできない(さうすることは挿絵を註文する爲めに必要である)。僕はそれを今から三月まで三度に渡さうと言つてゐるが、之ちや充分の計畫を愈々困難ならしめる。彼は翻譯と原文とをよく同時に出版されたにしても、印刷されたものから、翻譯者の方に競争が起るだらう。だから、原稿の第三回分を一月繰り上げて渡すのは恐らく必要だらう。するとその引渡しの時日は何時だらうね? 第一回分を十一月五日とすれば、他の二回分はどうなるか? 是を一切Pに説明し給へ。彼はそれを直ちにモスクワへ電報で知らせるから。若し結着がつかぬなら、斯うしたらいふだらう——君がPに原稿を三回分ともに、次々に送るのだ。彼はそれを翻譯するのでなく、梗概を書くのである。(丁度我々がデッケンス其他の小説を爲したやうに) 是が *Le Messager de Emoge* 一、二、三、月號に載るのである。勿論之は原文の前に出てはならない、只それは君にとつて餘り儲が少なくなるだらう。けれどもモスクワの出版者が原稿を三回に分けて受取ることを承知するだらうとは思ふが、只明かにその時日をPに知らし給へ。

御機嫌よう。

君の最も忠實な、

イヴァン・ツウルゲーニエフ

追伸——若し原稿を三度に渡すならば僕は、三千フラン以上を請求することは出来ない。只第一回分を引渡したら、總てを支拂へと主張し給へ。

## 四十六、

リュ・ド・ヅウエイ五十、

エミール・ゾラ宛の書簡

一八八二年、十二月一日。

我が親友——モスクワから数度の通知によれば、金は(君の小説の)僕に宛てゝ送られるところださうだが、それでゐて未だに何にも受取らない。検閲のことで面倒があるらしい。けれども金はもうそんなに永く猶豫されることはないと思ふ。一方翻譯者達は、仕事に取りかゝる爲めに、原稿の初めの部を手に入れ度がつてゐる。そこで君に提言することは、Pが君に會ひに来たなら、原稿の第一章を渡し給へ。若し金が本當に來ないやうだつたら、原稿も翻譯も君に送り返してくる。それに對する責任は僕がもつ。若し金がくるなら、そのときは仕事がつと進捗してゐるのである。欺しやしないから、安心してゐる給へ。諾とか否とか一言電報をかけ給へ、さうすれば、僕から君に直ぐ知らせるから。

君はまだしばらくメダンに滞在する積りか？僕は此處にもう六日居る。  
御機嫌よう。

君の、イヴァン・ツウルゲーニエフ

四十七、

バリ、リュ・ド・ヅウエイ、

一八八二年、十二月十日、日曜日。

我が親友——僕は君の手紙を受取つた、そして僕は、モスクワから受取つた千五百フランの爲替を丁度そのとき送るところだと語つた。是でよろしいか？一寸一言書いてよこし給へ。  
御機嫌よう。

イヴァン・ツウルゲーニエフ



大正九年十二月十日印刷  
大正九年十二月十五日發行

豫約

篇フエニールウツ

著作者

神田豊稔

發行者

神田豊稔  
東京市神田區表神保町十番地

印刷者

笈田吉松  
東京市京橋區新富町一丁目六番地

印刷所

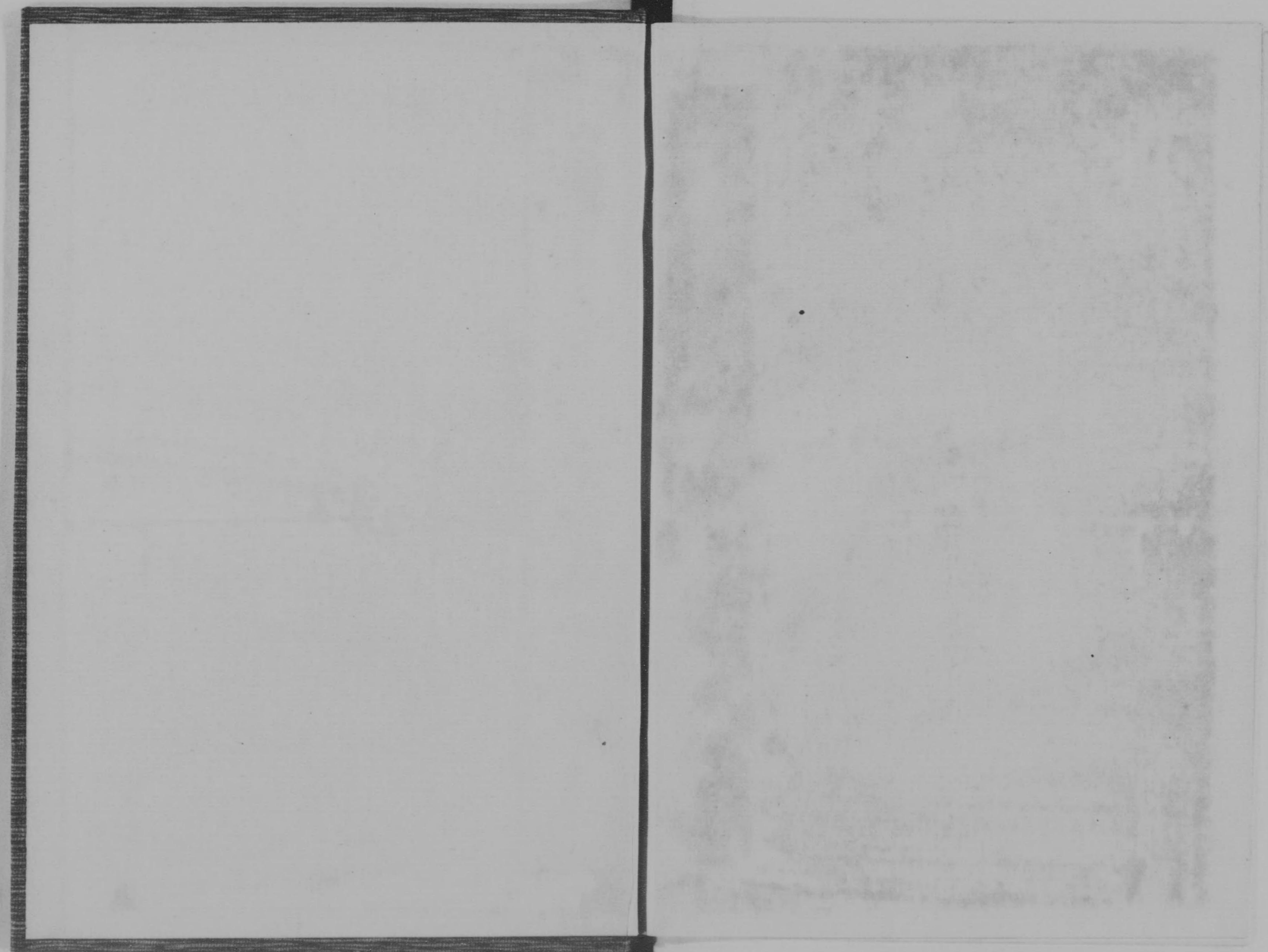
明正印刷株式會社  
東京市京橋區新富町一丁目六番地

發行所

東京市神田區表神保町十番地  
株式會社  
春秋社內  
杜翁全集刊行會

振替東京二四八六一番  
電話神田二一三八番





終